
キスなんかしないでよ

ヒロヒト.JJ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

キスなんかしないでよ

【Nコード】

N0817F

【作者名】

ヒロヒト・JJ

【あらすじ】

主人公の安佳里は、彼氏ができてもすぐにフラれてしまう理由があった。それがひとつの悩みの種。彼女がトラウマから抜け出せない限り、同じことの繰り返し。はたして安佳里はそれを克服できるのか？はたまた別の展開が？

• プロローグ

例えば自称イケメン。身の程知らずな自信過剰者。

ホントのイケメンならまだ許せるし、我慢もできる。口臭さえなければね。

でも私に関わってきた男たちはほとんど自称（――）

そんな男に限って鏡から離れない。

髪の毛1本1本に神経が通っているようなクシさばき。

まあ高校生の男子なら誰でもするようなこと。

けど、トイレに行って洗わなかった手で、自分の髪に手グシを通す男はいかなものか？

そんな元彼が過去に一人だけいた。

あと、自分の顔に酔いしれる男。

鏡の前の顔はキメ顔のつもりか何なのか知らないけど、

『あ？なんだデメエ？やんのか？』

とでも言いたげな口の形とハの字の眉。

自称イケメンなわけだから、本人にとってはそれがベストな表情なんだろう。

むろん、カッコいいだなんてお世辞にも言えない。バカっぽいだけ。

万が一にもお世辞を言っと、つけあがるのが目に見えてわかるから死んでも絶対言わない。

こんなタイプの男が本当にたちが悪い。

人の体をツンツン触りたがるし、触られて女が喜んでもんだと勘違いしている。

ここまでわかっていながらこのタイプに一度ならず引つ掛かった

私も私なんだけど。

“プラトニックな恋愛なんて存在しない”

部屋で気だるくボーっとしていると、ふとこんなフレーズが頭に浮かんだ。

別に自信を持って言えるわけでもないのに。

眠いせい？気が抜けてるせい？

自分でフツと笑ってしまった。そのせいで少しだけ正氣に戻る私。正確には、

“男の恋愛は下心と欲情のかたまり”
と言いたかっただけ。

どう省略しようが、自分でわかればいい話。

世の中の男がみんなそうとは思わない。

きつと私がろくな男とめぐり逢っていないからそう思うのだろう。

24にもなれば恋はそれなりにしてきたつもり。

年女。二回り目。最近こんな言葉を人から言われるだけで、老けたような気がするのは私だけ？

人生の四半世紀は明らかに過ぎている。私が100まで生きるなんて想像できないもの。

はつきり言ってここまででは私の愚痴。男が聞いたら

「お前に男心の何がわかる！」

って怒鳴られそう。

別に100%男のせいにしてるわけじゃない。80%程度よ。

私にも落ち度はある。それくらい自覚してる。

そう…そのために私の元から離れて行った男が幾人もいた。

幾人もいたってことは、私もそこそこモテたわけなんだけど、全

部撃沈してるから自慢にもならない。

私の最大の欠点——それはたぶん。。。

私はキスが大キライなこと。

(続く)

1話 初彼・ジョージの巻

私はベッドに仰向けになり、うつろな目で天井を見つめている。外は霧状の雨。こんな日は外出する気もうせる。

今の私がハッピーなら、こんな雨に打たれたって構わない。むしろ打たれたい。

映画のワンシーンのように傘を放り投げ、空を見上げながら満面の笑みで両手を広げる。

こんなこと、一度はやってみたいけれど、人に見られたら単なるおバカ。

化粧は流れ落ち、酸性雨に髪は痛み、5回払いで買ったコートは濡れ、道行く人に奇異の目で見られ、冷え性が再発する。

そう考える前に、まずそんな気分になれる状況ではなかった。

ここ数年、出会いと別れの繰り返し。人生、山あり谷ありの今は谷。

「（；・ー・） 3 フウ……」

仕事は休みだけれど、リラックスしてるとは到底言い難い。

私が後悔して来た過去。今もずっと継続して頭から離れない。

今日もまた、私は今まで辿って来た道のりを回想シーンのように蘇えらせていた。

初恋は幼稚園の年長組のときだけど、両思いじゃなかった。

小4のときに、リレーでいつも1番の男子を好きになったけど、それも密かに自分で思うだけ。

初めて男子と付き合ったのが中2のときのクラスメイト。

彼はバスケットで、球を自由自在に操るドリブル姿がまぶしかった。

私はバドミントン部だったから、同じ体育館でよく練習していた。偶然にも家がワリと近くて、部活の帰りに一緒になることが多い、自然と付き合うように。

だから特別これと言った告白なんてなかった。

今考えれば、当時はまだ幼い中2の男子。

面と向かって言葉を交わすなんてできないのも当然。

ただ、体に関する性の知識はまともにあったようで、これが私の最初の失恋に拍車をかけた。

熱射病になるくらい暑い真夏の帰り道、ジョージは自分の家に私を誘った。

「ウチの冷蔵庫にハーゲンダッツあるから食べようや」

アイス大好きな私が即答するのは言うまでもない。

それに当時中2の私に警戒心など全くなかった。

まさかジョージが、あんな強引にキスを迫ってくるなんて…

それはアイスも食べ終わった彼の部屋でのこと。

私たちはベッドの下に置かれたテーブルに座っていた。

ものすごく整理整頓がされている完璧な部屋。

並べられている置き物や道具が全てタテかヨコ。

ベッドやテーブルの位置はもちろん、机に置かれたエアコンやテレビのリモコン、筆記用具なども、ななめに置かれているものなどひとつもない。

「きれいな部屋だね。お母さんが掃除してくれるの？」

「いや、俺がするんだ。お母さんにやらせると、大事なもので捨てられるんだ」

「あーわかる。アタシんちもそうだもん」

お互い目と目が合って、二人で笑ったそのとき、今だと言わんばかりにジョージが私のそばに急接近。

「なあ、キスしていい？」

そう言って、ジョージは私の両肩をつかんで目を瞑った。

——え？

迫りくるジョージのくちびる。その先は徐々に尖らせてきている。ギャグ漫画のように、タコのくちびるまではなっていないけど、ほぼそれに近い。

私は彼が迫ってくるのと同じスピードで、顔を後ろに引いてゆく。目を瞑ったままのジョージは、気にもとめずに追っかけて来る。クリームがくちびるの端っこに付着しているのに気付いた私。

キヤー（ノ　　）ノ

と心で叫びながら、更に私は態勢を引いて、徐々にエビぞり状態に
…（ハ□ハ）；

よっぽど鈍感なのか、それでも彼は尖らせたくちびるで迫って来るものだから、ついに二人は床に倒れた。

「ヤダっ！もう帰るっ！」

私は怒り心頭して立ち上がる。

「何でだよ？いいじゃんか。俺のこと好きなんだろ？」

私はきっぱり言った。

「もうキライ！アタシ、いいよって言っていないじゃない！」

「ダメだとは思わなかったから…」

「だったら最初から聞く意味ないじゃない！」

「……………」

「それに鏡で自分のくちびる見なさいよ。そんなアイスで汚れたくちびるで何考えてんのっ！」

ジョージが指で自分のくちびるをなぞった。

「あ…」

「今度やったら先生に言うからねっ！」

私が部屋を出て行くまでに、彼は乱れたテーブルや置物の位置を、元のように１ミリもずらず正しく直していた。

こんな度が過ぎる程の几帳面な男でも、性欲の前には心を乱されるもんなんだと、大人になってから気づいた私。

でも彼ばかりが悪いんじゃない。

私がキスに対して異常な嫌悪感を持っていなかったら問題なかったかもしれない。

こうして私の初めての彼とはあっけなく終わった。

（続く）

2話 2人目・ノリカズの巻

子供の頃からオマセなのは女の子。

幼い恋心を抱き始めるのも、どっちかって言う女子。

それに比べて男子はいつまで経ってもイタズラ好きなクソガキ。

中学生になってもその延長がほとんど。

なのに男はいつから豹変するんだろう？

ちよつと前まで恋とか愛とか無縁な男子が、突然『オス』になる。
最初はシャイでウブなのに、慣れると図々しくなってくる。

二人目の彼・ノリカズがそうだった。

私が中3のとき、塾で知り合い親しくなった。

シャイで手を繋ぐことすらできなかった彼。

そんなノリカズが本性らしきものを現したのが付き合ってから約1か月後。

お互い高校受験を控えているから、塾内では勉強に集中している。
でも塾が終わると張りつめた頭脳が一気に解き放たれる。

「あかり安佳里。肩凝ってるだろ？揉んでやるよ」

別に私は凝り性ではないけれど、彼の気持ち嬉しかった。

「痛かったら言えよ」

「うん」

ちよつとは痛かったけど、私は我慢した。

数分経った頃、ノリカズの熱い吐息が私の耳元で感じ取れるようになった。

少しビクンと緊張が走った私。

そして次の瞬間“チュッ”という小さな音が…

明らかに私の首の後ろにノリカズのくちびるが触れた。

——え？

あまりにも不意をつかれた行動に、私は振り向きもできずに啞然としているだけ。

結局彼はそれ1回きりで、あとは真面目に肩を揉んでくれている。

これって私の思い過ごし？ 態勢を崩して偶然に触れただけ？

とにかくにも、これが変態ノリカズの出発点だった。

翌日から、彼はやたら私に触れてくるが多くなる。

「好きな人の前では鼓動が速くなるんだって。安佳里はどう？」
などど、今考えるとバカみたいに白々しい口実で、私の胸に手を当てる彼。

当時の私は抵抗もせずに素直に応じていただけ。
それがノリカズをつけ上がらせる原因にもなった。

日が経つに連れ、彼は平気で私の胸をツンツンするようになっていた。

彼にしてみればジャれてるつもりなのだ。

それがやがて制服の上から胸を軽く驚づかみするように。

でもそれだけならまだ許せた。私はノリカズが好きだったし、彼の触り方はしつこくない。

一度触れたらもうその日はそれで終わるから。

でもいよいよ許せたくない事態になったのはその約半月後。

ついにノリカズは私の大キライなキスを求めて来た。

場所は公園のブランコ。塾の帰りで辺りはもう真っ暗。

ブランコは漕がずに、二人並んでただ座っておしゃべりしてるだけ。

ちょうど話題が途切れたところ、彼はさらっとそのセリフを言った。
「安佳里。お前とキスしたい…」

前の彼のジョージみたいにな、強引に責めてくる様子はない。
真っ向から拒絶するのも悪い気がする。私だってノリカズが好き
なんだから。

だからって…何でキスしなきゃなんないんだろ？

少し迷ってから、私の下した決断を伝えた。

「ほっぺならいいよ」

「う…うん。じゃあまあ…」

少しガツカリした様子のノリカズ。やはり私のくちびるを狙って
いたんだろ。

彼はブランコに座ったまま、私のサイドに接近して来た。

私は正面を向いたまま目を閉じていると、やがてほっぺに柔らか
な感触を感じた。

——これなら許せるかな。

そう思ったのもつかの間、次に別な場所に感触があったのは私の
胸。

彼は私のほっぺにキスするとほぼ同時に、指で私の小さな膨らみ
を、まるでボタンを押すようにポチッと突いていた。

「ちよつとエッチ！びっくりさせな…うぐっ！」

何てことだろう。想像を絶することが起きた。

ノリカズの行動はあまりにも素早かった。

彼は私の肩に腕をまわし、体を引き寄せて私のくちびるを奪った
のだ！

何なの一体？これって男の本能？

それともやりたくてしょうがないのを我慢して来た蓄積？

急激に吐き気を催してきた私。

反射的にノリカズを突き飛ばした私は、自分の手の甲で何度もくちびるをぬぐった。

「ほっぺって言ったでしょ！バカ！あんたなんてもうキライツ！」

「なんだよ…それ」

「絶交だかねっ！またやったら先生に言うからね！」

たじろぐノリカズ。そのくせ、また一言よいいなことを言った。

「ごめん。悪かったよ。でもさ、お前オツパイ揉んでも平気なのに、何でキスくらいダメなんだよ」

「うるさいっ！！あんたとはもう終わりっ！私帰る！」

こうしてノリカズとも高校受験前に別れることとなった。

異常なまでのキスへの嫌悪感。

私にとって、決してプラスなことではない。

世の中の女の子はみんな素敵な彼氏との甘いキスに憧れているのに。。

ああ…あのことさえなかったら。。

私のトラウマが解消されることは、24歳になった今でもまだない。

(続く)

3話 3人目・ユースケの巻（前編）

私はキスが大キライ。

そんな事情も知らずに私に告白して来た気の毒な3人目の彼。

そう、私だって少しは相手に申し訳なく思っている。

誰だって、好きな人とキスしたいことくらいわかる。

特に男子の場合、思春期にもなると、頭の中はキスどころか、女の子とエッチすることばかり考えていたとテレビのお笑い芸人が言っていた。

とてもじゃないけど、私はキスの段階でNGだもの。

その先に進むことなんて不可能。

キスに対しての嫌悪感——あの過去の記憶。

決して彼氏がいらさないわけじゃない。むしろ欲しい。

キスさえしなければ、手を繋いでデートもしたいし、旅行も行きたい。

でもそんなことなんて叶うはずないと内心思っている私。

そんな中、私に告白したユースケは、過去の二人に比べるとずっとマシだった。

「まずは1回でいいからデートしてくれないかな？それで俺のことが気に入らなかったら、2回目のデートはなくていい」

“へー、言うじゃないの”と私は思った。

男のたくましさを一瞬感じた私は、とりあえず彼を受け入れることに。

でも実際の話、彼との初デートでは、たくましさのかけらも感じなかった。

はつきり言つてユースケは“なんちゃってナルシスト”

二人で街を歩いていても、ショーウィンドウに映る自分を見つけると、必ず髪と顔の表情をチェックしている。

更に驚いたことに、彼は自分の歩く姿もチェックする。

わざわざ来た道を5歩下がり、再び前進しながら横目でウィンドウを見る。

「何してんの？」

わかつていながら私が突っ込むと、

「うん。将来モデルになるかもしれないから、姿勢良く歩くように心がけてるのさ」

——だそうだ。

でも意外に彼は愛嬌があるので憎めないキャラ。

それに言葉にトゲもなくて気遣いもしてくれる。

ただ難点なのが、ショーウィンドウを見つけると、決まって彼はまた同じこと繰り返すこと。

髪の乱れをチェックし、再び背面歩行で5歩下がる。

しかし、この日3箇所目のショーウィンドウで恥ずかしいドジをしてしまう。

下がる途中で、後方から来る通行人にぶつかってしまった。

普通ならヤバイって思うんだけど、吹っ飛んだのは彼の方。

そう、後ろにいたのはお相撲さんだったから。

どこの部屋の力士かは知らないけど、200kgはありそうに見

える（^ー^；）

「おわーっ！（ノ——）ノ」

そんなわけで、雄たけびと共にユースケは、トランポリンのように弾き返された。

それを目の当たりにして笑いが止まらなかった私。

そういったドジな部分も、ある意味ひとつの個性に思えたので、この事をきっかけに2回目からのデートも重ねて行くことになった。そんな彼が私にキスを求めて来たのは、付き合ってからそれ程先のことではなかった。

私は考えた。過去の二人のような失敗を繰り返さないためにも、私の秘密を正直に打ち明けた方がいいと。

6回目のデートのとき、ついに私は“キスぐらい”の理由をユースケに告白した。

数分間、私の話に耳を傾けていた彼は、驚いていたと同時に笑いかけていた。

私に失礼だと思ったのだろう。顔がヒクヒクしてたけど、決して笑わなかった。

その顔を見ている私の方が本当は笑いそうだった。彼が私に言ってくれた言葉。

「そういうことなら、安佳里がキスできるようになるまで、俺が協力してやるよ」

こんな言葉を聞くと私、うるつと来ちゃった。この人に打ち明けて本当に良かったと思った瞬間でもあった。あくまでこの時だけは。

(続く)

4話 3人目・ユースケの巻（後編）

7回目のデートはカラオケ。

フリータイムで散々歌いまくった後、彼が突然言い出した。

「安佳里がキスできるようになるためには練習が必要だと思っんだ」
「はあ？」

「キスにもいろいろあるから、段階に応じて訓練すべきだと思う」
「段階って……」

ぶっちゃけ何だそれ？って思った。

不安に戸惑う私に、彼はまどろむような眼で微笑む。

こういうところがちよつとエロくてナルシストっぽい。

「心配するなよ。最初は軽く1秒だけチュツとするだけさ。いい？」
「でも……」

躊躇する私に対して、彼は更に説明する。

「安佳里のトラウマのひとつは匂いだろ？そんな匂いなんて、俺とキスすりゃいつぱんに消えるって」

いかにもキス慣れしてるような言い方。

どれほどの自信過剰者なんだよお前は？とも思ったけど、挑戦しないと私自身の進歩もない。

ついに私はコクリと首をタテに振る。

“チュツ”

それは一瞬のキス。

あっけなく終わったのに、私の体は堅く強張^{いぢは}っていた。
でもその行為が終わると、一気にほぐれた緊張の糸。

(; - -) 3 フウ

なのに、それと同時に生まれた新たな疑問。

“あれ？このさわやかな味ってナニ？”

そう。一瞬だけど確かに感じた柑橘系の味。

私の疑問をよそに、ユースケがニッコリ笑って言う。

「な。平気だったろ？」

「え？…うん。まあ…」

「どうした？何考えてる？」

タイミング良く聞かれたので、私は率直に聞いてみる。

「なんかレモンの味がしたような…」

ユースケは（「ー」）フツと笑う。

「初恋の味は甘酸っぱいものさ」

そんなセリフを吐いて自分に少し酔いしれてる彼。

きつと用意していた答えだ。

「私の初恋は子供の頃に終わったもん」

「あら（「ノーω」）ノバタツ」

ユースケがマジでこけた。

私がキスぎらいだからって、ユースケは自分が私の初恋の相手だと勘違いしていたようだ。

でも彼は状況の立ち直りが早い。

「安佳里。じゃあもういつペンキスしてみよっか？」

「Σ（ノ。）。」ノええっ？」

「今できたじゃん。どんな味かもう一度確かめてみるよ」

「いいから何をしたのか教えてよ」

「だからチューしたらわかるって」

「もうっ！（へへ）」

結局2回目のキスもすることに。

”ちつちつ”

う…長い。

時間にすればおそらく3秒くらい…

でも私には3分にも感じられた。

私が目を開けると、すでにユースケも目を開けている。

二人の目が合うと、彼のくちびるが私から離れて行く。

きつとこれはユースケの計算なんだと私は思った。

「どうだい？全然大丈夫じゃん。安佳里はキスを克服してるよ」

そう言われても信じがたい。騙されてるような気がする。

「ねえ教えて。何か食べてる？それとも…あつ！わかった！」

突然ハツと気がついた私。こんなことなんてめったにないのになるほど…そういうことか。

「お、やつと気づいたか？安佳里だつてつけてんじやないのか？」

「フレーバーリップね。つけてる友達はあるけど、私は使わないもん」

「そうなんだ。つけばいいのに」

「そのうち買おうとは思ってたの。それ何味？」

「はちみつレモンさ。ミントだと初恋の味にならないだろうと思うてね」

「そこまで初恋にこだわることないのに^_^」

「（ ; _ ; ）ムヘヘ…でもこの味と香りに抵抗はないだろ？」

「うん…そんなにはしないけど…」

「じゃやつぱり良かったじゃん。これからしばらくこの手でいう」

「！？エエエエ（。〇。 ; ）エエエエ！？」

ちょっと複雑な心境だけど、とりあえず気持ち悪くならずにキスできたのは事実。

私のキス恐怖症もクリアできる日も近いかもしれない。

私にとつての救いの神はユースケになるのだろうか？

だがそんな浅はかな予想は、8回目のデートでもろくも崩れ去ることになる。

8回目のデート。

俗に、恋人と焼肉を食べると深い仲だと言う。はつきり言って肉体関係。

そんな一般的な言われ方に当てはまらない私達が、焼き肉バイキングでたらふく食べたときのこと。

もうお腹いっぱい、店を出てからも歩く気がしなかったので、近くの公園のベンチに腰を落ち着けた。

時刻は午後7時すぎ。私の家の門限は一応8時だからまだ大丈夫。秋は日暮れが早い。空にはもう星が光っている。

公園中央にある噴水が、色とりどりにライトアップされて幻想的。こんなシチュエーション、まさにカップルにはうってつけの場面。私達も例外ではなく、そのロマンティックなムードに酔いしれていく。

ベンチでユースケにそつと肩を抱かれる私。

ゆっくりと彼の顔を見る。彼は真顔で私を見つめていた。

序々に近づく彼の顔。キスの予感。。

——く、くる！

おそらく今日もフレージャーリップをつけているのかもしれない。

だから…きつと大丈夫！

私は目を閉じて彼のくちびるを受け入れる。

でもそれが、とんだ間違いだったことに気づいた時にはすでに遅かった。

…うぐっ!!…ううう…

いくらちみつレモン味だろうが、ミルフィーユ味だろうが、更にその上をゆく強烈な焼肉臭には到底叶わなかったのである。

しかもユースケは、どっぷりこのムードに酔いしれて、私と重ねたくちびるを一向に離そうとはしない。

私の後頭部を手で抑えて更に引き寄せるばかり。

私にとっては地獄の拷問となった。

うつ…んぐう…うつ…う。

もう「う」しか言えない状態。

私に蘇って来る過去の記憶。

それが完全に呼び戻されたとき、ついに限界を迎えた。

うげええええ~~~~!!

……やってしまった。

すぐくお下劣で言いくいけれど、彼の顔面にゲロシャワー。

更に最悪なことに、その気持ち悪さで彼もすぐに“もらいゲロ”

このことで、ユースケの態度が一変。

罵倒罵倒の大ゲンカ。これまでの優しさなんて露と消えた。

結局わかったのは彼の優しさは外見だけの偽りだったこと。

だからキスは無理だって言ったのに…

なんで焼肉のあとにキスなんてしたんだろう。

終わったことはもうどうにもならない。

こうして、3人目の彼との交際も終わりを告げた。

にも関わらず、懲りない私はその2か月後には4人目の新しい彼氏ができていた。

（続く）

5話 キッチンにて

「安佳里いいー、夕飯の支度手伝ってえ」

キッチンから母の声がした。

毎度のことながら、母はいちいち部屋に來ない。

ママさんコーラスをしてるせいか、やたら声がよく通る。

私はベッドで過去の回想から我に歸り、ダルい体を起こして返事をした。

「今行くー」

キッチンに行くと、母が待つてましたと言わんばかりに私に言う。

「じゃ、あと頼むわね」

「は？何ソレ？」

「ごめんね。もうすぐ再放送が始まるから観終わったらまた来るわ」

「ええっ？再放送なら1回観たんでしょ？」

「何回観てもウケるもの」

「はあ？ウケる？韓国ドラマとかじゃないの？」

「違うわよ『爆笑！hey力モン』のアンコール放送よ」

「あゝあれ」

私はため息をついた。

世間では視聴率の高いお笑いバラエティ。

私はテレビを観ない主義ということもないけれど、あまり興味がなかった。

この数年、彼氏ができてはすぐ別れ、喜びと落胆の繰り返し。

デートに明け暮れていた時間も多かったし、失恋の痛手から部屋で放心状態の日も少なくなかった。

テレビの連続ドラマなど観れる余裕もないし、お笑いに興味もない。

それなのに、母は私と真逆というか、お笑いが今でも大好き。
ある意味、私も母のように脳天気になれたらどんなに良いかと思
うこともある。

「野菜もお肉もお魚も買って来てあるから、メニューは安佳里に任
せるわ」

なんといい加減さ…… - ；

何を作るかも決めてないのに、材料だけ買って来れる人って信じ
られない。

そんな私の表情をおそらく読み取ったのだろ。母が一応言い訳
をする。

「急いでて考えるヒマがなかったのよ。材料さえあれば、とりあえ
ずどうにかなると思って」

「まあどうにかなると思うよ」

私は感情のない冷淡な返事をしたけど、母の心はもうリビング。
キッチンにちっちゃなテレビでも置けばいいと一度言ったことが
ある。

けど、母はすでにそのことを父に嘆願して、あえなく却下された
そう。

「あ、もう時間だわ。確かトップには“チビりおぱんつ”が出るわ
じゃヨロシク」

母が早足で、リビングのテレビ前のソファにドサツと腰を下ろし
た。

母が言った“チビりおぱんつ”とは、今世間で大人気中のお笑い
ピン芸人の名前。

一発ギャクが有名で、芸名のわりには下ネタは言わないらしい。
あくまで私はテレビも観ないし、お笑いに執着もしていないから、
これは人から聞いた情報だけ。

私はキッチンでひとり、黙々と作業を進める。

最近、肌寒くなって来たから、シチューでも作ることにした。
鍋に煮込んだ物たちを眺めながら、私はふと思った。

そう言えば、リュウヤにもシチュー作ってあげたことが…

私の心は再び過去の回想シーンへと誘われて行く…
リュウヤ… 4人目の彼。

（続く）

6話 4人目・リュウヤの巻（前編）

失恋しても相談できる友達が私にはいなかった。

中には逆に相談して来る子もいたけど、私は無理だと言って助言を避ける。

結局その子は私の友達に相談する。

友達曰く、

「そんなの新しい男作りやいいだけじゃん」
たいていどれもこんな答え。相談できるはずがない。

ユースケと別れて孤独になっていた私は、下校途中に妙な男と出会う。

帰宅するには公園内を斜めに横切った方が近い。

私がちようと公衆トイレの前まで来ると、テニスラケットを持ってボールの壁打ちをしている男子がいた。

服装はガクラン。たった一人のクラブ活動でもないらしい。

見た目、高校生には違いないけど、行動が普通とは思えなかった。

トイレの壁に向かってボールを打ち、跳ね返ったボールを顔で受けている。

私はつい立ち止まって見入ってしまった。何度見ても同じことの繰り返し。

普通ならこんなイカレタ男なんか無視するんだけど、よく見るとなかなかのイケメン。変態っぽくもない。

私は見ているだけにはとどまらず、話しかけてしまった。

「それって何の練習？」

その男子は壁打ちをやめ、私の方へ向き直りながら額の汗をぬぐった。

「テニスの練習だよ」

「ごくごく普通の回答だけど、意味をなさない。」

「じゃあ、なんでボールを顔で受けてるの？」

「……」

彼はすぐには答えずに、私に質問返しをする。

「僕のこと、頭おかしいと思ってるだろ？」

躊躇なく答える私。

「うん」

フツと笑う彼。

「君もヘンな子だね」

予想外の言われように驚く私。

「はあ？私がヘン？」

「まあ座ろうよ。僕も疲れたし」

「座ろうったって、ベンチも何もないじゃない」

「どこでもいいんだ」

そう言って、彼は土の上の地べたに体育座りをした。

「君は座らないの？」

「無理。私ミニスカだし、下着汚れるもん」

「ふーん。地ベタリアンじゃないんだ」

私はそんな言葉は無視した。

「で、私がヘンな子だってどういう意味？」

私は改めて彼に問いただす。

「だってさ、僕がこんなことしてりゃ誰だって避けて通るじゃん」

———「どうやら自分でもわかってるようだ」 - ;

「なのに君は、僕に話しかけて来た。ヘンじゃないか。危険かもしれないのに」

「おかしい人だとは思ってたけど、危険な人だとは思わなかったけど？」

彼はまたフツと笑った。

「なるほど。それは正しい。僕はそんな凶暴じゃない」

私は更に付け加える。

「それにヒマだったからよ。誰か一緒にテニスする相手いないの？」

「必要ないんだ。打ち合いの練習じゃないし」

「そこが理解できないんだってば…（＾―＾；）」

「理解したいの？」

「別にどうでもいいんだけどさ。でも一人で壁打ちするんなら、こんなところじゃなくて、スカッシュに行った方がいいんじゃない？」

我ながら良い提案だと、内心自分を褒めていた私。

「スカッシュなら一度試したよ。でもあれはちよつと苦手かな…」

「どうして？」

「イヤな思い出がある」

「どんな？」

彼は私をあまり見ずに、ラケットをいじくりながら話す。

「あれって、いろんな角度から跳ね返るもんだから、後頭部に当たって脳震盪のうしんどうおこしちゃったんだ」

「○（＾　＾）○キヤハハハ　ドジ！」

「顔面にもくらって鼻血出したし」

「そんなの、今だって同じことしてるじゃない？」

「この球は軟式だから鼻血なんか出ないよ」

「だから、何でそんなことやってるのか意味わかんないんだってば」

彼はスクツと立ち上がった。

「君、部活は？」

「今はやってない。中学のときはバドミントン部だったけど」

「じゃあ君もやってみる？」

「ヤダ。何で私がわざわざ顔面にボールを当てるのよ！」

「違うよ。ラリーしようかって言ってるんだよ。やってたんだろ？」

「だからバドミントンだって！テニスなんかしてない」

「同じようなもんさ」

「違うもん」

「同じだって」

「違うよ。だいいち、あんたがやってることって、ただの顔面キャッチゲームで、テニスじゃないじゃん」

「うーむ…あー言えばこー言う人だなあ」

「なんですって!？」

なんだか私が彼の思惑通りにノセラレテいる感じ。

それなのに、自然に弾む会話のキャッチボール。

「ねえ、ラケットひとつしかないのに、どうやってラリーができるのよ？」

「できるさ。僕が壁に向かってボールを打ったら、すぐに君にラケット渡すから、君は跳ね返った球をまた壁に打てばいい。その後すぐにラケットを僕に手渡しだけさ。その繰り返し」

「……それマジで言ってるの?」「ー」；ヒヤリ

「簡単だろ？」

「無理に決まってるでしょ!そんなのできたらプロよ!」

「そうかなあ…?」

「やったことあんの?」

「いや、ない」

「(ノ——)ノコケッ!」

呆れるほどの天然。ある意味異常?でもそれが逆にとても楽しく思える。

別に彼がふてぶてしいわけでもない。

おっとりした口調、たまにチラッと優しい目で話しかけては、すぐに目をそらすシャイな部分。

そんな仕草が私の心をなぜかくすぐった。

——次の日、更にまた次の日。

彼は同じ場所で同じことをしていた。

そして私もそこへ毎日足を運ぶようになる。

いつしかその場所が、自然と二人の待ち合わせ場所になり、私たちは付き合うようになっていた。

自分を飾らない彼。威張らない彼。ごく自然に生きているような彼。

私にとって、今までの彼の中では一番話しやすい存在。

名前はリュウヤ。

彼になら言える。いや、今のうち言っておかなければならない。後になればなるほど言いづらくなるし、彼に与えるショックも大きいかもしれない。

告白してしまおう。そしてスッキリしよう。

それでダメならもう恋なんてしない。

私は決心した。次のデートで彼に告白する。

彼とキスができないことを。求められても無理なことを。

——そしてそのトラウマの理由も。

（続く）

7話 4人目・リュウヤの巻（後編）

私は人に影響を受けやすい。

地ベタリアンなりユウヤの習慣が、私に伝染するのにそう時間はかからなかった。

さすがに土の上は無理だけど、アスファルトの上なら、道端でも道路でも、どこに座っても平気になっていた。

それだけ私と彼が打ち解け合うようになっていたのは確か。

前彼ユースケに続いて、ついに話した私のヒミツ。

私はキスが苦手…というかできないこと。はつきり言っただけキスが大キライなこと。

そしてその理由を話してる最中にも、リュウヤの反応が気になって気になって、内心ドキドキものだった。

「私、やっぱりヘンでしょ？バカみたいでしょ？あきらめるでしょ？」

全てを告白した後、私は開き直って彼にそう言った。

「ヘンだけど、あきれたりはいしないよ。僕もヘンだって人によく言われるし」

彼は育ちがいいのか、私と付き合ってから自分のことを“俺”とは言わない。

「でも、こんなんじゃ私と付き合える？」

「別にキスさせるなんて一度も言っていないだろ」

「そうだけど…リュウヤはそれでいいの？」

念を押して聞いてみる私。

「別に…平気だよ。人がイヤがることなんてしたくないし」

「ホントに？」

「ああ。僕は安佳里といるといつも楽しいから、それでいいや」

私の心の中にどれほどの花が一瞬にして咲き乱れたことが、計り知れないほどの感動的なリュウヤの言葉。

—— 今度こそ大丈夫。キスなしでもデートが続けられる。

その日をきっかけに、私は彼だけの可愛い女になろうと思った。今まで着る気もなかったロリくさいワンピースを着たりして、彼好みな女になろうとしたし、おしゃれにも随分気を使った。

でも、やはりそんな付き合い方ではやがて限界が来るもので。。日を追うことに慣れ合いになったというか、私の方が彼に対して初々しさもなくなり、また無防備にもなっていた。

そう…ここまで来ると別れも意外に早かった。

ある寒い日の夕方、私はリュウヤを家に招いた。

私の両親は、応募ハガキで当たった温泉旅行で留守。

今夜、自分で作るうとしていたシチューを一人で食べるのも寂しい。

リュウヤの家は特に門限もなく自由。

いつも夕飯前には終了するデートも、この日はそのまま私の家へ…

キッチンで作ったシチューをわざわざ私の部屋まで運び、二人で食べた後のこと。

私達は、夕方やった壁打ちテニスで汗をかき、体もベタベタのまま。

シチューを食べると更に汗ばんで、私的にもう限界だった。

「悪いけど、私シャワー入ってくるね。リュウヤはどうする?」

「着替えないし、帰ってから入る」

と、まあここまでは普通の会話。うかつだったのはシャワー後の私。

慣れ合いとは恐ろしい。

バスタオルを体に巻いた私は、気にも留めずに部屋で着替えをしてしまった。

同じ部屋に彼がいるにも関わらず…

彼は目をそむけていた。すぐに雑誌を手にとって見ていたが、明らかに読もうとしていたんじゃないのがわかる。

でもこの時の私は本当におバカで、リュウヤがエッチなことを仕掛けて来るはずがないと信じていた。

そう、確かにリュウヤが襲って来るようなことはなかった。むしろその逆。

私が思っべきことは、信じる信じないの問題ではなかった。

それに気づいたのは彼の些細な言葉。

「ちょ…ちょっとトイレ借りるよ」

そう言っただけで立ち上がった彼の両手の先を、私は見逃さなかった。リュウヤは私にバレないように、さりげなく自分の股間を隠していたのだ。

そして彼が私の横を通り過ぎたとき、その事実がはっきりと確認できた。

つまり…

——彼のアレが勃起していたということ。

私はその時初めて自分のバカさ加減に気がつくことになる。

リュウヤはずっと我慢してきたんだ。

私がキスがキライだからって、私に合わせて来ただけなんだ。

本当はキスだって、それ以上のことだって、絶対したいはずなの

に。。

それなのに彼はずっとずっと一言も言わずに我慢してたんだ。

この場面だって、私が挑発するような着替えに我慢の限界を超えて、彼はトイレを口実に出て行った。

きっと今頃リュウヤはトイレで…

ヤダ（　　）私、何想像してんだろ…

何にしても、この原因は私。

リュウヤが私といたら、きっとストレスが溜る一方。

彼は優しいから、この先も決して私を求めるようなことは言わないはず。

それなら…

それならもう、私から身を引くべきなのかも…

リュウヤが苦しまないうちに…

翌日、いつもの公園で私はリュウヤに別れを告げた。

「もう私たち…終りにしようよ。。いろいろごめんね。。」

「……………」

彼は何も言わなかった。

すぐに彼に背を向けて、早足でその場を歩き去る私。

彼の視線をいつまでも背後に感じてはいたけど、呼び止められることはなかった。

キスもできない私なんて、もう恋をする資格なんてないんだ。。

（続く）

8話 私のトラウマ〜序章〜

「ちょっと安佳里。何ボーっとしてんの？」

「ハッ（。〇。；）」

母が知らないうちにとなりにいる。

私はリュウヤとの回想シーンから我に返った。

「ちゃんと火加減見てたの？心ここにあらずって感じよ？」

まさに凶星（ - ；

「…ちよつと眠くなっちゃったただだよ」

と、一応ごまかしてみる。

「じゃあ立ったまま寝てたってわけ？」

「寝てないもん。眠かったただけだもん」

「でも意識なかったみたいよ。目え開けて寝てたんじゃないの？」

「お母さん、それ怖いじゃん」

「寝てるあんたは怖くないでしょ。怖いのはこっち」

全くこの母親は娘の気持ちなどわかっていない。

幾度もの失恋に、打ちひしがれている私の事情など知りもせず、ただのほほんと好きなお笑い芸人につかれてるだけ。

普通、元氣のない娘の様子を見たら、

『どうしたの？具合でも悪いの？』とか、

『何か悩みごとでもあるの？』とか、母親なら察知するもんじゃないの？

そんな私の苛立ちをよそに、母が突拍子もない話を切り出した。

「あ、そうだ。明日ね、銀蔵おじさんが来て1泊する予定になってるから」

「！？エエエエ（。〇。；）エエエ！？ギンゾーがあ？」

「これっ！おじさんと呼び捨てにしないの！いくら苦手だからって
「本人の前では言わないよ！でも何で来るの？」

「だってほら、タエおばさんに先立たれちゃってから、おじさん独
り暮らしでしょ。さびしんぼうなのよ。最近は親戚の家を渡り歩い
てるみたいなの」

「迷惑な話」

「可哀そうじゃないの。明日の晩はジングスカンにするわね」

「Σ―11（；）――1ええっ？何でよおお？お母さん、私
へのイヤミ？」

そう。私はジングスカンが大嫌い。でもそれにはちゃんとした理
由がある。

何を隠そう、そうさせたのは銀蔵おじさんなのだから。

そしてそれがまさしく、今も続く私のトラウマの発端にもなっ
ているのだ。

ギンゾーは元漁師。昔、大シケの海に吞まれて行方不明になった
ことがあるそうだ。

でも、こういう人間に限って悪運が強いもので、奇跡的に航行中
の船に拾われたらしい。

こんな話を子供の頃に聞かされていたから、私はギンゾーがうち
に来るたびいつも、

――海で死んじゃえば良かったのに！と思っていた。

「お母さん、ギンゾーはもう年寄りだから魚の方がいいよ。お寿司
でもとうとうよ」

「ダメよ。お父さんから言われたことなの。二人とも大好物でしょ」

「ジングスカンなんて、北海道の人が食べるもんでしょ」

「安佳里、それは偏見よ。それにお父さんもおじさんも北海道生ま
れだから仕方ないでしょ。お肉も柔らかいし、お年寄りでも平気よ」

「（へ）もぉー！」

私はキッチンから部屋に戻った。我が家は父が帰宅するまで夕飯は食べない。

明日は憂鬱になる。彼氏がいたら外食するのに今はいない。最悪なタイミング。

あゝ明日どうしよう？部屋から出ないでおこうかな…
友達の家に泊まりに行こうかな…

明日のことをあれこれ考えていると、ギンゾーの顔まで浮かんできた。

思い出したくもない事なのになぜだろう？
奴の顔が浮かんでくると、それにまつわる過去の記憶までもが…
これってやっぱりトラウマのせい？

それは私がまだ、物心ついたかつかないくらい。
年齢にすると3歳頃の出来事だった。

（続く）

9話 私のトラウマ〜幼児期〜

幼かったあの頃の私は、どんな理由で親戚一同が我が家に集まっているのか見当もつかなかった。

記憶にあるのは明らかに夜で、人数は15人以上のオジサンばかり。

まあ当時3歳の私からしてみれば、全ての男がオジサンに見えるわけだけど。

とにかく、その場はジンギスカンパーティーで賑やかだったことは確か。

お茶の間と隣の和室のふすまを外して部屋の仕切りを外し、長いテーブルを二つくっつけて並べてある。

そこに座ったどのオヤジたちも、酔っ払って声がデカいし、笑いも豪快。

そんな中、マスコットの存在の私は、みんなから頭を撫でられたり、お菓子をくれたりと、申し分のない扱いだった。

だが悪夢はそこから起こる。

「安佳里。こっち来いこっち来い」

まさにそいつがギンゾー。

すでに酔ってゆでダコのように顔が真っ赤のギンゾーが、私をしつこく呼び寄せる。

子供ながらに、何となく身の危険を感じていた私。その思いは見事に的中する。

「ほら、オジちゃんが抱っこしてやるぞ。焼酎飲むか?」
「ぶあっはっはっ」

全然面白くなかった。しかも膝の上に抱っこされ、ギンゾーの口から超酒くさい二酸化炭素をモ口に浴びる不快感。

私は逃げようと必死だった。

「いいからオジサンと一緒にいろって。この子ホントめんこいわなあ。もらって帰りたいくらいだ」

そう言って、私の頬にチューをした。

「やだー！」

膝の上でジタバタしても、大人の抑え込む力には叶わない。

そんな私の姿を見て、更にオジサンの行動はエスカレートする。

「ほら。こんなにほっぺがポニョポニョだ」

そう言って、私の顔に怒涛のキス攻撃。

左右に首を振って抵抗する私を見て、余計に喜んでいる感じ。

——ジジイ！てめえSかよっ！

と今なら言えるけど、3歳当時の私にはSもMも知識がない。

抵抗すればするほど、キスの拷問をやめないギンゾー。

酒臭さも手伝って、気持ち悪くなって来る。

そこにトドメの一撃が。

ギンゾーの口が、ついに私のくちびるを吸い込んだのだ。

酒臭さと同時に、強烈なジンギスカン臭。ギンゾーの口のまわりに付着したギトギトの脂。タレの味。

私はその場で吐いてしまった。

なのに、ギンゾーはその理由を自分のせいにはしなかった。

「子供はこんな賑やかな環境には興奮するからな。早く寝れば大丈夫」

——てめえ憶えてろよ！

と、当時ここまで口は悪くなかったけど、それと似たような感情があったのは事実。

現に私は、このあとすぐ復讐に成功する。

一旦、寝たと見せかけて、再びそつと起きて宴会の席を覗いた私。ふと、床に誰かが無造作に脱ぎ捨てた黒い靴下を発見。

瞬時にひらめいた私は、その靴下を拾ってギンゾーのそばへ。

「おじちゃんおじちゃん」

と、肩を叩く。

「お、安佳里どうした……ふがつー！」

振り向きざまのギンゾーの口の中に、拾った靴下を思いきり突っ込んだ私。

「、；；、；；、（；；；；、；（ぶほおおおー！」

ギンゾーは靴下を吐き出したものの、むせて咳が止まらなくなっている。

私はこの時、子供ながらに復讐の達成感を肌で感じていたのである。

しかもまだ3歳の私。幼児のすることなど、誰も叱りはしない。逆に親戚一同、笑いこけていたほど。

唯一、母親だけが注意をする存在のはず。でも一番ウケまくっていたのが母。

涙を流しながらテーブルを叩いていた。

……まあ、元々こんな母親だし。

私のトラウマはこんなところから生まれた。でもこれだけじゃない。

この5年後、私のキス拒絶反応を決定づける出来事がまた起こる。
(続く)

10話 私のトラウマ〜少女期〜

それは私が8歳の誕生日を迎えた冬の朝。いつものように、誘いに來た友達4人と登校途中での出来事だった。

溶けない雪が残っている舗道の脇。

その雪とアスファルトの境目に思わず発見してしまったもの。

——それはデカうんこ。。

へ（ へ（ キャアアアア〜！！

動物の仕業か、あるいは人間なのか、子供ながらに議論する私たち。

だが所詮結論など出せないまま、私たちはただキヤーキヤー騒ぎながら、うんこをチラ見しつつ通り過ぎる。

「まだホカホカだよ？」

「ヤダあそんなこと言わないでよーふみちゃん」

とまあ、そこまではまだ良かった。問題はこのあと。

一匹の白い子犬が、可愛い声でワンワンと吠えながら、しっぽフリフリこちらに向かってやって來た。

首輪をしていない。たぶん人慣れした野良犬なのだろう。

私の友達の一人が「こっちおいで」としゃがんで両手を差し出す。なのに子犬は途中でコースを変更したのである。

——え？

誰もが目を疑った。

その子犬は、道端の”ホカホカうんこ”に向きを変え、そばまで行くと、パクツと食べてしまったのだ。

Σ—11（　　；）——1ひええええええ！

しかも子犬はすぐに向き直り、私たちの元へ走つて来る。

へ（　□　へ）　ギエー！！！

もう可愛い子犬でも何でもなし。
一目散に逃げるのみ。

何メートル走っただろう？100メートルは走ったかもしれない。
息切れした私達は、ゼエゼエ言いながら後ろを振り返る。

すると、ちょうど脇道から現れた3人の女子中学生が、その子犬と遭遇していた。

「（　　）　キャー♪可愛い〜！おいでおいで〜」

中学生の一人がしゃがんで子犬を抱っこする。

「ヤバイよあれ〜」

と私が呟いたときはもう遅かった。

子犬は喜んで、女子中学生の顔や口までぺろぺろと舐めまくっていたのだ。

私は啞然とした。

だって…1分前にはうんこを食べていた子犬なのだ。

それも知らずにその中学生もお気の毒。。

その光景を見て吐き気を催した私とは対象的に、友達のふみちゃんは大ウケ。腹を抱えてのバカ笑い。

こんな人もいるんだ。。

とにかくにも、私がキス嫌いになった決定的瞬間でもあった。
それ以来、今でも想像してしまうこと。

もしキスする相手がその直前に、どんなでもないゲテモノを食べていたとしたら？

そう思うのと同時に、うんこを食べた犬の記憶が必ずフラッシュバックされてしまう。

更に言えば、そのフラッシュバックは妄想に発展し、その子犬が私目掛けてキスをせがみにやって来るのだ。

もう尋常な精神ではいられない私。

キスをされると吐き気がするのは全てそのせい。

こんなわけで、私は8歳でキスとジンギスカンと犬が嫌いになり、それは今でも変わらない。

（続く）

11話 5人目・キミヒコの巻(前編)

私のロストバージンは17歳の夏。

先輩や友達に聞いても、あるいは雑誌やコミックを読んでも、この時期がベストだと当時の私は思っていた。

なので、17歳になったばかりの頃の未経験な私はとにかく焦っていた。

今思えばロストバージンなんて、早いも遅いも関係ないのに、当時の友達はこの夏休みに次から次へと脱皮してゆくのだ。

「えっ？安佳里まだバージン？ごめんねー私の方が先で（*・・・*）ウフフフ」

と、妙に自信に満ちた不敵な笑みを浮かべられる。

しかもそんな言われ方をされると、早くバージンを捨てないといけナイような気もしてくる。

私はキス恐怖症だし、余計に焦り始めていた。

——もしかしたら私、一生結婚できないかもしれない。。

そんな私の心の動揺を見抜いた男子が一人いた。

それがキミヒコ。クラスは違うけど同じ学校の同級生。

小学校時代に、2年間だけ同じクラスになったことがあるから、顔は覚えていた。

下校中、私が女友達とサヨナラを言って別れると、すぐに彼は近づいてきた。

「よっ！お前、俺のこと覚えてるか？」

と、いきなりこんな切り口から会話が始まり、私は立ち止った。

「うん…たぶん知ってる」

「たぶんかよー！？」

「印象薄いつてゆつか…あんまし私としゃべってないよね？」

キミヒコは体裁悪そうに頭をポリポリ掻いた。

「だな。昔は俺、女嫌いだったから、ほとんどの女子と口利かなかつたんだ」

なぜ女嫌いなのか理由を聞く興味もなかったから、私は別な質問をしている。

「じゃあ今は女好きなの？」

その答えは即答で返ってきた。

「ああ。なんでか知らないけど、どんな女も可愛く見えるんだ。例えばお前でも」

「なにそれ（、へ＃）」

「ワリい。悪気はないんだ。まあ、これが思春期ってやつなのかな」

「自分で勝手な結論言わないの（…）」

一体何を考えているのか、つかみどころのないキミヒコ。

そんな彼が次に切り出した言葉は、いきなり思わしげなセリフ。

「歩きながら話そう。実はちょっとお前と話したかったんだ」

「えっ？」

私はドキツとした。もしかしてそれって、私への告白？

そんなかすかな予想をたてながら、私達は並んで歩き出す。

「ぶつちやけ言うけどさあ、お前さあ…」

はて？告白にしては『お前さあ』とは思いきり不自然。

私は無反応でキミヒコの次の言葉を待つことにした。

「お前さあ…そんなに焦んなよ。後で後悔するようなことは絶対すんなよ」

一瞬ビクツとしたけど、なんとか気づかれないように冷静を装う私。

「何のこと言ってるの？あんたに私の何がわかるの？」

「お前、まだバージンなんだろう。早まって無駄なことするなってことさ」

「どうして私がバージンで決めつけるのよ？」

「だって何日か前、直美が言ってたし」

「Σ―11（；）―1えっ？」

直美とは、下校途中でさっき別れた友達のこと。

彼女はキミヒコと同じクラスだから、適度な会話はしてるのだろう。

それにしても直美ったら、何で私のことを…（へ）ムッスー！

「お前さ、今まで全然彼氏いなかったのか？」

「いたけどみんな別れた」

「みんなって…同時に何人とも付き合ってたのか？」

「バカ！時期はそれぞれズレてんの！」

「うーん。。」

なぜかキミヒコが考え込んだ。ホントにわからない男。

「じゃあ聞くけどよ。付き合ってた男たちとは全然何もナシか？」

「そんなのないよ」

「一人も？」

「うん」

「そんなんじゃ付き合ってたって言えるのか？」

「なんでよ？エッチしなきゃ付き合ってたって言えないの？」

「そこまでは言ってるええよ。じゃあキスもしてないのか？」

「キスは……したけど」

バカな私。なんでキミヒコにこんなこと言ってるんだろ。。

「キスは許せても、エッチは許さなかったってことか？」

しつこく質問攻めをするキミヒコ。お前はエロ雑誌の取材記者か！
「もうどうでもいいじゃない！私にとっては許す許さないの問題じ

「やなかったの！」

「…は？どういうことなんだよ？」

いけない…また説明を求められる言い方をしてしまった（ - ；

「あのね、別に私は誰からもエッチは求められてなかったの！そんな野獣みたいな人、自分の彼氏には絶対選ばないもん私！」

「じゃあ何でみんな別れちまうんだよ？」

「それは…」

「それは？」

「もうこれ以上言いたくない！」

私は早歩きでキミヒコより5、6歩先に出た。

そのスピードのまま50メートルほど歩くと、後ろからキミヒコが駆け寄って来る。

「わかった。もう何も言わなくていい。俺が言う」

「えっ？」

歩くスピードをゆるめて、私は横に並んだキミヒコに振り向く。

「安佳里。俺と付き合おう」

「！！！！」

（続く）

12話 回想の狭間

突然ケータイからの着信音に、私は昔の回想シーンから呼び戻された。

「何よもう……」

枕元に置いてあるケータイを取ることでさえ、なんだかだるく感じる。

通話の相手はさゆみだった。彼女は私の愚痴友。

お互いの愚痴を交代に言いあつこして、ストレスを軽減している仲。

その効果は絶大というには程戸遠いけど、ため込むよりはかなりマシ。

今日の主役はさゆみで、私が聴き役。

そこで私はひらめいた。明日の愚痴の主役は私。

どうせ聞いてもらうんならケータイじゃなく、さゆみを誘って夜はどこかで一緒にごはんでも食べよう。

とにかく明日の夜は家にいたくない。

そのことを伝えると、さゆみから一つ返事でOKボイス。

これで明日の晩はギンゾーから逃れられる。

しかし世の中、そんなに何でもうまくはいかないもの。

翌日の夜になって、突然さゆみからドタキャンの連絡が入った。

同僚の仕事ミスにより、連帯責任として、同じ部署の人間全員が残業らしい。

すでに待ち合わせ場所に来ていた私は一人置き去りに。。

——まあいいわ。このまま家に帰らなきゃいいんだし。

母には朝のうち、友達と食事する約束があると言っているから特に問題もない。

ただ、女一人で夜の夕食というのもなんだか寂しい。

私一人では、繁盛している賑やかなお店に入る勇気などない。と言つて、小さな居酒屋のカウンターや屋台も好きじゃない。知らない人と隣同士に座ったり、顔を合わせるのが嫌いだから。

——どこか目立たないバーにでも行こう。お腹も特別減つてるわけじゃないし。

メイン通りから、路地裏に入り、もうすぐ行くとラブホ街に出るという一歩手前にのスナックに足を運んだ。

薄暗いけど、なんだか照明の明るさが幻想的で心が落ち着く感じ。小さい音量で店内に流れるジャズがとても心地が良く癒される。お客さんはまだ誰もいないけど、それは当然のこと。

私がごはんも食べずに来たから時間がまだ早すぎるのだ。夜はこれからだもの。

「いらつしゃいませ」

感じの良さそうなバーテンが、物静かに挨拶する。

今日の私は誰とも話はしたくない。一人で飲んでいたい。

そんな気持ちも込めて、バーテンダーをお願いしてみる。

「あの…すみません。カウンターじゃなくて、あっちの隅の席に座りたいんですけど」

不思議な顔ひとつせず、彼はにこやかな微笑みで返答する。

「かまいませんよ。一人で静かに飲みたいんですね。どうぞご遠慮なく」

「ありがとう…」

何も食べずにアルコールを飲むと、一気に酔いがまわる。

1杯目のジントニックで、自分の頬がほてり出したのがよくわかる。

どうやら私は妄想壁があるらしい。

この場面で素敵な男性が現れたら…

そして偶然にも、私と同じキスが嫌いでもトラウマになっている男性がいたとしたら…

もしそんな人が世の中にいるならば、その腕にギュッと抱かれた
い…

もちろんキスなしで。でも私に対する愛情はたっぷりです。

こんな常識から外れたことを思ったのは、何も今だけに限ったこと
じゃない。

ずっと過去からそう思っていた。心の奥ですつと。

経験がないわけじゃない。

あのときも…17歳のあのとき。

当時の彼・キミヒコによってそれが現実の出来事になったあの日…

私は2杯目のシングルモルトを飲みながら、再び回想の世界へ深く
落ちて行った。

(続く)

13話 5人目・キミヒコの巻（後編）

ロストバージンした夜、私はそのまま朝までキミヒコの腕まぐらで寝ていた。

後で後悔するようなマネはするなと言ってくれたキミヒコ。

無駄にバージンを捨てるなと忠告してくれた彼本人が、結果的には私を抱いた。

でも私は別に後悔などしていなかった。その時点では。

当時エッチに誘ったのはたぶん私から。

彼と体を重ねる30分前までは、彼自身でさえ私を抱く気などなかったはず。

なのになぜ私がそんなことをしたのか？

それは私の前彼・リュウヤとの別れで学習したから。

リュウヤだつて私を抱きたかつたはずなのに、それを口に出さずにこらえていた。

思春期の男子なら、絶対自分の好きな女の子とヤリタイはず。それしか頭がない男子だつて大勢いる。

事実、あのとき部屋にいたリュウヤの股間は、恥ずかしい状態になっていた。

そして彼はそれを私にバレないようにとトイレへ駆け込んだ。

いつまでもそんな思いをさせてはいけないと別れを選択した私。そして当分彼氏を作らないと心で誓ったはずだった。

でもそこに突然のキミヒコの出現。

彼もリュウヤと同じことを言う。

「キスが苦手ならそれでいい。お前の嫌がることはしない」
私もそこで言い返した。

「それでホントにいいの？我慢してるんだったら私も辛いし、付き合えないよ」

「いいんだ別に。安佳里がその気になったときで」

私は悩んでしまった。キスする気になることなんて、100年経つてもあり得ない。

結局、リユウヤと同じことになる。

それでも私はキミヒコを振ることもできず、数回のデートを重ねたある日、ついに私は彼の部屋にお邪魔することになる。

二人だけの密室。キスを避けるなら、普通そんな場所へはついていけないもの。

でもこの時の私には、ある秘めた決意があった。

「ねえ、ホントは私と…キスしたいと思ってるんでしょ？」

意外にもキミヒコは否定しなかった。

「思ってるさ。でも前にも言ったろ。安佳里のイヤなことはしたくないって」

「うん…でもキミヒコは本当にそれでいいの？このままこの状態がずっと続いてても？」

「……いいよ別に」

この若干の間が、彼の本心ではないことを物語っていたと思う。

「俺はお前が好きだからさ。お前を大事にしたいんだ…」

その言葉は嬉しいけど、逆に私自身、後ろめたい気持ちにもなる。

やはり、私の秘めた決意をここで言わなきゃ…

「ねえ…」

「ん？なんだよ？」

「私と…エッチしていいよ(*v・v)」

「(□、;)えっ？」

当然のように驚くキミヒコ。

「む…無理すんなよ。お前、イヤなんだろう？そういうの」

キミヒコは勘違いをしてるようだった。それも当然かもしれない。

「違うよ。私、キスができないからそれ以上先に進めないだけ。キスさえしなければその…私を抱いても…いいよ（*v.v）」

「！？エエエエ（。○。；）エエエエ！？そういうことだったのか？」

「…ヘンでしょ？私」

「ああ。否定はしない（^ー^；）でも本当にいいのか？」

「…うん。キミヒコならいい。優しくしてね。初めてなんだから」
「お、おう…」

こうして私は処女から卒業した。

かなりな痛みもあったけど、同時に幸せを感じた夜でもあった。

でも…それもつかの間のこと。

またしても私の行く手を阻んだのは破局という二文字。

このあとの7年間、つまり現在まで、私は荒れまくることになる。

（続く）

14話 6人目・シンジローだかジュンペーだか

私が荒れまくったきっかけは、おそらく5人目との別れだろう。

付き合った順番を鮮明に憶えている記憶は5人目のキミヒコまで。彼は私を大事に思ってるから大切にしたいと言っておきながら、一度カラダを許すと動物に変貌。

会ったたびに即エッチっていうのはいかななもの？

最終的に私が幻滅した彼の言葉がこれ。

「安佳里が“キス嫌い”で良かった。めんどくさい前戯なんか省略できるもんな」

私は力チンときた。キミヒコの本性見たり！

こいつはただ、私とヤリタイだけなんだと。しかも手抜きのエッチで。

大事にしたいだの何だらかんだらと、飾り言葉でその気にさせて、いずれはエッチに誘い込む作戦に過ぎなかったんだ。

そう悟った瞬間、私はキミヒコへの淡い恋心が一気に冷めてしまった。

そして結果はまたしても破局。私の精神はどん底まで叩きのめされた。

だからといって、その後も男に縁がなかったかというところ、そうでもない。

その後に知り合った男たちは数知れず。

でも私の方が、どうしても本気の恋を避けていた。

つまりどうでもいい付き合い方をしていたことになる。

回想の時間の中で、ようやく絞り出した6人目がシンジローかジュンペー。

どっちが先に付き合ったかは不明。時期がかぶっていた可能性も

ある。

この二人も私とヤルことしか頭になかった。
確か、ジュンペーの方が私にプレゼントをたくさんくれた気がする。

ダサイデザインのネックレスや趣味の悪いブーツ。

しかも私の足のサイズを勘違いして買って来る不始末。

「なんで私の足が26センチもあんのよっ！」

って言ったら、しよげちゃって、さすがに気の毒になったから、

「ごめん。言いすぎた。買ってくれたお礼に私、何かしてあげる」

って切り返すと、

「安佳里とエッチしたい…」

と一言。

——ε-(14)ハア…こいつもか

とどのつまりはエッチ目的だったってわけ。

「じゃあいいよ。でもキスはしないでね」

「はあ？」

「とにかくキスなしでエッチして！」

その都度、何度も同じ説明をするのにウンザリしていた私。

こんな変てこなことを提言しても、男はちゃんとエッチができる。
心配してくれて「何か訳があるんだね。じゃあよそう」なんてい

言っ男はいない。

結局、ジュンペーともこれで終わった。

時を前後して、シンジローとも同じことが起きていた。

お前を抱きたいだの、抱きしめたいだのって。

歌の歌詞ならシビレルかもだけど、ハンパなクソガキが言っても
様にならない。

所詮、男はこんなもの。

愛とエッチを結びつけると、あまりにも残酷で理不尽。そしてバ力を見る。

こうして私は、愛とエッチは別モノだと考えるようになる。

やがて、高校を卒業した私は短大生に。

彼氏と言えるほどの男はいない。作る気もない。

ただ、その頃の私にはセフレが7人、日替わりで存在していた。

そう、SEXは美容とスポーツ！汗をかいて代謝を良くする健康法なのだ！

（続く）

15話 8人目以下同文

部屋にいても飲みに来て、思い出すのは過去ばかり。別に過去を振り返りたいわけじゃないのに、なぜかそうなる。きつと先が見えないからなのだろう。

未来に期待することなんて何もなければかもしれない。

自分しかいないこの店で、一人飲んでも悪くない。誰にも干渉されずにすむし、むしろその方がいい。

酔いたい気分になんて、3杯目を注文。

1, 2杯目は甘いカクテルを呑む気分じゃなかった。

でも、私の報われない回想を掘り起こしてゆくたび、お酒が冷たな味に思えるようになった。

「すみません。エッグノックを…」

私はほんのり甘いカクテルをオーダーする。

これを飲んだからって、甘い思い出が蘇るわけでもないのに…

でもそうすることで、私の心の悲しみを少しでも和らげてくれる作用はないものかと試したくもなかった。

「おいしい。」

私はテーブルにおでこをつけた。冷たくて気持ちいい。

そのまま顔を横に向けて、手に持ったグラスをボーッと眺める。

——あの時はむちゃくちゃしてたもんなあ…

妄想族の私は再び回想の世界に入り込んでゆく。

短大時代に付き合ったセフレ7人とは、私が21歳の頃には自然消滅していた。

なんだかんだ言っても、それまでは常時男がそばいた。

でもそれがなくなると、言い知れない孤独感が私襲うようになる。そこで私が手を出したのが、出会い系。

男は信用できないから、あくまでセフレ募集。その方が傷つかないですむし、堂々とキスだけは拒否できる。

ここまで来ると、もう誰とどう付き合ったのかなんて、全く思い出せない。

その場限りの男もいたし、どうせ偽名だと思ったら、名前なんか覚える気も更々なかった。

相手はえっちできれば満足してスッキリする。当然そこには愛はない。

私にとってもえっちは単なるスポーツ感覚。汗をかくことは大事。SEXしていれば、ホルモンバランスも保たれて、女性としてのフェロモンも適度に放出することもできる。

短大時代、100人斬りを自慢にしていた友達がいた。

当時の私はそれを聞いて目を丸くして驚いたものだった。

一体、どんなペースで男を取り換えればそうなるのかと。

でも23になった頃の私は、すでにその域を超えていたのだった。

そんな私が24の年女になり、セフレとの関係も一気に冷めてしまった。

その原因になったのは、人の幸せがともうらやましくなったことにある。

相次いで結婚をする友達。そして産まれてくる子供。

出産祝いに訪れる度、母になった友達からあふれんばかりの幸せを痛感させられる。

そこには愛が確実に存在する。愛のあるえっち。愛の中から芽生える命。

私は孤独感に襲われた。セフレに抱かれていてもそれは消えなかった。

私のしてることに愛の存在などない。単なる無意味な戯れ。動物だって、自然界の摂理に従い、生殖本能のままに意味のある行動をしている。

それに比べて私は最低。
遊びとストレス発散のために男と寝る私は動物にも劣る人間。

私は今年、関係している全ての男と縁を切った。
そして今はこのありさま。

仕事以外の休日はほとんどひきこもり。
部屋にいる時間はほとんど回想にふける日々。

最近ではこうして、飲みに来てまで回想する始末。
まあ今日の場合は、ギンゾーから逃れるためでもあつただけど。
結局さゆみと食事の約束もドタキャンされて、私は外でも孤独。
ひとり酔い潰れる私…

でも明日はまた来る。

どんなに嫌な気分でも、どんなにこのままここで酔い潰れていた
くても、明日は確実に来る。

今の私には、一寸先も見えない状態。

明日はわが身に何が起こるやら…

いや、何も起こらないかもしれない。悲しいけどこのまま永遠に。
。

だがこの後、そんな私の墮落した生活に、予想もつかない変化が訪れることになる。

（続く）

16話 突然のお誘い

家でも毎日酔い潰れるようになった私。

今では部屋にお酒のストックは切らせない。

意外と私はお酒に強く、二日酔いもしなければ吐きもしない。

吐くのは男に無理やりキスされたときだけ。

セフレとは適当な理由でキスはしないで済んだ。

歯の治療中だとか、口内炎ができているだとか言っておけば何も問題は無い。

所詮セフレ。相手は合体さえできればそれでいいのだ。

愛なんてどうでもいいと思っていた。

愛は裏切り。偽り。偽善。口実。不信任。

ただそれでしかなかった。

でもセフレとの関係も全て断ち切り、仕事以外の日々がほとんどひきこもり状態になると、例えばような孤独感に襲われるようになった。

それもそのはずだと自分でも思う。

今まで私は男が半年以上いなかった時期などなかったから。

その孤独感の中で、私が求めたもの。それは相思相愛の新しい恋愛の形。

私は人に影響されやすい。結婚してゆく幸せな友達を見ると、どうでもいいと思っていた愛がいとおしくてたまらなくなる。

今の私の心には、冷たいすきま風が通り過ぎているだけ。

今まではそれでも平気だった。

でももう無理。心の拠り所が欲しい。愛に包まれる暖かさが欲しい。

都合のいい話なのはわかってる。だから人には言えない。

そう今更思ってみても、世の中そんなにうまくはいかない。

こんなに長い間、彼氏ひとりできないのは、今まで好き勝手なことをしてきた罰。

本当の愛情を手に入れたくなったときに限って男に縁がなくなっている。

私は妄想族になった。

願いが実現しないと、自分の中で想像した理想だけが空回りする。

映画のワンシーンのようなロマンティックなキス…

キスもできない私がこんなことに憧れるなんて不思議。

だからそんな憧れと同時に、自分へのもどかしさもたまらなく感じていた。

そんなある日の休日、自宅にいた私に想像外な場所から突然の電話が入る。

「あのー、こちら日本人テレビなんですけど」

「はあ？テレビ局…ですか？」

「ええそうです。突然ですみません」

「はあ…」

「実はですね、うちのバラエティ番組に出演していただきたいんですよ」

私にはまるで狐にはつままれたような話し。何かの詐欺？

「…よく意味がわかりませんが？私、タレントでも有名人でもないですよ？」

「あ、すみません。説明が前後してしましまして…」

なんだか怪しげでもあったけど、別に振り込めとか言われたわけでもなかったし、その後詳しい説明を聞けば事情がやっとつかめてきた。

つまりこういうこと。

対面番組に出演するゲストタレントに、その人の初恋の人と対面させるという企画。

それが私ってわけ。事情は理解できたけど、それでもやっぱり驚いた。

私の知ってる限り、知り合いや友達に芸能人なんていないはず。まあ私はテレビを観ない主義だったから、そっちの方面にはうといのだけれど。

けれど、そのタレントの名前だけは知っていたから益々驚いてしまった私。

芸能界で活躍する彼は本名ではなく、あくまで芸名。

テレビ局の人から彼の本名を聞いて、みたび仰天した私。もう心臓に悪い。

彼の本名はリュウヤ。。

そう、私の4人目の彼氏だった人。

そんなわけで、とりあえず返事は明日まで保留にした。

全国ネットのテレビにいきなり出演するんだもの。戸惑いだってあるし、着て行く服があるかどうかわからない。

それに少し彼について確かめたいこともある。

リュウヤはテレビで一体どんなことをして人気が出ているのか？その詳しい事情を知る人間は、意外にもごく近しい身内にいた。

「お母さんお母さん、ちょっと教えて」

「ん？なによ？めすらしいわね」

私は部屋で洗濯物をたたんでいる母に尋ねた。

「あのさあ…… “チビリおぱんつ” って芸人、そんなに面白い？」
(続く)

17話 対面番組本番前

最近、世間では一人鍋の店が流行ってるらしい。

鍋が食べたくても、一人暮らしの身だと家で自分の分だけ作ってもむなしいだけ。

量を作り過ぎて余しても材料の無駄。だから結局は作らない。

そういう人たちのためにあるのがこの店で、なかなか人気があるらしい。

今、この”ひとり鍋屋さん”の別室でリュウヤと対面するために待機している私。

そう。私がテレビ局からのオファーに承諾したから。

最初はつきりテレビ局のスタジオに行くものと思っていた。

でも詳しい話を聞くと、出演するタレントの行きつけの店で収録するという設定。

そんなわけで、リュウヤがチョイスした場所がココ。

芸人になっても彼は相変わらず孤独なんだと感じた私。

リュウヤはすでにカウンターで食事をしながら、番組のMCと収録が始まってる。

もう少して私の出番らしい。

何も事情の知らないリュウヤの前に、いきなり私が現れるといったサプライズ企画。

某局”ウチくる”のパクリとも言える。

私がテレビ出演をOKした一番の理由は、母からの情報に興味を持ったから。

なんせ母は”チビりおばんつ”の大ファン。

そんな母に今回の事情を教えたら、目を丸くして飛び上がった。

「うつそお〜？安佳里の元彼だったのお？」

「うん」

「何で別れたのよ？変態だったの？」

「違うよ（^ー^；）」

相変わらず言葉を選ばずにしゃべる母。

「安佳里、あんた絶対テレビに出なさいよ！親は同伴できないのかしら？」

「たぶんそれは無理（-；）」

「だったら絶対サインもらって来てね！できればヨリ戻して来なさい」

「あのね…（-；）」

「驚いたわ〜。チビりおぱんつの初恋の人があんただなんてね〜」

「ビツクリしたのはこっちの方よ。私、テレビ観ないし、今のリュウヤがどんなことしてるのか全然わかんないんだから」

「チビりおぱんつの本名はリュウヤって言うの？カッコイイ名前じゃないの！」

明らかに母のテンションはハイ。

「一体、チビりおぱんつのどこがいいの？パンツでもかぶってるの？」

と適当に聞いてみる私。

「そうよ。あんたわかってるじゃない」

「（ノ――）ノコケッ！」

「パンツっていうか、パンツ風にデザインした覆面なのよ。毎日テレビに出まくりだけど、NHKだけには出演できないらしいわ」

「パンツかぶってりやね…やっぱり彼は変態だったのかな…」

「」

「下品なネタは言わないのに気の毒だわ」

50代の母の同情を買うほどまで大人気のリュウヤ。

彼は昔とは変わってしまったのか、それとも…

それを確かめたくなったせいもあって、翌日の電話で出演を承諾した私。

元々、彼とはケンカ別れしたわけじゃないし、嫌いになったわけでもない。

「安佳里さん。そろそろ出番です。こちらへ」

スタッフに呼ばれて私は立ち上がった。

いよいよ“時の人”チビリおぱんつと対面のよう。

リュウヤ…悪いけど私、あなたの芸は知らない。

今日来たのはただの興味本意と懐かしさだけ。きつとあなたもそうでしょうけど…

（続く）

18話 盛り上がらない本番

スタッフとの打ち合わせは大まかなことだけ。

そつと近づいて、本人の後ろに立って下さいという指示のみ。

お芝居じゃないから、決められたセリフもリアクションもない。

トークはMCから聞かれたことだけ答えれば良いと言われた。

生放送じゃないから、万が一放送上、不適切な発言があっても編集できるからと。

(; - ;) 「3 フウ…バカなスタッフ。

素人の私が、テレビカメラの前で不適切なことを言うほどのしゃべりなんて、できるはずもないのに。

さほど緊張はしなかった。場所がスタジオじゃなく、こじんまりした“一人鍋屋さん”のせいもある。

私は予定通り、食事しながらMCとしゃべっているリユウヤの背後にそつと立つ。

MC：ところで、チビリおぱんっさんの初恋は高校時代って聞きますが本当ですか？

ごく自然な流れで話を誘導するMC。

「そうなんですよ。僕、こう見えて性の目覚めがすごく遅かったんですよ」

「それは意外ですよねえ？それが今の芸風になるなんて」

「僕もそう思います（*ハハ*）えへへ♪反動って大きいもんです」

「その人とは付き合えたんですか？」

「んー…ほんの少しの間だけだったツスカね」

「もし今、会えたら何ていいいます？」

ニヤニヤして話すMCにハツとするリュウヤ。

「えっ？まさか…」

彼は左右を見渡してから、次に後ろを振り向いた。当然そこには私がいる。

「うわーっ！！Σ（ノ。□。）ノ！」

すごい叫びに私も驚いた。番組的にはここがオイシイ場面なのかもしれない。

でも私にしてみれば、会えた感動も湧き上がる懐かしさも全く生まれてこない。

なにせリュウヤはパンツの覆面。素顔がわからないから変態にしか見えない。

このあとのトークは全く盛り上がりもしない悲惨なものだった。素人の私カメラの前でスラスラ言葉なんて出るはずもない。

MCに聞かれたことにも「はあ…」「ええ」「そうですね」の片言。

番組としてはこういうのが一番困るらしい。

もっと私がリュウヤの隠れた一面について何か話して欲しいという意図はわかる。

それならそれで、ちゃんとした打ち合わせくらいしてくれたいのに…

正直、頭が真っ白で何も浮かんでこない。やっぱり私は緊張してるのかも？

でも私が悪いんじゃない。段取りの悪いスタッフがバカだからよ。

MC：安佳里さんはチビりおはんっさんの正体を知ってましたか？

私：全然。

MC：でもテレビでチビりおはんっさんの活躍はご存じだったでしょう？

私：いえ全然。

MC：こんなにテレビに出てるのに？

私：テレビ観ないんです。

MC：でも噂で彼の今年ブレイクしたギャグくらいは耳にしませんでした？

私：しません。

MC：あららら…弱ったな（＾―＾；）じゃ質問を変えましょう。

私：はあ…

MC：安佳里さんと出会った頃の彼はどんな子でしたか？

私：ん〜妙な人？

MC：どんな風に妙だったんですか？

私：…なんとなく。

MC：あなたが彼の初恋の人だったことは知ってましたか？

私：いいえ。

MC：付き合っていた時期もあったと聞きましたが？

私：はあ…まあ。

MC：今、彼を目の前にしてどう感じました？

私：素顔を見てないので何とも。

MC：それもそうですね（「」；では覆面のままの彼を見てどう思います？

私：変態チック？

MC：なんかヤバいなあ…じゃまた質問を変えます。

私：…

MC：彼との思いでのエピソードは何かありますか？

私：…別に特には。。

MC：（（ノ―ω―）ノバタツ…ダメだこりゃ。カメラストップして下さい！

思った通り、やっぱりマズかったらしい。

私から見てもこんなのオンエアできる状態じゃないもの。

私とMCの会話が進むに連れ、リュウヤがだんだん凹んでいくの

もわかったし。

その後、録り直しをすることもなく、私の役目は終わった。きつと放送ではカットされるに違いない。

私は昔のリユウヤに会いたかった。

私の前ではパンツを脱いで……いや覆面を取って欲しかった。でもそれは無理な話。世間の人には素顔は非公開ということだから。

私の出番も終わり、あとはリユウヤと別な関係者との収録を脇で観ているだけ。

つまらないから帰ろうとした私。すると突然！

「安佳里っ！ちょっと待って！」

収録中にも関わらず、リユウヤが私に向かって叫んだ。その声の大きさにびっくりして振り向きざま固まる私。

「この録りが終わったら二人で話そう。カメラのないところで。な！頼むから！」

顔の表情はわからないけど、彼の目は真剣さを物語っている。

「うん……わかった」

私は承諾の返事をして、近くのイスに腰を下ろす。

収録を勝手に止めたリユウヤは、まわりのスタッフや関係者にお詫びをしていた。

——なんだろう？リユウヤは一体私に何を言いたんだろう？

（続く）

19話 高校以来のふたり

収録の終えたリュウヤはスタッフを先にロケバスで帰らせた。
私は今、リュウヤと二人きり……ではあるのだけれど。

「ねえ、何でこんな暗いところで話すの？」

ここは一人鍋屋さんの休憩控え室。少しの間だけということであり
ユウヤが借りた。

涼しげな北側の部屋で、小さな窓から見えるわずか1メートルの
視界には、雑居ビルの薄汚れたグレーの壁。

「アハハ…薄暗いのも逆にムードあると思わないか？」

「別に」

「返事早っ^^;」

すっかり不機嫌になっていた私。

そりゃ自分の不慣れのせいで収録を台無しにしまったのかも
しれない。

でも素人だもの。仕方ないじゃない。

それに鍋を食べていたのはリュウヤの方で、私はお腹が空いたま
ま。

当然彼がごはんやお茶に誘ってくれるのを期待してたのに、いつ
ゴキブリが出て来てもおかしくないこんな湿った部屋でのツーショ
ット。

言い換えれば、拉致監禁には絶好の部屋。

「もっと別な場所でお茶でもするのかもしれない…」
つい愚痴った私。

「ごめんな。そうは思っただけだよ」

「じゃあそうしてよ」

「でも今の俺ってほら、一応有名じゃん。外でお茶すると目立つん

だよ」

「（；・ー・）　＼　3　フウ」

昔からどこか1本神経の違っていたリュウヤ。今でもそれは変わらない。

「頭にかぶってるマスク脱げばいいじゃない。素顔は誰にも知られてないんでしょ？」

「ハッ…（。〇。；）そ、その通りだ。何で今まで気付かなかったんだろう」

「（（ノーωー）ノバタツ」

私は呆れるしかなかった。

「よし！じゃあこれから覆面外してお茶しに行こう！」

そう言われたところで、すっかり気分は萎えている私。

「もういいよここで。私に何か用件があるんでしょ？ここで言っ

「お茶は？」

「あとでいいから先に言っ

「う、うん…じゃあ言うけど…」

「ちよっ、ちよっと待って！」

私はリュウヤの言葉を止めた。

「なに？どうかした？」

「あのさ、言う前にその覆面とってくれる？」

「あ…そうでした（（；・ー・）ゞ」

「……………（（；・ー・）ゞ」

彼とは嫌いになって別れたわけじゃない。

せっかく何年ぶりかで会うから少しはワクワクしてたのに…

指摘されるとあっさりパンツのマスクを脱いだリュウヤ。

その顔は昔とほとんど変わっていなかった。短髪にしているのはおそらく毎日マスクをかぶるせいだと思う。

あと、右目の上が少し内出血しているようにも見える。

私がそれを凝視していたせいか、リュウヤが察したようだ。

「ああ、この目が気になるかい？別に平気さ。俺の芸風だし」

「芸風？」

テレビを観ない私には全然ピンと来ない。

ここに来る前に母の録画したチビリおぱんつの番組を観ておけば良かった。

「安佳里は俺のネタを一度は観たことあるだろ？」

「ゲッ！Σ（・ω・；）——ええと……」

「チビリおぱんつの正体が俺だってわかってた？」

「全然」

「良かった。なら正直な意見が聞けそうだ」

「????」

「安佳里に聞きたかったんだ。俺の一発ギャグを初めて観たときどう思った？」

いきなりのきつい質問。

正直に全く知らないと言った方が後々のためにもいいかもしれない。

だいいち、さっきの収録でもテレビは観ないって言ったんだし。

「ごめん。知らないの。リュウヤのギャグ……」

「!?エエエエ（。○。；）エエエエ!？」

「そんなに驚かなくなつて……^^;」

「この1年間、テレビで何千回もやって来たのに……」

「だから私テレビ観ないんだってば。何万回やっても知らないわよ……」

なんだかリュウヤは気抜けしたように見える。

目の上が黒つばい上に表情が暗くなると、まるで霊がそばにいるよう。

「そんなにガツカリしないで。これからは少しテレビも観るから」

「う、うん…」

「そんなに気を落とさないでよ。リュウヤにはファンがいっぱいいるんでしょ？」

「隠れファンが多いんだ。隠れることないのに…」

「あら、うちの母親はチビリおばんつのれっきとした“表ファン”よ」

「ハハ…お母さんがねえ（ハ―ハ；）」

「今度ライブDVD買うつて言つてたわ」

「ホントに？…じゃあちよつと待つて」

リュウヤが自前のシヨルダーを開けて、ゴソゴソ中身をまさぐると、出て来たのは1枚のDVD。

「それってもしかして？」

「うん。俺のライブDVD。これあげるから観てくれる？」

「うわー！ありがとう。母も喜ぶわ。そのジャケットにサインしてくれる？」

「いいけど…1番観てもらいたいのは安佳里だよ…」

「えっ？」

一瞬固まった私。なんか意味深な言い方。

「観たら安佳里個人の感想が聞きたいんだ。いいかな？」

「え、ええ。それはもちろん…」

「じゃあ俺の連絡先教えるから」

「…うん」

かつての恋人との会話はそつけなく終わった。

ドラマでよくある同窓会で再燃するカップルとは程遠い。

実際はこんなもんなのよね。。。

リュウヤと別れた帰り道、待ち合わせたカップルがフレンチキスをしていた。

その後、目と目を合わせながらお互いのおでこをくつつけ、そして鼻の頭までこすりつけて合っている。

なんか可愛らしくて、遠くからつい見入ってしまった。

そういえばこんな光景、最近よく見るようになったな。

フランス映画っぽいような気もするけど、フランス映画を観ない私が言うのも変よね。。

（続く）

20話 母とDVD

「イヒヒヒヒーッッ」 （ノミ） ばんばん！！

母がお腹を抱えて笑っている。

“チビリおぱんつ”のお笑い芸が満載のDVDを観て。

それは私が昨日リユウヤからもらったもの。

私も彼との約束の手前、DVDを観ないわけにもいかず、リビングで母と二人で観賞タイム。

確かに面白いことは面白い。この冷めた私でさえ、クスツとしてしまう。

それにしても母は異常すぎる。これほどまでになぜ大ウケするんだろう？

ハシが転がるだけで可笑しくなる年頃なんて、とつくの昔に卒業してるはずなのに。

それともオバサン特有の、恥も外聞もない年代に達したから？

「お母さん、これそんなに面白い？」

母は私の質問に驚いたようだ。

「Σ（ノ。）。ノエエツ？なんでなんで？あんだこれ観て面白くないわけ？」

「普通」

「あんだホント冷めた子ね」

「てかさ、これって初めて観るネタ？」

「違うわよ。テレビでお馴染みのネタばかりよ。だから面白いんじゃない」

「ふうん…」

私には母のこういうところが理解に苦しむ。

同じネタを何べんも観て何回も笑えるのって、ある意味すごいと思うけど、それじゃ単なる幼児。

昔、親戚にいる当時4歳の男の子に、ついヘン顔をしてやったら超ウケされて、永遠に繰り返しせがまれたことがある。

そのおかげで顔の筋肉が痙攣してしまった。

今そのことを思い出したのは、母がそのときの男の子と同じように見えるから。

私がリュウヤこと“チビリおぱんつ”のギャグを観たのはこれが初めて。

彼はピン芸人だけど、そばには必ず彼女に見立てたぬいぐるみがそばに置いてある。

その中には人が入っているわけではなく、単なる等身大の人形のようなもの。

彼がステージで“ひとりコント”をしながらも、突然彼女にキスをする。

それは決してディープなものじゃなくて、あくまで軽いソフトの繰り返し。

リュウヤはコントの合間に数回それを取り入れている。

これが今年1番ブレイクしたギャグ“フィツチュ”だそうだ。

意味は『不意にキス』↓『不意チュー』↓『フィツチュ』だとか。

私が街でよく見かける恋人たちのフレンチキスは、これを真似たものだとして初めてこの時知った。

そして第2弾ギャグとしては“デコスリ”“ハナスリ”がある。

相手は必ずぬいぐるみ。お互いの鼻やおでこをスリスリとこすり合わせるだけのことだけど、これをコントと組み合わせるとなかなか面白い。

もしこれがリアルなフィギュアだったら、エロくて変態チックで、

とても子供には見せられないだろう。

ましてリュウヤは頭からパンツをかぶってるんだし、放送すらされないかもしれない。

でもまあそこは、彼も計算した上でのギリギリのパフォーマンスなのだろう。

それに彼のコントは基本的にエロネタではない。

意外にも“スポコン”というものらしい。

スポーツと根性の略ではなくて、スポーツとコントの略。

このDVDには、テニスやバスケット、バレーなどが収録されている。例えばテニスの場合、リュウヤはステージに予め用意された移動式の壁を相手に見立て、それにボールを当ててラリーをしながら、おしゃべりコントを展開する。

でもすごく弱くていつも顔面にスマッシュを食らってばかり。そしてその都度ぬいぐるみの彼女に癒してもらうという設定。

なかなか考えたものだと思つたより感心した私。

ステージでこれだけの確にボールをコントロールすることなんて相当練習していなければ……ハッ（。〇。；）

そっか……そうだったんだ……

鈍感な私がようやく気がついた。

リュウヤは高校時代から、お笑いを目指していたんだ。

あのとき……あの公園で誰からも不気味がられたいたあのとき……

一人で黙々としていたトイレの壁打ちラリー。

あれがこの時のためのものだったなんて。

（続く）

21話 いきなりやって来た

「もしもし俺だけど」

朝っぱらから私のケータイにかけて来たのはリュウヤ。もちろん予想外のこと。

「なに？どうしたの？アタシまだ寝起きなんだけど」

「じゃあ、家にいるんだね」

「…まあ今日は仕事も休みだし、今んところは…」

「じゃそっち行くわ」

「（「」…えっ??」

“ガチャ”

唐突な電話がまた唐突に切られた。

「なんでなんで?…来ていいって言ってないのに…」

啞然として固まった私。

来るって直接ウチに来るつもり……のはずよね?

いまいち頭の整理がつかないまま、とりあえず少し部屋を片付けないかと思っていると、玄関にチャイムの音。

「Σ（「□」…ええっ?まさか!」

一瞬ドキツとしたけど、冷静になろうと気を静めた私。

『リュウヤがこんなに早く来るはずないよね。今電話切れたばかりだし…』

そう思いつつもなぜか不安で、母より早く玄関に出てみた私。でもそのまさかが現実になった。

「よお。こないだぶり」

「Σ—11（「」…——1ウソおお!」

それは紛れもなく、パンツの覆面をしていないリュウヤだった。

「そんなに驚かなくなつて。今電話したじゃん」
至って淡々としゃべるリュウヤ。

「今だから驚いてるんでしょ！どこからかけてたの？」

「ここの門の前」

「（ノ——）ノコケツ！」

「ごめん。俺あと1時間しか余裕がないんだ」

「仕事？テレビの？」

「うん。“爆笑hey！カモン”の収録なんだ。観たことある？」

「あー、その番組ならお母さんが毎週録画してる」

「そうなんだ。じゃあお母さんに挨拶でも…」

「そんなのいいからとりあえず先に私の部屋に行つて」

「え？安佳里の部屋に？いいの？」

焦ってリュウヤを自分の部屋に追いやる私。

これには一応理由がある。

母は起きがけにリビングでテレビを観ながら着替える習慣がある。父は夜勤でいないし、特にこの日曜は私と同様、今起きたばかり。私が玄関に来る前に、開いていたリビングのドアを一瞬チラ見すると、まさにその光景だったから。

そんなわけで、高校以来約6年ぶりにリュウヤは私の部屋に入つたことになる。

「ちょっと待つてて。なんか飲み物持つて来る」

「いいよ別に。俺が急に来たんだから」

『一応、気にはしてるのね…（^ー^・）』

私がリビングに行くと、母がスクワットをしながら話しかけてきた。

「あの子誰？彼氏？」

「違うよ。お母さん見たの？」

「あんたたちが扉を通り過ぎるときに一瞬目が合っちゃったわよ」
「へえ」

「なんか冴えない子ね。パツとしない子っていうか…」

「お母さん、それ同じ意味^^;」

「あんたの部屋に入れて危険じゃないでしょうね？素性はわかってるの？」

「いくら私でも素性の知らない人を部屋に入れないよ」

「ならいいけど。外は明るいんだからエツチなんかしちゃダメよ！」

「お母さん、よく娘にそんなこと言えるよね（-_-;）」

「心配なもの」

「てか、外が明るくなかったらいいの？（-_-）」

「親の上げ足とらないの！」

母は自分の発言がヤバいと感じたときは、いつもこう言って切り抜ける。

私も母と口論するつもりもないから、それはそれで平気。

「お母さん、なんかお菓子ある？」

「そこにチョコパイ買って来てあるから持って行きなさい」

「んゝ、朝からちよつとヘビーのような…」

「ならプチチョコパイもあるわよ。小さいからいいでしょ？」

「まあいいけど…^^;」

私はお盆にコーヒーとチョコパイを載せてリビングを出ようとすると、母が新聞の番組欄を見ていつもの独り言。

「あ、今日はお昼の番組に“チビリおぱんつ”がゲスト出演するわ」と、ウキウキモードの母。私にイタズラ心が芽生える。てか本当の事なんだけど。

「お母さん、今部屋にいるゲストも“チビリおぱんつ”だよ」

「Σ―11」(;) ―1なんですってええええ！！？」

「そういうことだから。あとでここに呼ぶ？」

スクワットが止まった母は放心状態っぽかった。

どれほど大ファンなんだ全く…

「じゃあね」

再び私が出て行こうとすると母に呼びとめられた。

「そのお菓子とコーヒー、お母さんが持って行ってあげる」

「えっ？」

「早くよこしなさい」

と、強引にお盆を奪い取られた私。そして母がまた一言。

「朝からチヨコパイなんて、少し重たくないかしら…？」

「あのね…」(;)

(続く)

22話 タイムアップ

私の部屋にお菓子を運んで座り込んだ母。

「どうもはじめまして。安佳里の母です。オホホホホ」

どう聴いても不自然な母の笑いに戸惑うリュウヤ。そして私も。

でも母はそんなのお構いなしにミ－ハー根性丸出し。

「チビリおばんつさんでらっしやるんですって？私、大ファンですの。良かったらあとでサインいただいてよろしいかしら？」

「えっと…はい、いいですよ」

リュウヤがチラツと私に視線を向けた。

「ごめん。お母さんにリュウヤの正体言っちゃったの」

そして間髪入れず母。

「まさかうちの安佳里と知り合いだったなんて露知らずで…全く驚きだわ。オホホホホ」

彼は心持ち苦笑いをしたように見えたけど、そこはすぐに切り替えたようで、

「お母さんのような年代の人が僕のファンだなんて光栄です」

と、見えすいたおべんちゃらを言う。でも母はそれに気づいていない。

「チビリおばんつさんの素顔って、とてもりりしいのねえ。オホホホ」

普段、大口を開けてガハハと笑う母が、口に手当てて笑う姿も異様なもの。

「りりしいだなんてそんな…僕は冴えない男ですよ。パツとしない男なんです」

「ハツつー！ー（；）ー！ー」

母が思いついたように息を呑んだ。

「リュウヤ、もしかしてさっき私とお母さんの会話聞いてた？」

私が母をチラ見しながら問いかけると、

「この部屋のドアも空いてたしね。勝手に聞こえてきたただだよ」と彼。

当然慌てふためく母。

「あららら。ごめんなさいねー。オバサンさっきはホラ、寝起きだったからよく顔を見てなかったの。ねえ安佳里。そうよね？」

普段絶対に自分のことを“オバサン”なんて言わない母が動揺している。

「知らない（＾―＾；）私に振らないで」
苦し紛れの母の弁明が続く。

「とにかくオバサンはね、チビリおばんつさんの大ファンなの」
「お母さん、それさっきも言ったよ」
と突っ込む私。

「ウソだと思われたらイヤなもの。これは絶対本当の話。チビリおばんつさんが出る番組は全てチェックしてるんだから」

「…そりやどうも＾―；」
少し恐縮したようなリュウヤ。

「遠慮しないで食べてってね。コーヒーは飲み放題だし、チョコパイならまだあるから今持って来るわ」
「あの…別におかまいなく…」

リュウヤがそう言ったときには、すでに母は立ち上がっていた。けれど、母は足元に置いてあった私のクッションに足を取られ、真後ろに開脚しながら転倒してしまった。

「ギヤアアア！」

あまり可愛くない叫びの上に恥ずかしい大失態。

「お母さん…パンツ丸見え（――；）」

タイトスカートだった母。なんてドジなんだろう。。

「あらやだ。オバサンのあられもない姿、見ちゃった？」

体制を立て直した母の古めかしい言葉にドン引きした私。

「お母さん、そんなこと聞かなくていいから^^;」
「見ちゃいましたよ僕も」

「リュウヤもいちいち答えなくていいから^^;」
「でも今日はこれでパンツ見るの2度目だし」

「Σ(ノ。ノ)エツ！なんで？どういうこと？」

「さっきお母さんがスクワットでしゃがんでたときに見えました」
「そんなこと黙ってればいいのに…」

「だって聞いたからじゃん」

リュウヤは至って冷静。とてもお笑いをしている芸人には見えなかった。

「あのさ、俺のDVD観てくれた？どうだった？」
いきなり話が切り替わった。たぶんこれがリュウヤにとっての本題だったのだろう。

「ああ、あのDVDなら…」

「観たわよ観たわよ！！あのフィッチュがもうおかしくって——」
いきなり割り込んで来る母。

「お母さん、リュウヤは私に聞いているの（　　）」
「あらごめんなさい。つい^^;」

ここで数秒間の沈黙——

さすがの母もこの重苦しい空気は読み取れたよう。

「あ…じゃあオバサンはこのへんで行くわね。安佳里、サインちゃんともらっておきなさいよ」

「はいはい」

「それからエツチはNGよ」

「いいから早く行って！（　　）」

なんか気疲れした。それも自分の母親に。

「なんか独特なキャラしてるね。安佳里のお母さんて」

「気にしないで。舞い上がってるだけなの」

「で、俺のギャグとか観て、どう？」

「うん。面白かったよ。街でカップルがマネしてるって最近わかったの」

「…そうなんだ」

「ごめん。私、何年もテレビ観てなかったから」

コーヒーを一口すすってリュウヤが再び話そうとするけど、今度は言いにくそうだった。

「あのさ…今は彼氏とかいるの？」

「いないよ」と即答する私。だって本当だもの。

「ずっといなかったのか？」

「んゝそうでもない。最近いないだけ」

本当は長いこと彼氏と呼べる人なんていない私。

なのになぜこんなときに見栄を張ってしまうんだろう？
確かにセフレなら途切れなくいた。かぶってもいた。
でもそれは所詮セフレ。かぶってたって自然なこと。

「じゃあさ…アレは…アレはまだ克服できてないのか？」

「アレ？」

と聞き返した私。でも本当は気づいていた。リュウヤが言おうとしていたことを。

でもそのことは、私自身今も避けて通っている問題。

だからなるべくなら触れて欲しくはなかった。

……けど。。

「キス…できるようになったのか？」

ズキンと心に響く。

「……………まだ」

私から目をそらせて窓の外を見るリュウヤ。

「そっか…まだか。」

「うん。リュウヤは？彼女とかいるの？」

「俺？いや、いない」

「仕事忙しいから彼女なんて作れないでしょうね」

「別にそんなことはないんだけど…」

なんか会話がたどたどしくなってきたので、私は最近気づいたことを彼に聞いてみた。

「話変わるんだけど、高校時代にさあ、あの公園で壁打ちしてたのは、今の芸風を作るためだったの？」

「そうだよ。なんで？」

意外な即答にあっけにとられた私。

「いえその…私、そうじゃないのかなあって最近気づいたもんだから」

「最近だったんだ；」（「」

益々会話が弾まなくなるうちに、リュウヤの制限時間がやって来た。

「じゃあ仕事の時間だからこれで」

「うん。。」

何も盛り上がりのないまま終了したトーク。トークと言えたのかどうか疑問。

しいて言えば母が一番盛り上がったただけかも。

それにしてもリュウヤはたったこれだけのために私の所へ来たんだろうか？

単にDVDの感想を聞くためだけに。。。？

（続く）

23話 朝から生テレビ

私が起きがけにリビング行くと、キッチンから母の声。

「安佳里、あの人しばらく来てないけど、どうかしたの？」

今朝はそんな母の一言から始まった。私はソファにもたれながらダルい返事をする。

「はあ？あの人って？」

「何よ。しらばっくれて。チビりおはんつさんに決まってるじゃない」

「何で決まってるのよ（＾―＾；）」

リュウヤがうちに来た日からおよそ1か月程経過していた。

母は何か勘違いしているようだ。キッチンから顔を覗かせ、興味津津な眼で私に問いかける。

「で、どうなの？外で会ってるの？」

やれやれ。相変わらず野次馬根性旺盛な母には困ったもの。

私はきっぱり言い切った。

「あのね、リュウヤは私の彼氏でも何でもないので。だから全然会ってません」

「??？」

キョトンとする母。

「だったらなんでこの前はわざわざうちに来たの？」

「知らないよそんなの」

「バカね。あんたに会いに来たかったからじゃないの」

「まさか。自分のDVDの感想を聞きたかっただけよ」

「そうかしらねえ…」

「だからお母さん、変に期待しないで。今日も来ないし」

「それは知ってる。今日は10時から生番組に出演予定だもの」

く、詳しい^^；さすがファンだけのことはある。一応母に聞いてみた。

「それ、なんていう番組？」

「生チン」

「、；、；、；、（；；※；；）ブッ！ちよつとお母さん、ふざけないで！」

でも母は至つて真顔。

「本当よ。“朝生！珍客サンデー”っていのよ」

「じゃあ朝チンでもいいでしょ！」

「ヤラしいわね。その言い方」

「どっちがよ！！（□）」

母とこれ以上話すのも疲れるだけと思った私。

テーブルのクッキーをひとつまみしてすぐに自分の部屋に戻った。

もうすぐ10時……リユウヤが出る。。

今までDVDは観たけれど、彼の出るテレビ番組はまともに観たことがない。

彼がどんなことをするのか、全く興味がないわけでもないし……

私は部屋のテレビの電源を入れた。

そこには今週の珍客ゲストとしてリユウヤが招かれていた。

司会は人気の看板女子アナ。

彼女はまずリユウヤの基本的な部分、つまり芸名の由来から訊ねていた。

「よく聞かれるんですけど、僕は気が小さくてビビり屋なんですよ」「つまり度胸がないってことですか？」

と女子アナ。

「可愛い顔してハッキリ言うんですね。でもその通りです。僕は根性なしです」

「すみません。つい（　　）」

「いいんですよ。僕は子供の頃から怖がりだったし、いつもオシッコちびってたんです」

「そんな人が大勢の前でお笑いができるなんてすごいですね」

「だからこの覆面が必要だったんです。素顔ではとても今の芸はできません」

「そういうもんなんですか？」

「ええ。人前に出ても自分の正体がわからなければ、僕はバカにでもアホにでもなれるし、羞恥心も捨て去ることができるんです」

なるほどと今更ながら感心した私。

つまりパンツの覆面は、変態を装うんじゃなくて単なる照れ隠しだったんだ。

トークは順調に流れ、いつしか内容は恋の話になった。

これもまた、お約束の質問と言えるのだろう。

「チビりおぱんつさんは今、恋はしてらっしゃるんですか？」

単純な質問だけど、私もこれには少なからず興味を抱いた。

「…はい。してますね…」

「（　　）ええっ？じゃあつまり好きな人がいるってことですよね？」

「はい。今、とても好きな人はいます」

私は自分でも気づかぬうちに、身を乗り出してテレビを観ていた。

（続く）

24話 彼の好きな彼女

テレビ画面の中のリュウヤは、至って生真面目だった。

ネタ見せ番組ではないにしろ、お笑い芸人がこんなに素でいいんだろうかと思うほど。

そんな中で私がビクツとした彼の一言。

「好きな人はいます。もうずっと前から」

司会のアナウンサーは驚きと共に、これぞ好機とばかりにリュウヤから更なる言葉を引き出そうとする。

「ずっと前とは具体的にどのくらい前なんですか？」

一瞬だけ話すのを躊躇する気配もあったように見えたけど、結局は素直に答え始めた。

「…高校以来ずっと…ですかね」

私の心臓が大きくドクンと脈を打った。

「Σ(□) : ええ？そんなに長く付き合ってる人がいるんですか？」

という司会者の質問には、

「…いえいえ、違います。僕の勝手な片思いなんです」と返答するリュウヤ。益々落ち着かなくなる私。

まさかとは思ったけど、母がさっき言ったことが現実味を帯びて来ている。

——好きな彼女って私のこと？私を指してるの？

番組は更に進行してゆく。

「いいんですか？チビリおぱんっさん。これ生放送ですよ？編集で
きませんけど？」

「あ…やっぱまずかったかな？（ - ；」

「その片思いの女性がこれを観てからびっくりするでしょうねえ？」
「ん〜、あまりテレビを観ない人だから…」

—— 私なら今観てるんだけど…（^―^；）

「これからどうするつもりですか？彼女に告白しないんですか？」

「まだわかりません…」

「でもこれ、生放送で今言っちゃったわけですよ？もう告っちゃ
った方が良くありません？」

結構ズバズバ言う気の強そうな女子アナ。別な意味で感心する私。

「いや、一般の人だから、迷惑かけると困るんで今のところは…」

「でもそんなモヤモヤしたままの気持ちでいつまでも我慢できます
か？」

「モヤモヤ？僕が？」

「しないんですか？」

「全然。毎日スッキリしてますよ？」

「はあ？」

理解に苦しむ顔をしている女子アナ。それはテレビを観ている私
も同様のこと。

「あのー、お言葉ですけど、そんな片思いが続いてるにも関わらず、
お笑いに打ち込めたりするものですか？」

「はい。平気ですけど？」

「全然、支障がないと？」

「僕の芸に？」

「ええ」

「ないですね。ていうか、全くその逆ですよ」

「逆？どういことですか？」

リュウヤがテーブルに置かれていたオレンジジュースのストローを外して一気に飲み干した。

「すみません。のどがカラカラだったもんで…（ハ―ハ…）」

「どうぞ御遠慮なく。おかわりはいかがですか？」

「下さい」

（ノ――）ノバタツ！と私はコケた。普通こんな場面、おかわりなんて遠慮するんじゃないの？

更に仰天したことに、司会の女子アナは、

「じゃあ私ので良かったら」

と言って、自分の飲みかけジュースを差し出したのだ。

で、それを平気でまた飲んでしまうリュウヤもリュウヤ。

これってバラエティ番組だから？（――；）

リュウヤの喉も潤ったところで、早速本題に戻った。

「逆ってどういう意味なんですか？片思いが芸のこやしになるってことですか？」

「いえいえ、そういう意味じゃないんです」

「ではどういことか説明してもらっていいですか？」

「まあたいしたことじゃないんですけど…」

「あのー生放送ですからなるべく早く言ってくれます？ゞ（―…；）」

「あ、すみません。つまりですね…僕のギャグのほとんどは、彼女に観てもらいたために考えたものなんですよ」

「（「」）えっ？片思いの彼女のためにですか？」

「はい。だからいつも手が抜けませんし、気合が入ってるんですよ」
「あのギャグは今や街中で社会現象にまでなってますけど、発案はどういったことから思いついたんですか？」

「それは秘密です」

「Σ（ノ。）。ノえええっ？片思いしてることは言えるのに、ネタのことは言えないっておかしくありません？」

「でも言えないんです。でもヒントはさっき言いましたよ。これで勘弁して下さい」

「なんか変なのー^ー^」

「元々変な人なんです僕。これがチビリおぼんつのキャラだと思って頂ければ幸いです」

「……そうですか。なんか煮え切らないですけど、お話ありがとうございます」

「もう終わりですか？」

「時間ですから。でも最後にひとつだけ。その彼女に最後に会ったのはいつ頃ですか？」

「最後に？あ、えっと…6年くらい会ってないですかね」

「えっ？じゃあ高校卒業して以来ずっとのことですか？」

「…そういうことになりますかねえ」

——ん？なら私のことじゃないってこと？

番組はお料理コーナーに移り、リュウヤの出番は終わった。

それと同時に私の部屋に入って来た母。

「あんたテレビ観てた？」

「一応」

「お母さんね、チビリおぼんつさんの片思いの相手って、てつきり安佳里のことかと思ってたら、結局は違ってみたいね」

「……」

「6年会ってないなんて最後に言っただもの。あんたは一月前に会ってるわけだし」

「別にいいでしょ。そんなの」

「あゝあ、なんかちよつと残念だわ」

「なんで残念なのよ?」 - - ;

「さて、お昼は何食べようかしら」

母は私のツツコミには耳も傾けず、自分が言っただけ言ったら部屋からさっさと出て行ってしまった。

ちなみに母はB型。

私はまたいつものように、ベッドに仰向けになって天井を見つめていた。

でも今日は妄想ではない。それは現実的な考えこと。

“リュウヤはネタの発案をなぜ秘密にするんだろう?”

ヒントは――

さっき言ったことの中に……ある??

(続く)

25話 頭の整理

私にしては珍しく、数日間考え込んでいた。

もちろん家にこもりつきりとかじゃなくて、仕事にはちゃんと行っただけ。

家にいても職場にいても、どうしても心に引っ掛かっていることが拭えない。

それはリュウヤの好きな彼女は一体誰かということ。でも全く見当もつかない。

高校時代、リュウヤが私の次に付き合った子の存在なんて、知りもしなかった。

この事実のおかげで、全ての説明がつかない。

この1週間、私は高校時代の卒業アルバムまで引っ張り出した。そして一人一人の写真をチェックしてみたけれど、リュウヤと噂のあった子なんて誰もいない。

だいいち、リュウヤのような変わり者に近づく子なんて、私からいのようなもの。

だから余計に私の頭の中は整理がつかなくなっていた。

“彼女に観てもらいために作ったネタ”

これはリュウヤがトークバラエティで言っていたこと。

なぜ？単に彼女に笑ってもらいたかったから？

発案の秘密って、このことと関係があるの？いや、きっとある！今までずっと考えて来て、そういう結論に達した私。

私はリュウヤの持ちネタである一発ギャグを、もう一度母に確認してみた。

「なんなの安佳里？あんたもギャグしたいの？」

「そんなのやるわけないでしょ！ただの確認だってばっ！」

「なんで確認するのよ？」

「ちよつとね。いいから教えてよ！」

「あーはいはい。えつとね、やっぱり代表的なのは“フィツチュ”
ね」

「うんうん。まだあつたよね？」

「あとは“おでこスリスリ”“鼻スリスリ”が有名よ。もらったD
VD観ればいいじゃない」

「めんどくさいもん。それほど面白くもないし」

「あんたねえ…（、へ、＃）」

つい母に向かってまずい言動をしてしまった私。ちよつとだけ反
省。

母の言う通り、ここはDVDを見直して検証してみる必要がある
かもしれない。

再生デッキはリビングにある。うちにはノートパソコンがないか
ら自分の部屋で観れないのが難点。

思った通り、私がDVDを再生すると、母もそばにやって来て一
緒に観賞することになった。

「お母さん、よく飽きないよね」

「あんたが好きな歌を何へんも歌ってるのと同じよ」

ちよつと意味が違うと思うけど、とりあえずそれは無視した。

案の定、母のウケは相変わらずすごいものだったけど、私は冷静
に観終えることができた。

笑うより何かヒントを得るために。

そしてその大きなヒントが、まさか母から与えられるとは思っても

しなかった。

「今年の流行大賞は間違いなく彼よ」

「たぶんね」

と気のない相槌の私。

母は構わず持論を展開する。なんせチビリおぱんつを語れば熱くなれる人だから。

「彼のギャグはね、人とのコミュニケーションになってるからいいのよ」

「まあ確かにね」

「だからおでこスリスリなんて、年寄りでもマネしてるし」

「へー、知らなかった…」

「フィツチュだって幼稚園児もやってるのよ。可愛らしいじゃない」

「幼稚園児はオマセだもんね」

「キスって感覚じゃないのよ。もっと軽いスキンシップね」

「ふうん…」

「若者の間でもね、今やディープなキスは嫌われるんだってよ。リポーターが取材してたもの」

まさか母の口から“ディープなキス”なんて言葉が飛び出すとは…（^ー^；）

「お母さん、それ娘に言うこと？（-_-）」

「もうあんたもいい大人なんだから平気でしょ」

母は最近私と友達感覚だ。まあそれはそれでいいんだけど、私の相談相手にはなれない。

部屋に戻った私は、またベッドに仰向けになり、リュウヤのギャグを再度振り返ってみた。

母の言葉からも、明らかになっているチビリおぱんつの社会現象。

ひとつひとつのオチがキュートで可愛い。覆面の変態ぽさがなければもったいいのに。

「ディープなキスは嫌われる時代…か。私にとっては嬉しいことだけど…」

——ハッ!? (。○。)

私はベッドから飛び起きた。

そう、突然気づいたのである。

ひらめくというか、なんというか、こんなことは学生時代のテスト中にもなかったこと。

——そっかぁ…そうだったんだ。

私は一番重要な部分を思い違いしていたことに気づいたのだ。ホント、バカな私。もっと早くわかってても良さそうなのに。

その後、いろいろ考えさせられた私は、夜になるまで迷ったあげく、リュウヤにメールした。

「リュウヤ、時間の都合教えて。会って話したい」

(続く)

26話 彼の好きだった人は…

リュウヤとスケジュールの調整がとれたのは、それから5日後の夜。

仕事を終えた私は帰宅せずにそのまま待ち合わせのカフェへ。

3分も待たないうちに、サングラスにハンティングといったいでたちでリュウヤはやって来た。

来るなりキョロキョロ辺りを見回して警戒している彼。

どう見ても警戒されそうなあやしい人物はリュウヤの方。

「何してんの？」

と、単純に疑問をぶつける私。

「うん。大丈夫だ。俺の正体バレてない」

「パンツかぶってないから当たり前でしょ」

「そうなんだけどさ。やっぱり気になっちゃってね…」

「……………^^;」

昔から天然の入ったリュウヤ。

どこことなく緊張した面持ちで席についた。

「待った？」

「ううん。それほどでも」

「良かった。腹へってない？こんなとこじゃ腹も膨れないだろ？」

「いいの。話しに来たんだから」

「軽くメシ食った方が良くない？5分もあれば牛丼でもガーッと食えるじゃん」

「それは男の人でしょ^^; それに私、天丼の方が好き」

「じゃあ天丼食いに行こう」

私はちよつとイラつとした。

「今日は話が先。食事はいくらでもその後にできるわ」

「そ、そっか…わかった」

私たちは二人とも、飲み物だけを注文して、それが運ばれて来るまではお冷を口にしていた。

少し緊張しているのは私も同じ。

それでも水の入ったグラスを1杯飲み干した頃には、気分も落ち着けたような気がした。

今日、会うまでは話すきっかけが難しいかなって思ってたけど、遠まわしに聞けばリュウヤも話しずらくなるに違いない。

ここはストレートに言うべきと決意した私。

「生放送観たよ。リュウヤの好きな人って誰？」

あまりに私がストレートすぎたのか、一瞬ひるんだリュウヤ。

「ハハ…いきなりだなあ（^ー^;）」

「だつてずっと考えてたんだもの」

「どう思つて考えてたんだよ？」

「どう思つて…ただ普通に気になったからよ」

「それ聞いてどうすんだよ」

「どうするって…どうもしないけど」

そう言われると答えようがない私。

「どうもしないんなら安佳里に言つてもしょうがないし…」

「私ね、かなり調べたんだよ。高校時代のアルバム引っ張り出して全部観たんだから」

「へえ…で、わからなかったのか？」

「うん。そのときはね」

「えっ？じゃ今は？」

「わかつてるよ」

「……」

リュウヤの表情が少し険しくなった。これは私の予想外なこと。
「安佳里…少し意地悪すぎやしないか？わかつていながら何で俺に

聞くんだった？」

リュウヤの声のトーンが低くなり、私は一瞬ドキツとした。

「だってその…リュウヤの口から聞いたかったんだもの」

「もういい…もういいよ」

急に投げやりになるリュウヤ。

このときの頭の鈍い私には、彼の気持ちを察することなんて全くなかった。

「えっ？リュウヤ怒ったの？」

「別に怒ってない」

「怒ってるよ絶対」

「そんなことはない…」

「いいえ、怒ってます！」

「……」

黙りこくってしまったリュウヤ。

仕方ない。私から言おう。たぶん間違いないもの。

「じゃあもう聞かないわ。私から言うから」

「……」

「リュウヤの好きな人って、私でしょ？」

「……」

少し驚いた表情を見せただけで、肯定も否定もしないリュウヤ。

でもそれが逆に私に確信を与えた。

「最初はそうは思わなかったわ。だって、あなたはインタビューで好きな彼女と6年も会ってないって言うんだもの」

「……」

「私はその部分ばかりを信じていたからわからなかったの。あなたのウソはそのひとつだけ。それを除けば全てがみんな私に関係していることばかり」

「……」

「あなたの芸のネタは全て私のために作られたものだったのね」

それに対して、絞り出すような声でリュウヤが一言。

「…そこまで気づいたんだ。」

「ええ。あなたは世間に恋人たちのディープなキスは、今の現代社会のステータスではないと思いませんか？とせよとした。だからフィッチユやデコスリ、鼻スリを流行らせた」

「……」

「それもこれも私がキスができないっていうトラウマをやわらげるため。ディープなキス以外のスキンシップを日常に取り入れ、社会現象にすれば、私の精神的負担が軽くなると考えたからよ。そうでしょう？」

放心状態のリュウヤ。凶星だったのには間違いない。

でもなぜか、その表情は益々堅くなっていく。そして更に複雑な表情に。

鈍感な私は、リュウヤの今の気持ちを察することなど、この段階に至っても全くできなかった。

この約1分後、沈黙を守っていたリュウヤは堰^{せき}を切ったように勢いよく語りだすことになる。

(続く)

27話 私ってサイテー

注文した飲み物が運ばれて来た。

それが丁寧にテーブルに置かれてる間はしばしの沈黙。

リュウヤはエスプレッソ。私はカプチーノ。

二人とも無言のまま、スプーンでカップをかき混ぜ終わると一口喉を潤す。

そしてカップをテーブルに降ろすなり、口を開いたのはリュウヤ。

「俺、安佳里がそんな女だとは思わなかったよ」

リュウヤは私と目を合わさない。彼の視線は掴んだままのコーヒーカップ。

「何よ？ どういうこと？」

「なんかさ、今の安佳里を見ると、自分の推理を面白可笑しく楽しんでるだけじゃん」

「楽しんでるなんて… そんなつもりじゃないよ」

「そうにしか見えない」

「違うよ」

「そんならわざわざ俺に『好きな人は誰？』なんて聞くことないじゃん。知ってたくせに」

「だからそれは、リュウヤの口から聞きたかったって言ったでしょ」

「聞いたところでどうにもならないってさっき言ってたじゃん」

「それは…」

「それってただの野次馬根性と一緒じゃん。スクープネタにするマスコミと一緒にじゃん」

「……」

「そんなにお望みなら言ってやるよ。それで満足するんだろ？」

「そんな言い方しなくても…」

「どうせ会ったのもこれが最後だろうから言っただけ。言っただけか」

ら黙って聞け！」

私はとんでもないことをしたと今になって気づき始めた。
リュウヤに対する配慮があまりにも欠けていたことを。

私って、なぜもう一步その先が読めないんだろっ……

今更反省したところで、全てにおいて遅すぎた。

「俺は…俺は安佳里が好きだった。別れてからもずっと今までお前のことが好きだった」

リュウヤの視線は依然コーヒークップから離れない。

「そうさ。安佳里の推理通りさ。だからって、俺はお前にもう一度告白しようとは思わなかったし、まして俺を好きになれなんて言うつもりも毛頭なかった」

「……」

「安佳里が俺をなんとも思わないならそれでいい。それならそれでなぜほっといてくれない？」

「……」

私は返す言葉を失っていた。リュウヤに返せる言葉なんて一言も見当たらなない。

「それをわざわざ俺の前で謎解きのようなマネをして…どれだけイヤミなことかわかってんのか？」

私もリュウヤの顔が見れなくなっていた。目の前のカプチーノにも手を出せないまま、ただ後悔の念でいっぱいになっていた。

沈黙が続いた。

3分か4分…いや、5分以上だったかもしれない。

私はずっとうつむいたままの状態。

店内を流れる物静かなBGMが、なぜか私の心に沁み入る。

心地良いはずのBGMなのに、私に反省を促すように聞こえるの

はなぜ？

リュウヤが小さな吐息を漏らし、コーヒークップをテーブルに置く音が聞こえた。

どうやら一気にエスプレッソを飲み干したよう。少し上目づかいで様子を見た私。

不思議なことに、彼の様子はさっきまでとは全く違うように見えた。

なぜだろう？表情が穏やかになっていうか……わからない。

それを証明するかのように、再び言葉を発したのはリュウヤの方。さっきまでの荒々しさは消え、本当に穏やかな口調で。それは思いつきを出を話す口調そのもので。

「高校のとき、俺はいつもひとりぼっちだった。こんな変り者だし、いつも自分の世界でしか行動しないから当たり前かもしれないけどな。。でもそんな俺に初めて声をかけてくれる子がいた。それが安佳里、お前だったんだ。それが後にも先にもお前ひとりだけだったんだよ。毎日のように出会ったあの公園に来てくれて、何のためらいも違和感もなく俺と話してくれたし、つまらない遊びまでも付き合ってくれた。会う機会が重なるたび、俺にとって安佳里はかけがえのない存在になっていった。安佳里という時間だけが俺の癒しだった。心安らぐひとときだった。毎日が待ち遠しかった。俺にとって一番大事な人は安佳里しかいなかった。。俺は…俺はキスなんかしなくなっちゃって、安佳里といらればそれで良かった。Hなんかに必要なかった。そりゃ男である以上、生理的現象もあるが、そんなのいくらでも我慢できた。むしろ安佳里はそれ以上の存在だったんだ」

「……………リュウヤ。。」

何も知らなかった私。今頃になってリュウヤのせつなさが伝わっ

てくる。

「あるとき、俺がトイレに立ったばかりに安佳里は気づいた。そしてお前は俺を氣遣って別れた。自分のトラウマのせいで俺を不幸にしたくないと思ったのはすぐにわかった。安佳里も苦しい立場だったし、お前を悩みから解消させるにはそれしかないんだと思った。だから安佳里の意志を尊重したんだ」

私は黙ってリュウヤの言葉を聞きながらも、心に衝撃を受けていた。

「俺達は別れた。プラトニツクな関係のままで。でも俺にはどうしても安佳里が忘れられなかった。俺達はケンカして別れ

たわけじゃない。俺は考えた。安佳里のトラウマが少しでも軽減すればきつと……俺はお前のために何かしたかった。安佳里の悩みを知りつつ、何の役にも立たないで終わった自分に腹が立った。このままじゃ安佳里は幸せになれないと思った。キスのひとつもできないままじゃ、男は誰も相手にしてくれない。次に付き合う男が誰にしろ、フラれるのは目に見えている。俺は安佳里にそんな思いはして欲しくなかった。いつも俺の前で笑ってくれた安佳里でいて欲しかった。でも結局、何もできないまま月日は流れていった。そんな中、俺はオーディションに受かって、目標だったお笑いの道に入っただんだ」

私はリュウヤの話に、只々聞き入っているだけだった。胸に熱いものがじんわりと込み上げてくる。

それと同時に自分の浅はかさを深く反省しながら。

「この業界でやっていくには常に新ネタが必要なんだ。俺はブレイクするネタを必死で毎日やみくもに考えていた。一発ブレイクさせ

れば社会現象になる。世間の誰もがマネをする。俺がひらめいたのはそのときだったんだ。まさに逆転の発想だった。安佳里はディープキスができない。それなら、愛し合ってる恋人たちがディープキスするのなんて、もう流行らないと意識させようと思ったのさ。そこから生まれたのが“フィツチュ”だったんだ。お互いが意識しないうち、不意に隙を狙って手でもホッペにでも額にでも軽いキスをする。そのスキンシップが世間に浸透すれば、安佳里に新しい彼氏ができたとしても、キスで困ることはないだろうと考えたのさ」

うつむいていた私の目から涙がこぼれた。

私が発せられる言葉なんて何もない。あるとしたら懺悔。

これほどまでに私のことを思ってくれたリュウヤ。

私は彼になんという卑劣なことをしたんだろう。

「この前の生放送で言ったことも安佳里の推理通りさ。お前、探偵になれるんじゃないか？好きな女性とは6年間、会ってないと言ったウソ。ああでも言わなけりゃ、マスコミは安佳里のことに気づいて尾け狙うだろ。1か月前に別の番組で会ってるわけだしな」

そうか…そうだったんだ。リュウヤはそこまで考えて…ウソまでもが私のために気遣ったものだなんて。

「俺のやって来たことは何の意味もなかったのかな……結局、安佳里はテレビ観ない人だったわけだし」

やっとの思いで私の口から出た言葉。何度言っても足りない言葉。

「ごめんなさい。。本当にごめんなさい。。」

(続く)

28話 初めての相談

リュウヤにサヨナラと幻滅されて、一人お店に取り残された私。そんな私も気付くとひとりで自宅に帰っていた。

でもどうやって帰ったのか記憶にない。ただ足が痛い。

待ち合わせ場所からは10kmはある。電車もバスも使わずに歩き続けたせいだろう。

俗に、ごはんも喉に通らないほどのショックと言うけれど、私の場合は真逆だった。

ごはんでもお菓子でも、ありとあらゆる家の食べ物に手をつけた来る日も来る日も、ただひたすら食べ続けた。

こんな心の醜い自分なんて、超肥満になってしまえばいいんだ。もっともっとデブって体も醜くなればいいんだ。それで心と比例する。

古い言葉だけれど、これが“ヤケのヤンパチ”と言うのだろう。

でもそれはあまりにも無謀で幼稚な方法だった。

過食症にもなれない中途半端な私は、単にお腹を壊しただけ。

汚ない話だけど、下痢も止まらず腹痛にも見舞われて、逆に落ちてしまった体重。

さすがに普段は無頓着な母も、目に余る私の現状に心配になったようだ。

「安佳里、あんた全然教えてくれないけど、チビりおぱんつさんと一体何があつたの？」

「なんでそんなことわかるのよ？」

「それくらいわかるわよ」

「意味わかんない」

母の前ではちょっと強がって見せるけれど、心はズタズタに弱っている私。

今まで母には悩み相談なんてしたこともなかった。

特に反抗したことはないけれど、過去の悩みは全て自分で解決してきた。

いや…全部解決したというのはウソになる。

今まで自分で処理できないものには全てフタをしてきた。

あるいはそこから遠ざかった。避けた。逃げた。関わりを根絶して来た。

けど、今の私はたまらなく孤独。自暴自棄。

別に答えを見つけてもらおうとは思わないけど、自分の胸の内だけに収めておくにはあまりにも苦しい。

リュウヤのことも含めて、今までに破局した恋愛の全ては、私の自分勝手な事情から起きたこと。

この世に生まれて24年、今私は初めて母に、自分のトラウマを告白した。

またそれと同時に、間接的ではあるけれど、そのために失った恋愛の数々についても話した。

こんなことってあるのかな？

母にひとつ話せば、次から次へと言葉が勝手に連なってゆく。これってなんだろう？

母は私が話し終わるまで一言も口を挟まなかった。

うんうんと頷きながら、優しい目で私を見つめながら聞き入ってくれている。

そんな母の表情からにじみ出るオーラが、私の重たい口を開かせてくれたのかもしれない。

これがおそらく、真剣な眼差しでしたら、私は途中で口を閉ざしただろう。

とっても不思議だった。

思いのたけを母に伝えたと、気持ちって本当に楽になるものなんだなって。

なぜなんだろう？別にハッピーエンドになったわけでもないのに。

「ごめんね安佳里。お母さん、あんたのトラウマなんて全然知らなくて」

やっと口を開いた母が、いきなり私に謝るなんて、驚くばかりだった。

「お父さんには絶対内緒だよ」と、念を押す私。

「当たり前でしょ。そんなことよりあんたからまだ聞いてないことがあるわ」

「……え？別にもう何も……」

「あるわよ。だから悩んでるんでしょ？」

「私は…私は自分の馬鹿さ加減が齒痒くてたまらないだけだよ」

母は私の顔を数秒間、じっと見つめてから穏やかに言った。

「安佳里。あんただって、今もチビりおぱんつさんのことが好きなんじゃないの？」

「……!」

(続く)

29話 自分でどんなヤツ？

ビックリしたのは図星だったからじゃない。

今まで私に無関心だった母が、人の心を見通すような言い方をしたから。

——そんなはずないじゃない。

私は冷静にリュウヤを見てたんだもの。

6年ぶりに会っても、ときめきなんて全然なかった…

「お母さん、勝手な推測はやめてよね。リュウヤと私は別に何でもない。好きとか嫌いの関係じゃないの」

こう言っても母は信じようしない。

「安佳里、そんなに強がらなくても…」

「全然違うもん。それはお母さんの見間違い！リュウヤを好きなのはお母さんでしょ！」

「（〃　　）ぐえへへっ、そうよ。悪い？」

「（ノ——）ノコケッ！」

ミィハーな母。どうせ1年後にはまた他の芸人とか、イケメン俳優に乗り換えるに決まってる。

「それでどうなの？安佳里は彼にちゃんとお詫びしたの？」
依然穏やかな口調で話す母。

「謝ったよ…ちゃんと謝ったけど……なんか思いつきり軽蔑されちゃったみたいだし」

「あらあ…やっぱりねえ」

「やっぱりって…^^;」

「そりゃそうよ。普通ならむかつくものよ」

「お母さんもそう思うんだ…」

「男の人にしてみれば、上から目線で自分の気持ちを弄ばれたって思っんじゃない？」

「そっか…そうだよな…」

意気消沈な私。胸にチクリと刺さる。

母でさえ、私の話を聞いただけで相手の気持ちを察していた。

私ってどんだけ鈍感なんだろ。ていうか、人間的にどうなんだろ？

男は愚か、同姓からも嫌な女だって思われて来たんじゃないだろうか？

「もつと時間をかけていいから自分の心を整理しなさい」

母は私の肩にそっとタッチして、部屋を出て行った。

小一時間ほど、考え込んでいた私。

けど余計に混乱するばかり。

だって、頭の整理なんて必要だと思ってなかったんだもの。

それは単に、リュウヤに対しての失言を悔やんでただけだったから。

なのに母から『本当は今でも彼が好きなんじゃないの？』なんて言われると、自分の気持ちすらわからなくなる。

私はたまらなくなつて、親友のさゆみに電話をかけようとした。でもその直前、ふとケータイへ手を伸ばす私の手が止まる。

——さゆみは私のことを親友だと思ってるんだろうか…？

こんな思いが頭をよぎったから。

一方通行の親友。私が勝手にさゆみを親友だと思ってるだけ。

考えてみれば、今まで私は彼女にさえ相談ごとなんてしたことない。

お互いの日常の不満をグチる愚痴友としては楽しく言い合える仲だけれど、所詮それまで。

親身になって聞いてもらえとも限らないし、さゆみに真剣な話をするのってなんか恥ずかしい気がする。

私は更に5分くらい考えてから意を決した。

やっぱり話してみよう。

いつもテキパキしてるさゆみなら、きっと言葉を濁さずはつきり言ってくれるはず。

それに、私のことを本当の親友だと思ってってくれてるのかどうかわかるかもしれない。

私はケータイの着信履歴から彼女に電話をかけようとした。

何気に見た履歴画面。よくみると着信は全てさゆみ。

少しか画面をスクロールしても、出てくる名前はさゆみばかり。長年セフレとばかり付き合ってたから、女友達との交流はなくなっていた。

——寂しい女だわ私って。。。

こんなことを思いながら私はケータイ画面を見つめていた。

（続く）

30話 さゆみの本音トーク

「ダメダメ。芸人なんて食いつばぐれるって」

ケータイでいきなりさゆみに言われた一言がこれ。
そして続けざまに、

「ウチの親戚にも芸人の養成学校を卒業したのがいるけど、今だに日の目も見ないしバイトで食いつないでるんだよ。どうせ先がないのにバカな奴でさ」

「ちょっと待つてよ。何か勘違いしてるよさゆみは」

「何言つてんのさ。安佳里はテレビ観ないからわかんないんだよ」

さゆみは男兄弟4人の中の妹として育ったせいか、性格はサバサバしていて、言葉遣いもビミョーに荒い。

「それどういうこと？私がテレビ観ないことなんて関係ないじゃない」

理解不能な私はさゆみに説明を求める。

「あんね、チビリおぱんつみたいな1発ギャグ屋なんてさ、1年後にやあもう芸能界から消えてるもんなんだってば。だからよしな」

この“よしな”という言葉で私は気がついた。

まさかさゆみまでもがウチの母と同じ考えだなんて…

「ねえさゆみ、ひよつとして私がチビリおぱんつのことを好きじゃないかって思ってる？」

と、ここはストレートに確認してみる。

「え？違った？」

「（ノ——）ノバタツ！やっぱし…」

なぜなんだろう？どうしてそう思うんだろう？

「言つときますけどね、私、全然そんな気ないから」

と言ったところで、さゆみには言い訳にしか聞こえていない。

「ええ？？だったらなんでウジウジ気にしてるのさ？」

「だって…そりやそうでしょ。深く人を傷つけてしまったんだもん」

「フッフ（ー）…」そんなの安佳里らしくないよ

と、なぜか不的な笑いのさゆみ。

「あのさ、そんな人を極悪非道みたいに言わないでよ」

ちよつと憤慨した私。

「じゃあ言うけど、安佳里が今までポイしてきた男たちに対してはどうなの？私の知ってる限りでは、あんたは男に謝ったことなんてなかったし、後悔したことだって一度もなかったじゃない」

「まあ、そりや…」

「それに今までに別れた男たちの記憶だって、どうせほとんど残ってないんでしょ？」

「ギクツ！Σ（・ω・；——」

さすがさゆみ。痛いところをつく。確かにその通りかもしれない。

今この部分だけを人に聞かれたら、私ってどれだけアバズレなんだって思われそう（――；）

「だってあれはみんなセフレだもん。彼氏じゃないもん」

私にはやはり言い訳にしかない言葉しか返せない。

「ほら、自分で認めた。チビりおぱんつが彼氏だったってこと認めたじゃん」

「それはずっとずっと昔の話。高校時代のことよ」

「なのに安佳里は執拗に気にしてる。彼への思いが残ってないなら、反省なんてするはずないし、とくに忘れてるはずだよ」

「もうっ！あー言えばこー言うんだから！さゆみは」

彼女にこんな解釈めいたことを言われると、自分の真実の気持ち之余計に混乱して来たような気がする。

「安佳里、もう少し冷静になって考えてみたら？」

「私は冷静だよ」

「違う。なぜチビリおはんつのことを忘れられないのかってことをじっくり考えてみな。何か結論が出たらまた相談にのるよ」

「Σ（□）：ええーっ！そんなのわかんないよー！」

もうこれ以上考え続けるのもしんどいのにさゆみったら…

「決めた！忘れるわよ。私、もう考えない。きれいさっぱりに忘れることにする！きっと自然に忘れるよ。今までだってそうだったんだから」

開き直った私がさゆみにこう告げると、彼女からはすぐに返事が来なかった。

そして数秒間の沈黙後、さゆみがまたまた意味ありげな言葉を私に投げかけた。

「最後にあと一つだけ言つとくよ。もし、それでも彼のこと心に引っ掛かるなら、安佳里は自分で気づいてないだけで、やっぱり彼のことが好きだってことだから、それはちゃんと認めなさい」

「それって強引すぎない？」

「黙って聞きな。すぐ終わるから」

「…うん」

「そして安佳里なりのアピールをすべき。絶対安佳里の方からしなきゃダメ！」

「アピールって何よ？私もあなたのことが好きだったって言えって？」

「そう。軽蔑されちゃったんだから、失恋覚悟で攻めなきゃダメ。

その姿勢を見せなきゃ相手に伝わんないよ」

「おかしいよさゆみ。さつきは芸人なんて食いっぱぐれるからやめるって言つてたくせに」

「だ・か・ら！それだけ安佳里の思いが強かったらの話。言わなきゃ悔いが残るでしょ？」

「その場合はね」

「そんで忘れることができたなら『ハイそれまでよ』ってな具合で別にいいじゃない。アタシの言いたいのはここまでよ」

通話が終わって私は大きなため息をついた。なんかどつと疲れちゃった。

親友と話して疲れが出ちゃうなんて、やっぱり私たちは本当の親友とは言えないのかな？

でもさゆみがあんなに真剣だったのも初めてだったな。

私がリュウヤを好きなことに気づいていない？
そんな訳わかんないことあるはずないじゃない。
連ドラやケータイ小説の世界ならいざ知らず。

それに、おそまつながら私、思春期なんてとつくに通り越してるわけだし。

——もう関係ないからさっさと忘れよう。

——もし失恋覚悟で攻めるとしたら、どう話そう？

——ダメダメ！私はリュウヤに軽蔑されたんだからもうTHE
ENDよ

——でも彼に対してお詫びが足りてないとしたら？私はどうア
ピールすればいいの？

——やっぱりダメ。私から関わるのは、相手にとっても迷惑な
だけ。

——もうっ！本当の私の気持ちって何なの？私はリュウヤが好
きなの？キライなの？

こんなことを考えている私は、リュウヤのことを忘れるどころか、
3か月…半年が経っても解決することもなく、悩み続けるハメにな

ってしまった。

私って、何も決断できない人間だった。ホントバカみたい。私に一体何ができるんだろう？ 何もできないじゃない。歴史に名が残ることなんてしないでいい。そんな器じゃない。なのに、ごく普通のことができないなんて情けない。自分を表現することができないもどかしさ。人に気持ちをぶつける前に、自分の気持ちが定まらない。

私はこれら全てを自分の歪んだ性格とトラウマのせいにした。たぶんこの自己分析は当たってる。

でも…

でも、打開策は何もない。

更にその1か月後、私は仕事帰り立ち寄った本屋で、驚く記事を目にした。

“チビリおぱんと、モデルでタレントの横瀬リリアが深夜のお泊りデート”

Σ—111（ ; ）——1
私の体に電流が走った。

（続く）

31話 私、何やってんだろ

テレビの観ない私でも、横瀬リリアは知っていた。

最近よくファッション雑誌やトレンド雑誌、そして男性誌の表紙にまでなっている人気モデルだ。

——なんでお笑いのリュウヤとグラビアモデルに接点があるのよ？

芸能界のウラのことはよくわからないけど、よくよく考えてみれば不思議なことでもないと感じた私。

スポーツ選手と結婚する歌手やアナウンサーもよくいるし、歌手と俳優、お笑と女優のカップルもいる。

それにしてもリュウヤはこの女のどこが気に入ったんだろう？

横瀬リリアはいかにも気が強そうな負けず嫌いな顔をしていて、可愛いというよりセクシー系。

ちよつと前に読んだ雑誌の記事には、今までの恋愛体験数は8人で、その8回とも彼氏の浮気により破局したとある。

でも彼女の高いプライドのせいかな“捨てるのはいつも私の方から”と負け惜しみの言い訳をしている。

そもそも彼氏のケータイをこっそりチェックする癖があるそうで、これがトラブルの原因にも繋がっている。

どう考えてもこのモデル、リュウヤにはキツすぎないだろうか？

6年間、私に一途だったリュウヤ。

もし簡単にポイ捨てされてしまったら、リュウヤは立ち直れなくなるんじゃないだろうか？

雑誌の取材にまで、過去に付き合った男の数や別れた原因を平気

で言える女なんて、到底私には理解できない。

こんな女とリュウヤが絶対うまくいくはずはない。

このタカピなモデルのために、彼が失意のどん底を味わう必要はない。味わっちゃダメだわ。

リュウヤの目を覚ましてやらなきゃ。でも…一体どうやって…

ハッ（。〇。；）

その時だった。私が珍しくひらめいたのは。

——そうだ！これならきつと…

その日の夜、私は自分の部屋で時が来るのを待った。

午後10時…そろそろいいだろうか？いや、もうちょっとあとで…開いたケータイを片手に持ち、ちよつとドキドキしながらベッドにうつ伏せになる私。

午後10時半…よし！もういいかな。

私は登録メモリからリュウヤへ電話をかける。

でもコールが3回続いたところですぐに切った。

これは最初から決めていたこと。

もし1回目のコールで電話を取られたなら、すぐに切る予定だった。

この後は返信コールが来ても受けないようにマナーモードにする。そしてすぐさま、今度はメールをリュウヤに送信した。

“リュウヤの気持ちも知らずに本当にごめんなさい。今まで私のことをずっと思っていてくれてありがとう”

「これでよし！」

ケータイを閉じてから、何気に部屋の鏡に映った自分を見ると、顔が意地悪そうにニヤけていた。

——と次の瞬間、いきなりケータイからのバイブ音。

「さっそくりユウヤ？それとも…リリア？」

世の中そんな思った具合にはいかないもの。

それは私が予想していた二人とはウラハラな人物からの着信だった。

「全くもう、こんなときに…」

無視するわけにもいかないので、仕方なく電話に出た。

「さゆみ、何か用？」

「（へ）ん？…安佳里、もしかして誰かからの電話待ってた？」

「なんで？」

「電話に出るの早すぎ。それに渋々出てる」

さすがはさゆみ。勘が鋭い。それとも私がバカ正直すぎ？

「まあちよつといろいろあつてね（へへ）気にしないで、で、何の用？」

「じゃあ手短に言うよ。今日さあ、昼休みにワイドショーで観たんだ。チビりおぱんつのスキャンダル。知ってた？」

早速さゆみも気づいたようだ。

「知ってるよ。私も本屋で記事読んだ」

「なんだ。知ってたんだ。今どんな心境？もう吹っ切れてる？まだ凹んでる？」

「凹んでるはずないでしょ！その逆。さっきね、ケータイでリュウヤにいたずらしてやったわ」

「は？何それ？どういうこと？」

私はさゆみに事情を説明した。

すると彼女からの予想外な返事が。

「あのね安佳里、あんたのやってることは、ただの嫉妬だよ。あん

たはあいつが心の底から好きなんだよ。まだわかんないの！」

「（□、；）ええ〜！！」

（続く）

32話 頭を冷やしてみたら

いつも私は半身浴。

さゆみとケータイで話したあとに入ったお風呂。

もう1時間は入ってるかもしれない。いえ、それ以上かも。

さゆみに頭を冷やせとハッキリ言われて、素直になった私。

反論できなかった。マジで。

それってやっぱりさゆみの言うとおりだから？

心のどこかで認めていたから？

いけない。今はもうそんなことに疑問を持つ段階じゃない。

私はリュウヤが好きなんだ。これは動かしようもない事実。認めなければならぬ真実。

あのときの会話で目が覚めた私。さゆみに救われた私。

——安佳里の部屋。約1時間前……

私はさゆみに自分の思いつきを説明していた。

「今ね、リュウヤに電話したとこなの」

「えっ？ そうだったの？ で、彼はなんて言ってた？」

「違う違う。電話に出る前に切ったんだよ」

「はあ？」

「そのあとメールもしてやった。うまくいけば、リュウヤとリリアはケンカになるかもね」

「……あのさ、安佳里何でそんなことすんの？」

勘の鋭いさゆみにしては珍しい質問。

少し不思議だったけど、親友として正直に話しておこうと告白し

た私。

「だってね、横瀬リリアってさ、人のケータイをチェックするの得意なんだよ」

「????だから何なの?」

「もうわかるじゃない。リユウヤとリリアは同棲してるって噂もあるんだよ。だとしたら…ね?わかるでしょ?」

「はあ…そういうことか」

やっとさゆみも気付いたようだ。

「安佳里が考えたことはこうね。リリアはたぶん、チビりおぱんつのケータイをチェックするだろうって」

「ピンポン、(、)ノ」

「そのとき安佳里からの着信とか意味深なメールを送っておけば、浮気を疑ったりリアはチビりおぱんつと別れるって」

「さすがさゆみ。その通り!もし今日うまくいかなかったらまた明日すればいいのよ」

「……………」

このときのさゆみは無言だった。

「さゆみ?何か言つてよ。うまくいくと思う?」

このあとだった。さゆみの目が覚める言葉が続いたのは。

「安佳里、あんた自分のしてることがわかってんの?」

「もちろん」

「全然わかってない。何でそんなことしなきゃなんないの?彼に恨みでもあるの?」

「そんなのないよ。私はただ…」

返答に困った私。言われてみれば、なぜこんなことをしたのか理由が言えない。

「じゃあアタシが言つてあげる」

さゆみの口調が鋭くなってきた。なんか怖い。

「あのね安佳里、あんたのやってることはただの嫉妬だよ。あんたはあいつが心の底から好きなんだよ。まだわかんないの！」

「（□、；）ええ〜？」

「あんたは横瀬リリアに嫉妬してる。彼を奪われたくないからよ。好きでもなんでもなかったら、無視してればいいだけでしょ！」

「そうだけど…」

「ねえ安佳里、昔の話かもしれないけど、彼とはキライになって別れたんじゃないんでしょ？」

「うん。。。」「

「例のトラウマが原因してるんだ？」

「うん。。。」「

「（；、-、） 3 フウ」

ケータイの向こうのさゆみは深いため息をついた。でもすぐに強い口調で話し出す。

「安佳里、あんた自己中過ぎるよ！彼が可哀そうだと思わない？」

この言葉には私も反論しなくなった。

「さゆみひどい！リユウヤと別れたのは私の自己中が原因じゃない！あのと私をよく考えたもん。彼を気遣ったのは私の方」

「果たしてそうかな？」

「そうよ！これ以上私と付き合うのは、彼に申し訳ないと思ったからよ」

「そう！それよ。それが自己中だってえの！」

「…え？何でよ？」

「そんな辛い思いをする前に、あんた自身が自分のトラウマを少しでも克服しようとした？努力した？」

「それは…だって無理だもん」

「ほら、そう思ってる。だからいつも別れは自分から切り出してる。それが自己中だって言うの！」

「……」

「私の知ってる安佳里は、いつも自分に合わせてくれる男だけを選んだ。でも全てそいつらも最初のうちだけだった」

「別にいいのよ。その人たちはみんなセフレなんだから。セフレしか寄って来ないのよ」

「安佳里がそうしたんじゃない！あんた自身はどうなの？人に合わすってしたことがあんの？」

とどまるところを知らないさゆみの口撃に防戦一方の私。

「いい？安佳里。男はみんな性欲のかたまりだなんて思う前にさ、頭を冷やして自分のことをもつと考えてみれば？」

「考えてるよ。」

「考えてない！聞きなさい。男はバカも多いけど、そんな人ばかりじゃない。わかる？」

「……」

「現にあんたのトラウマを克服しようと、ギャグのネタにまでして考えてくれた人がいたなんて、普通に考えても信じられない美談よ。そんな人に6年間も思われてた安佳里って、どれだけ幸せ者だと思ってるのよ！このバチアタリ！」

私は思いつきり金槌で頭を叩かれたような衝撃に駆られた。

今、この瞬間まで私はリュウヤの長年に渡る真剣な気持ちに曖昧に感じていた。

冷静に考えたら、これだけの一途な思いつて、どれだけすごいことなのかと。

なのに私はなんて罪な女。なんて愚かな女。イヤな女。

さゆみの口調が柔らかくなった。

「ねえ、もう一度きちんと謝ったら？」

一瞬ためらった私。

「でも…もう無理だよ。完全に嫌われちゃってるもん。彼女だって

いるんだし」

「それとこれとは別。仲直りしないと、一生疎遠になるよ。それに……」

言いかけてやめたさゆみの言い方が気になった。

「それに？何なの？言って」

「んー、これはアタシの直感だけど、チビリおぱんはそう簡単に安佳里のことを忘れることなんてできてないと思うな」

「???どうしてそう思うの？」

「だって高校卒業してから6年間も安佳里のことを思ってた人なんだよ」

「まあ、そうみたいだけど」

「で、あんたさ、彼の今のケータイのメアド、何で知ってたの？」

「なんでって……リユウヤは高校のときからメアド変えてなかったんだもん。ただそれだけだよ」

「ほらやっぱし」

「やっぱしって？」

「私思うんだ。それはね、いつ安佳里からメールが来ても、ちゃんと受信できるようにしておきたかったからだよ」

「……そうかなあ？」

「だって、風変わりで友達いない男だったんでしょ？」

「うん」

「なら絶対そうじゃん。さ、安佳里。もう悩まないで、しっかりしなよー!」

「……う、うん。。」

こうして、さゆみペースでの通話は終わった。

「安佳里ーっ!風呂まだ終わらんのかーっ!？」

「Σ（ノ。。）ノハッ！」

父の声に我に返った私。

「俺の一番風呂を譲ってやったのに、ダラダラ入ってるんじゃない！」

「怒らないでよ。もうすぐ上がるから」

父のイライラがわかる。

全くもう、一番風呂が父親からだなんて、いつの時代の話してんのよ。。

その5分後、お風呂から上がった私の心には、モヤモヤなどもうなかった。

（続く）

33話 沈黙の日々

自分の気持ちに気づいた私に新たな難題が押し掛かっていた。

いくらリュウヤが好きだとわかって、彼にはもう彼女がいるんだもの。

しかも相手はモデルでタレント。私のような冴えない一般人なんか、もう出る幕もない。

それがもどしくて私は鬱気味になっている。

リュウヤの心の大きさ、優しさ、一途さ、愛情の深さをなぜもつと早く受け止められなかったのか？

セフレと毎日ダラダラ過ごしていた私に、救いの手を差し伸べてくれていたのはリュウヤ。

ずっとテレビ画面からサインを送り続けてくれたリュウヤ。

なのに、それに気づいたときには彼の気持ちを逆なでするような振る舞いをしていた私。

全ては遅すぎた。横瀬リリアに嫉妬するくらいなら、なぜもつと早くその前に。。

今更だけど後悔ばかりが先に立つ。

決して人のせいじゃない。気づくのが遅れた私が全て悪いだけ。

そもそも私の経験した恋は全て軽いもの。

いつも表面だけの恋で、恋愛と呼べるものじゃなかった。

今までの恋は全て私のわがまま。さゆみの言うとおり。

別れたら次があるとクールに割り切っていた。

数多く付き合えば、恋多き女だなんて勘違いしてた。

私ってなんて幼稚だったんだろう。この年まで何も成長していない。

いたずらに時が過ぎて行つた。

メールしようと思ひながらも、一通も出せずじまいに終わる日々。何でこうなつちやんだろ？私って情緒不安定？

ホント不思議なもの。

嫉妬の念に駆られたときは、いともた易く迷惑メールを打てたのに、今は文字を打っては取り消してばかりで、送信ボタンが押せないでいる。

——今の私はリュウヤに何をしてあげられるんだろう？

ふとこんなことを思つてしまった。

何もできないことはわかつているのに。

だからメールも打てないでいるのに。

リュウヤに今の彼女がいる以上、私が関わるのは余計迷惑なだけ。彼のためにしてあげられるとしたら…

それは黙って静観していること。それ以外にないのかもしれない。

そんな中、事態に変化が現れたのは、年が明けてからのことだった。

それは私ではなく、リュウヤの方。

お笑い芸人の一発ギャグは寿命が短い。

大ブレイクしたとしてもせいぜい、その年の1年間だけ。

流行は年をまたぐとまたたく間に衰退し、影も形もなくなるもの。世間ではもうフィツチュやデコスリ、鼻スリなどのギャグは誰もしなくなっていた。

リュウヤの出演する番組は激減し、時代の波と共に彼の存在もテレビ界から消えつつあった。

ほとんどテレビを観なかった私が、やっと観るようになった連ドラやバラエティ。

なのにそれと反比例してリュウヤが画面から遠い存在になってゆく。

やっぱり私とリュウヤは最初から縁のない存在なのかな？

と、本気でそう思う私。

休日のこの日はけっこう激しい雨。

外に出る気もさらさら起きず、日曜の午前中は部屋でまったり過ごすことに。

そんなとき、何気にテレビの番組欄を見ると、ある一点で目が釘付けになった。

「あー！これからリュウヤが出る！しかも生放送だ！」

（続く）

34話 一発屋トップ3

日曜午前10時からの人気バラエティ番組、朝生！珍客サンデー。今週のゲストは去年、世間をある程度ブレイクさせたピン芸人の3人。

しかし言葉を変えると、今や人気も急激に下火になっている3人でもある。

そんな3人がなぜ番組に呼ばれたか？

それは今週の番組のサブタイトルが物語っている。

“一発屋芸人特集！今日でこのネタも見おさめ？”

いかにもブラックユーモア過ぎて苦笑いしかできない。

そしてその中の一人に“チビリオぱんつ”ことリュウヤがいる。

他の芸人のことはあまり詳しくないけど、母から何かのついでに聞いたことがある。

一人は、自称すつとこどつこいの“すつとこドンキー”

芸風としては毎回ステージ上で、とても食べられる代物とは言えないオリジナル料理を作る。

ウケの良かった料理としては、すつとこ土鍋、すつとこどんぶり、すつとこドリンクなどがある。

そしてもう一人は女性で“寝耳ねみみにみずな二水菜”。

世間からはすでに“ミズナちゃん”という愛称で定着している。

自虐ネタが世間で意外にウケて、有名なオチとしては、

「こんななんつたらあかんでえ〜！」

と、自分の丸い顔や体型をボロカスに卑下し、更には性癖や失恋話までも暴露して笑いをとる。

なんとも悲しい芸風に思えるのは私だけなんだろうか？

メイン司会は以前リュウヤが単独で出演したときと同じ女子アナ。各自、司会者と10分間のフリートークがあり、その後5分間のネタ披露。

トップバッターは、すつとドンキー。二番手はミズナちゃん。でも残念なことに、この二人のトークもネタも全く笑えなかった私。

スタジオ内でも笑いが起きず、むしろ気の毒に思うほど。司会の女子アナの引きつる愛想笑いも視聴者にはバレバレ。やはり時代の流れの変化に対応できない芸人はこうなる運命なのか。。

そしていよいよリュウヤの出番になると、なぜか恐ろしく緊張してしまう私がいた。

ならば観なければいいだけなのに、観ておかないと思う真逆な自分もいた。

まずはフリートークから。

司会の女子アナがリュウヤのプライベートに迫る。私のドキドキ感も更に高まった。

「以前、チビリおぼんつさんがこの番組に出演されたときに言ったこと、覚えてますか？」

「全然覚えてません」

「あら（ノ——）ノコケッ！」

「教えてくれたら思い出すかもしれませんけど（ハ——ハ——）」

私は部屋のテレビを食い入るように見入っていた。

積極的に質問を投げかける司会者。大体その意図はわかる。

ネタに飽きた視聴者に興味を持たせるのは、ゲストのプライベ―

トな部分を際どく攻めること。

女子アナが質問を続ける。

「チビリおぱんつさんは高校時代から6年間、ずっと好きだった女性がいるって言うてたじゃないですか」

「あー…はいはい。そのことですか」

——リユウヤはわざとボケたんだろうか？

「それじゃ聞いちゃいますけど、それって今交際中の横瀬リリアさんのことだったんですか？」

「いえいえいえ、それは違いますよ。一般の人ですからリリアさんとは関係ないです」

「あら、それじゃ結局その彼女に告白しないまま、リリアさんと交際を始めたということですか？」

「いやその…」

言葉を濁すリユウヤに女子アナの表情がハツとなり、すぐに謝罪の言葉に変わった。

「あ…すみません。私、余計なことしゃべったかもしれません。別にリリアさんとの仲を裂こうとしてるわけじゃなくて…」

「あー平気ですよ。わかってますから」

意外に淡々としているリユウヤ。

「生放送ですので、言えないことは無理に答えていただくて結構ですから」

と一応弱腰に見せているような女子アナ。でも本音は絶対違はず。
「いいんですよ。ここで僕がちゃんと答えないと、見ている視聴者の方も面白くないでしょう」

「えっ？じゃ…じゃあ」

女子アナの顔から、してやったりという表情がうかがえた。

「ハッキリ言いますよ。僕は横瀬リリアさんとはもう終わってます」

「Σ（ノ。。）ノええええええ！」

このビックリ発言にはテレビを観ている私も驚いた。まさにダブルショック。

一つは付き合っていたという噂が事実だったこと。
もう一つは、それがあつという間に破局していたこと。

司会の女子アナも、どう話を進めていいかたじろいでいて、オーソドックスな質問をするのが精一杯。

「それは、チビリおぱんつさんがフラれたってことでいいんですか？　^^」

「ハハ…普通はみんなそう思うでしょうね」

何やら意味深な発言のリユウヤ。

「あの…もしよろしかったら、破局の原因を教えてくださいませんか？」

「ええ」

リユウヤは簡単に返事はしたけど、緊張した表情がありありと観てとれる。

「横瀬リリアさんには本当に申し訳なく思っています。お付き合いを終わらせたのは僕の方なんです」

「Σ（ノ。）。ノうつそおおおお！」

女子アナと一緒に同じ叫び声をあげたテレビの前の私。

「一体、何があつたんです？　今人気のモデルさんをフルなんて…」
「はい。僕はバカなんです。理由は至って単純なんです。僕は…僕はどうしても高校時代から好きだった彼女が忘れられないんです」
「……………」

これで私はトリプルショックになった。

「関係者の皆様や、リリアさんのプライドも傷つけてしまつて本当に申し訳ないと思つてます。テレビで言うべきことじゃなかったんですけど…でも…」

「でも…何です？」

「万が一、僕の忘れられない彼女がこのテレビを観てくれているなら、この思いを伝えたいと思って…」

私は固まっていた。廊下からドカドカと足音を立てて母が部屋に飛び込んできた。

「安佳里、テレビ…観てたのね。」

リュウヤは更に言葉を続けていた。

「それと、今も言いましたけど、テレビでこのことを公表したことで、リリアさんサイドに深くご迷惑をかけた責任をとろうと思います」

もつすっかりバラエティ番組ではなくなっていた。

リュウヤは最初から、このことを言うつもりだったのに違いない。でも、責任をとるって一体なんだろう？

私は聞き耳を立てて、リュウヤの次の言葉を待った。

「僕は…僕は、これをもって芸能界から引退します」

「……………」

今日、4つ目のショック。

（続く）

35話 バッシング

リュウヤは一体何を考えてテレビであんなことを言ったのか、私には理解できなかった。

結局、お笑ネタもしないまま、その時間を謝罪に費やした彼。番組自体も何の盛り上がりもないまま終了した。

頭が混乱する私。

一体私はどうすればいいのか、何かすべきなのか？何もしくていいのか？

考えれば考えるほど余計にわからなくなった。

私はリュウヤが好き。最近やっとそれに気づいたばかり。

そんな折、リュウヤはテレビで私に対する気持ちを告白してくれた。

普通ならこれで両思いが成立して、めでたしめでたしというところ。

なのに、リュウヤにはそう簡単には済まされない重大な問題がある。

番組放送が終わった次の日のワイドショーでも、この話題を取り上げられた。

そのほとんどがリュウヤバッシング。

彼が横瀬リリアに対して、何の配慮もなくひどい仕打ちをしたというのがメイン記事。

その1・前の彼女が忘れられないという身勝手な理由で、現在の彼女を簡単に捨てた。

その2・テレビでけじめをつけたつもりが、リリアの心とプライド

を余計に傷つけた。

その3・リリアを捨てて間もないのに、メディアを使って前力ノにアピールするのは卑劣極まりない。

その4・とにかく常識から外れた自己中心的な愚かな行為である。

こんな意見が飛び交って、リュウヤを支持するコメンテーターや芸能リポーターなどは一人もいなかった。

リュウヤへの風当たりは予想よりはるかに厳しく、引退やむなしと誰もが納得する結論に達していた。

正直なところ、私もマスコミと同じ思いだった。

私がリリアの立場だったら、たぶん心がズタズタになっていたと思う。

きつと取り乱して手のつけられない女になっていたかもしれない。

そう思うと、せつかくの両思いであったとしても、嬉しさが半減、いやそれ以下になってしまう。

——リュウヤ…どうしてももっと早く言ってくれなかったのよ。

リリアと付き合う前にもっと早く。。

このことさえなければ、私はリュウヤの元へ駆けつける勇気が湧いたかもしれないのに。

もう無理。きつと無理。もうあなたのそばへは行けない。。

何度も彼にメールをしようと思いつつも躊躇してケータイを閉じている私。

そんな繰り返しをしているある日、リュウヤ側からのメールを受信した。

電光石火のごとく、メール内容を確認する私。

“安佳里、先週のテレビ観てくれたかどうか知らないけど、今回の件では君にもこれから迷惑をかけるかもしれない”

「えっ?...これから？」

すぐに意味が呑み込めない私。メールの続きを急ぎ読む。

“マスコミが君を探し当ててコメントを求めて来るかもしれない。その時は俺のことなんか知らないと言っても言ってくれ”

文章はこれだけ。

なるほど。これで少しは意味がわかる。

でも私のところにマスコミが来るなんて……

本当に来たらどうしよう？マジで困るもの。居留守使おうかな？

その後、不安と気疲れからか、不眠症も加わって、仕事も3日休んで部屋で寝込んでしまった私。

ごはんもほとんど食べれなくて、母も心配してくれたけど、リュウヤに関してのことは何も触れて来なかった。

たぶん私への気遣いだと思う。感謝しなくては。

そんな私のケータイに、次なる予想外の人からの着信コールがかかって来た。

でも番号に見覚えがないし、当然登録もされてない。

きつと間違い電話だろうと思いつつ、とりあえず電話には出てみた。

案の定、声に聴き覚えなどない男の声。

「もしもし、そちらは安佳里さんのケータイですか？」

——ゲッ！Σ（・ω・；）——知らない人が私の名前を知ってる！

「失礼ですが、あなたは誰…ですか？」

「あ、大変失礼しました。僕は母田モツチボタといいます」

「ふざけないで！切ります」

「あーっ！切らないで切らないで！僕はチビリおばんつと同期の芸人なんです」

「ボタモツチーなんて聞いたことないわ」

「すみません。僕はまだ売れてないので…（^| ^;）」

「で、何の用です？なぜ私のケータイ知ってるんですか？」

「あのー実はですね、今、チビリおばんつの精神状態がかなり鬱でして…」

「リュウヤが…」

「ここ毎日、酒に溺れて正気を失いかけてます。今は僕の横で爆睡してますけど…」

「……」

「今のこいつを救えるのは、安佳里さんしかない」と勝手に僕が思ってます」

「ホントに勝手ね」

「すいません。。とにかく何とかしないと想着まして、寝てる間にこいつのケータイメモリを見たら、安佳里さんが登録されてたので、かけてしまったというわけです」

「そんなこと言われても…」

「こいつの心はかなり参ってます。このままじゃ精神分裂してしまいそうなんです。何とか救ってもらえませんか？」

私の心が揺らいた。

何とかしてあげたい気持ちの反面、自業自得だという側面もある。

「私、ちょっと思うんですけど…」

「なんなりと言って下さい」

「ええ。ちよつとリユウヤには酷かもしれないけど、もう一度正式に、横瀬リリアさんへの謝罪会見をした方がいいんじゃないかしら？」

「えっ？」

「仮にそれができないとしても、ちゃんとリリアさんにはどこかで謝罪した方がいいかと…」

「ん~~~~」

なぜかボタモチーという芸人は、唸って考え込んでしまった。
数十秒のち、彼はやっと口を開いた。

「それはできません。ていうか、する必要はないんです」

そんな意外な言葉に疑問しか残らない私。

「私には意味がわかりませんけど？」

「あのですね・・・」

ボタモチーの声のトーンが低くなり、話すペースも若干スローに変わった。

まるで抑えきれない感情を押し殺しているかのように。

「安佳里さんにだけ言います。実はですね、こないだの生放送でこいつはウソを言ってます」

「えっ？ウソ??」

「はい。こいつは自分がリリアをフツたと言いましたが、事実全くその逆です」

「・・・」

「チビリおはんつは彼女にボロキレかボロカスのように捨てられたんですよ」

「!?!?!」

(続く)

36話 確かめなきや

ケータイでのやり取りが続いていた。

「ちよつとそれってどういうこと？じゃあなんでリュウヤはあんなこと言ったの？」

私はボタモチーという謎の芸人に問いかける。

「僕もこいつの真意がわからんです。ジョークのつもりで言ったとしか…」

「ええっ？そんなことジョークで言うことじゃないでしょう？」

この一瞬で、この芸人はバカじゃないの！と思った私。

あの場面をジョークと受け取るなんて、頭がマヒしてる！

まあそんなノータリン芸人だから売れてないのかもしれないけど。

「す、すいません。僕の言い方が間違っていました。ジョークじゃないですよね（ - ； - ）」

と、私のテレパシーが通じたのか知らないけど、すぐに訂正したボタモチー。

でも彼の声は明らかに動揺しているよう。

カチンと来ていた私は、そんな彼に強い言い方をしてしまう。

「あなたも芸人さんなら、今後のためにも軽はずみなことは言わない方がいいと思いますよ」

「はい…気を付けます」

ケータイの向こう側でも恐縮しているのがわかる。

少し脱線したので私はすぐに話を元に戻した。

「リュウヤは誰にも相談せずにあんなこと言ったの？」

「ええ、たぶん。マネージャーにも相談してなかったようで…それに。。」

「ん？それに？」

「ええ。それに司会者の誘導尋問もウマかったから、予定外のこと
もしゃべってしまったって言っていましたよ」

「ちよつと何でそれをもつと早く言わないのよー!!」

「すんません。忘れてました^^;」

やっぱりこの売れない芸人はノータリンだ。

「ねえ、あなたとリュウヤは今どこにいるの？」

「今はこいつのアパートなんです。酔い潰れてるから叩いても起き
る気配がありません（――;）」

「リュウヤに事情を聞いてみたい気もするけど…」

「是非そうしてもらえないですか？」

「うーん。。。」

「あんなこと言っちゃあバッシングが自分に集中するに決まっ
てます。ちよつと考えればわかりそうなもんなのに…」

私は心の中で『お前もな!』と反復していた。

今思うに、もうひとつハッキリしないことがある。

それはリュウヤが酔い潰れている理由。

世間のバッシングに怯えてのことなのか？それともリアと別れ
が原因なのか？

そのことをこの冴えない芸人に聞いてみると、これまた不思議な
答えが返って来た。

「いえいえ、そういうわけでもないんです。こいつは後悔はしてな
いって言ってましたから」

「ええっ？後悔してない？」

「はい。逆に『これで良かったんだ』ってブツブツ繰り返し言いな
がら飲んだくれてましたもん」

益々謎を呼ぶリュウヤの言動。

推理ドラマではないけれど、まさにそんな感じ。

でも、私は深く推理しないことにした。前と同じことになるから。こんなことで推理を楽しんでるように思われたくないし、今は本当にリュウヤが心配だから。

なら私はどうしたらいいのか？

答えはすぐに出た。行動あるのみ！

行こう！リュウヤの元へ。今すぐに！とにかく確かめなきゃ。

「ボタモチーさん、そのアパートの場所教えて」

（続く）

37話 彼のアパートにて

アパートのドアを中から開けてくれたのは巨体なデブ。

体の横幅がハンパじゃなくて、この狭い扉からどうやって中に入っただろうと思うほど。

「安佳里さん…ですね？電話でお話させてもらったボタモチーです」

言われなくてもすぐにわかったけど、これほどの力士体型だとは予想外。

どう見ても芸人には向いてなさそう。

デブキヤラレントなら他にも結構いるし、お客さんがドン引きしちゃいそう。

むしろ相撲界の方がピッタリ。てか似合い過ぎ。

「リュウヤは？まだ寝てるの？」

私はこの関取に問いかける。

「ええ、奥にいます。どうぞ中へ」

そのまま黙って後ろからついて行く私。

デブの後頭部から首にかけてのタプタプなお肉が横しわになって、2段の力ガミ餅に見えた。

もちろんそんなこと、本人には言わないけど。

玄関から茶の間まで、狭い廊下が2メートルほどあり、この巨漢芸人は体を横にしての力二歩き。

前向きに歩くと廊下を進むことができない。

とは言っても、横向きになったところでお腹が壁につかえている。そんなとき、彼はおもむろに息を吸い込んでお腹を数センチ凹ま

せながら奥へ進んだ。

可笑しすぎてちよつと吹き出しそうになった私。
下手なコントを観てるよりずっと面白いかもしれない。

——いけない。こんなときに笑ってちゃ^^；

すぐに気を取り直していよいよリュウヤと対面へ。

と言っても、彼は床に寝転がって爆睡中だった。

テーブルの上には、空になった焼酎の1升びんや、飲み干した缶ビールなどが散乱している。

窓も閉め切った陽あたりの悪い部屋の中。アルコールの匂いになり充滿している。

いくらお酒好きな私でも「うつ」となるほど鼻につく。

「起こしてもいいのかな？私」

私に背を向けて寝ているリュウヤ。

ぐっすり寝入ってる彼を起こすのも何となく気の毒。

私は彼の肩をゆするのをためらった。

「平気ですよ。安佳里さんならきっと大丈夫です」

デブにそう言われても“きっと大丈夫”の根拠がわからない。

その時だった。リュウヤが寝返りを打ってこちらに向き直って薄目を開けた。

ちよつとその顔の正面にしゃがんでいた私。

でも目と目が合ったわけじゃない。うつろな目のリュウヤがボソツとつぶやいた。

「パンチラ…」

「Σ（ノ。。）ノハウッ！」

タイトミニでしゃがんでいた私。

リュウヤの言葉に驚いて、後ろに尻もちをついてしまった。
パンチラどころか、開脚パンモロ状態。

そしてなぜかその瞬間、我に返ったリュウヤ。

「あ、安佳里っ！」

リュウヤが飛び起きて叫んだ。

「えっ？…ええ？これって夢？」

「違うよ。一応」

体制を整えてとりあえず正座になった私。

「ここ俺んちだよな？何でお前がここにいの？」

「私が来たからよ」

「？？？何でここがわかった？」

私は隣の巨体をチラ見して言った。

「この“ブタモッチー”さんに教えてもらったの」

この言葉には即座に反応した本人。

「あのー、確かによく言われますけど僕、^{ボタ}ブタモッチーではなくて、
母^{ボタ}田モッチーですが（＾ー＾；）」

「ハッ（。〇。；）」

「安佳里、わざと言った？」と、リュウヤ。

「違う違う。ごめんなさい。わざとじゃなかったの。本当に間違え
ちゃったの＾＾；」

見た目のインパクトで、つい言ってしまった言葉。

だって豚にしか見えないんだもの。それかチャーシューの塊。

でも私も大人。失礼な発言はきちんと謝った。

「ホントごめんなさい。もう絶対言わないから。じゃあボタさんて
呼んでいい？」

「あのー、省略して呼んでくれるなら、モッチーの方が…（ー；」

」

「わかったわ。じゃあそうする。モツチーね」

今日はホント不思議な日。やること見ることみんなコントみたいだわ。

少し正氣に戻ったリュウヤがモツチーに小言を言った。

「何でここに呼ぶんだよこのバカ！安佳里に迷惑だろ！」

「…わりの。でももう呼んじやったから。アハハ（^□^；A」

私はリュウヤに言った。

「違うよ。そんなことない。迷惑なんかじゃない。私が来たいって思っただもん」

「ウソつけ！無理すんなよ」

「無理なんてしてない」

一呼吸おいてからリュウヤが言った。

「お前、ひよつとしてテレビ観てたのか？」

「うん…観てたよ」

「そっか。じゃあ尚更だ。俺があんなこと…テレビであんなこと言っちまったから来たんだろ？」

「それもあるけど…」

「あんなこと気にすんな。ウツカリ言っただけだ」

リュウヤは再び座り直して頭をかいだ。

私は彼の意味不明な発言を問いただしてみる。

「わかんないよ。ウツカリって、どの事に対して？横瀬リリアをフツたこと？」

「…いいや。そうじゃない」

リュウヤの口調がやや重苦しくなったように感じた。

私は彼の次の言葉を待った。

「安佳里のことが…忘れられないって言ったことさ」

「??それがうつかり?」

思わぬ言葉にキョトンとしてしまった私。

「...ああ、あれは...ウソだし」

(続く)

38話 やるせないウソ

私には合点^{がてん}がいかなかった。
ウソって何？どうゆうこと？一体ウソがいくつあるの？

モッチーとケータイで話したときに聴いたリュウヤのウソ。
つまり、フツたのはリュウヤじゃなくて、リリア側だということ。
それだけでも不思議だったのに、今度は私に対してこのウソ。
リュウヤがテレビで言ったことはどこまで本当のことなんだろう？
それとも全てウソ？いえ、決してそんなことはないはず。絶対そ
うは思えない。

「リュウヤ、意味わかんないよ。何でテレビでそんなウソ言う必要
があつたの？」

「そりゃ…アレだ。ほら、決まってるじゃないか」

そう言いながらもちゃんとした理由をすぐに言えないリュウヤ。

“アレ”とか“ほら”でごまかしながら、次の言葉を考えているの
がよくわかる。

「教えて。わかんない」

少し強い口調で再度聞いてみる私。

焦り気味のリュウヤがドモリながら答える。

「リ…リリアと…別れ…早く別れたかった…からさ」

そんな自信のないしゃべりで言われても、説得力には全く欠けて
いる。

彼を見つめながら沈黙している私に、再びリュウヤが弁解する。

「だから、リリアと別れるにはさ、他に好きな女がいるって言った
方が確実だろ」

リュウヤは私と目を合わさなくなり、なぜかとつくに飲んで空にな
っている缶ビールを握りしめていた。

「じゃあ何で私に未練があるようなこと言ったの？ウソつくなら架空の人でもいいじゃない」

「それは…あのアナウンサーのせいだ」

「なんで？」

「…あのアナウンサーは憶えていたんだ。ずっと前のトーク番組で俺がしゃべったことを」

「それはつまり…」

「…俺が安佳里と別れてからも、ずっとお前に片思いでいたことをさ」

「………」

「だから…だからつい、釣られて…話の流れでそう言っちゃったんだ」

確かにこれでウソの釈明にはなったのかもしれない。

でもまだ腑に落ちないところがある。

「ねえリュウヤ、それなら何でこんなに荒れてるの？言うだけ言っただんならスッキリするはずじゃない？」

「………」

「そりゃ、お笑いを引退したショックは大きいと思うわ。でもあなたの方から彼女を捨てたんなら、こんなに凹むことないじゃない」

「………」

「リュウヤは何に後悔してるの？」

「…別に後悔なんかしてない」

リュウヤは芸はうまくても芝居は下手。明らかに言葉と態度が逆。「ねえ、怒らないで聞いて。今のリュウヤは後悔だらけのような気がする」

「だから違うつて」

「あなたは私と同じ」

「…同じ？」

「ええ。あなたは問題を全て自分で抱え込む。人に言えない。いつも一人で苦しんでる。昔からずっと。だから私と同じ」

「もういいから帰ってくれ！」

リュウヤが私に背を向けた。首はうなだれたまま、握った空の缶ビールを壁にぶつけた。

「わかった。ごめんね。またズケズケもの言っちゃって。私、帰るね……」

「…ああ」

「それから…あまり飲み過ぎないでね」
「……………」

私は彼のアパートを跡にした。

今日、一番知りたかったことは、最後に私が聞いたこと。

“なぜそんなに荒れてるのか？”とうこと。本当はそれが知りたくてここに来た私。

でも思った通り、その本当の理由は彼の口からは聞けなかった。

私はリュウヤの性格をよく知っている。

『私には何でも話していいんだよ』と言ったところで『そうか、じゃあ言おう』という人ではない。

それは私も同じだから気持ちがよくわかる。だからあえて深くは聞かなかった。

ここからは感情の問題。メンタルな問題。

そしてその解決の糸口は、この私にあると直感的に思った。

「安佳里さん！ちょっと待って下さいーい」

背後から走ってるつもりのモチーが私を追って来た。どう見ても競歩にしか見えないけど。

「安佳里さん…ハアハア…ハアハア」

すでに汗だくで息切れのモッチー。

「ちよつと痩せた方がいいよ。死んじゃうよ」

「すいません…ハアハア…食欲には…勝てなくて…」

「で、なに？息が落ち着いてからでいいけど」

「は、はい…」

両手を膝に当てて、前かがみになっていたモッチー。

待つこと2分ほどでなんとか平常通りの呼吸に戻ったよう。

「安佳里さん、あいつはあなたにウソを言ってます」

「…そう」

「僕がケータイで言ったことの方が真実です。あいつを捨てたのはリリアの方です」

「その理由は？何か知ってるの？」

「リリアはあいつが芸人として絶頂期の人に付き合うフリをして、自分の名前を世間に宣伝したんです。そしてあいつに宝石だのブランドだのって大金を使わせました」

「そうなんだ…」

「ええ。そしてあいつの人氣が下降気味になると、もう会いたくないと一方的に連絡を断ち切ったんです」

モッチーの発言はウソには思えないけど、どうしても疑問が沸いてくる。

「じゃあ聞くけど、そんなリリアにリュウヤは恨みを持ってもいいはずよ。なのになぜ自分が世間からバッシングを受けるようなことを言ったの？」

「そこなんですよ。僕も最初はいいつのプライドなのかと思いました。女にフラれる屈辱が嫌であんなことを言ったんだと」

「リュウヤはそんな人間じゃないと思うけど」

「はい。全然違います。僕が間違っていました。それがさっきやっとわかったんです」

「さつき？」

「ええ。安佳里さんと話しているあいつの様子を見ていてわかりました」

「私とリュウヤの会話で？」

「会話というよりも態度ですよ」

「・・・」

「こんなところで立ち話もなんですから、場所を変えましょう。すぐそばに公園があるので、そこでどうですか？」

私は一つ返事でOKした。

「わかったわ」

（続く）

39話 天然お人よし

じわじわと胸に込み上げてくる熱いものがあつた。

私は今ベッドの上。私の定番とも言える場所。眠いわけじゃないけれど、思いにふけるにはベッドが一番。

これは子供の頃から変わらない。

横向きになったまま、目は閉じないでいるけれど、向ける視線はどこでもない。

こんなときの私の目に映ってる光景は、いつもリアルタイムのものではなくて、過去のシーンをリピートしている。

モッチーと公園で話したこと。

それはモッチーがリュウヤに対して感じたことであり、確信したこと。

長いベンチの真ん中に私が座ると、モッチーはすぐ隣りには座らずに、ベンチの端に腰かけた。

気配りなのか、シャイなのか、そんな一面のある人。デブだけど決して悪い人ではなさそう。

「安佳里さんも見たでしょう。あいつの不自然な態度」

モッチーは隣の私を見ずに、遠くの正面を見たまま私に話かけた。

「ええ…確かに不自然だったかも」

「真実を言ってる人間はもつと堂々としてるもんです」

「でも、寝起きだったし、酔いも覚めていなかったからかもしれないわ」

「そりゃそうかもしれませんが…安佳里さんは本当にそう思いますか？」

ちよつとためらって答えた私。

「……いいえ」

「でしょう？あいつは芸がうまくても、芝居は下手です。あの言動は明らかにウソです」

「だとしたら、その理由は何だと思っの？」

この質問を投げかけると、モッチーは私の方へ振り向いた。

「あいつは安佳里さんのことが本当に好きなんですよ。昔からずっと。今もその気持ちは変わらないままなんです」

「……」

「あいつはさっきこう言っていましたよね。アナウンサーの誘導に流されてウソをついたって」

「そうね……」

「でも、それこそウソなんです。真実は、誘導に流されて本当のことを言っただけです」

私はしばし頭の中を整理した。

「えっと……ちよつと待って。じゃあリュウヤが、横瀬リリアを捨てたって発言したのも、流れでしゃべってしまったってこと？」

「それは違います。そのウソはおそらく最初から言う予定だったと思います」

「ん……ちよつとわかんなくなってきたんだけど」

「つまりですね。あいつが誘導されてウツカリしゃべってしまった事ってのは、安佳里さんを思い続けていたという事実のみです」

「それがウツカリ？」

「ええ。あいつはリリアを捨てたというウソの理由に、そこまで素直に言う気はなかったと思います」

「ん……」

「だってそうでしょう？単に『好きな人が別にできた』って言えば済むことなんですから」

「そう……なのかな……」

「僕はそう確信しました」

「でもなぜリュウヤは自分の方から彼女と別れた事を言ったのかわからないわ」

「まあひとつは、司会者に質問されたつてのもあるでしょうけど、たとえ質問されなかったとしても、自分から答えは言ったと思いますね」

「そこがわからないの。なぜ自分に非難が集中するようなことを言う必要があったの？」

「その点ならこう言えます。あいつはバカがつくほど、お人好しだからです」

キョトンとした私。

「え??ごめんなさい。私ちよつと意味分かんないんだけど…」
モッチーが顔の方向を再び正面に向き直した。

「そもそも横瀬リリアってタレントは、力のある大手の事務所に所属してましてね、その中でも特に清純派で売ってるんですよ」

「今どき清純派ねえ…」

「会社も彼女に力を入れてます。そんな彼女が付き合ってる男を利用して捨てたということが公になればどうなると思います?」

「ああ…なるほどね。彼女のイメージが総崩れになるってことね。会社にとっても不利よね」

「その通り!」

そんなことを聞いても私は全く腑に落ちなかった。

だからってリュウヤが…リュウヤが……ハッ(。○。;)」

「気づきました?さつきも言ったように、あいつは本当にお人好しです。人に気を遣い過ぎます」

「もしかして、リュウヤはリリアのイメージを守ってやったってわけ?」

「そういうことです」

「いいだけ利用されて捨てられたのに?」

「そう。捨てられたのにも関わらずです」

「そんなのって…自分がバカを見るだけじゃない。天然のお人好し

だわ」

「残念ながら…^^;」

「そこまでして何でリュウヤが悪い人にならなきゃなんないのよ」

私は高ぶる感情を抑え、モッチーを見据えながら話していた。

それとは逆に彼は私と目も合わさずに正面を見ている。

たまに通る散歩のお年寄りたちが、不思議な目で私達を見ていた。

「確かにあいつは天然です。でも…よくよく考えてみるとですね。それにもまだ他に理由があると僕は思いました」

「まだ他の理由…？一体どんな？そんなこといつわかったの？」

「今です（^^;）」

「（ノ——）ノコケツ！今？なんで？」

「それがですね。あいつの性格を想像しながら、安佳里さんと話しているうちに、なぜかわかって来たような気がするんです」

「モッチーさんて、リュウヤのこと、随分詳しく知ってるのね」

「ええ。まあ…親友ですから。僕がこんな売れない芸人でも、いつも気にかけてくれる奴なんです」

「そう…」

「僕はあいつに結構相談にのってもらってるんですよ。逆にあいつは僕にはあまり言わないですけど、長年ああいう性格を見て来てるし、わかりますよ」

「それでもすごいわ。感心しちゃう」

少し照れた様子のモッチー。でもすぐに話しは本題に戻した。

「で、その理由の事なんです…極めて単純だと思うんです」

「単純なの？」

「たぶん。複雑な心理分析とか、そういうんじゃないで、原点に戻って考えるとわかりましたよ」

「それって…もしかして私のこと？」

「そうです。つまり、あいつはとにかく安佳里さんのことがずーっと好きで、忘れられなかったってこと。その一点です」

「ウソ発言のもうひとつの理由がそれ？よくわかんないけど…」

「繰り返すようだけど、とにかくあいつは安佳里さんがずっと昔から好きだった。その継続していた気持ちの中で、横瀬リリアと付き合い始めた」

「・・・」

「わかりますか？あいつには後ろめたさがあつたんです。安佳里さんに秘めた思いをしまい込んだまま、リリアと交際した」

「リュウヤ…」

「あいつはそんな自分が許せなかったんです。二股を賭けていた自分に非があると思った。だから自分は世間からバッシングされても当然だと思った。そしてついには、自分が悪者になる決意を決めたんだと思います」

私は言葉を失っていた。

それがどれくらいなのか、一体何分間呆然としていたのか、帰宅してから記憶にない。

（続く）

40話 私にできること

ベッドに横たわっていても、私の手の届く範囲にはいつもティッシュの箱が置いてある。

おもむろに手を伸ばして、つまんだティッシュで鼻をかんだ。別に鼻風邪なんてひいてない。

じわじわと込み上げる思いがそうしている。

目から出ている液体はそのまま放置。横向きに寝ているから枕が濡れていた。

モッチーの言うことが本当なら……いや、たぶん絶対本当。

こんな勘の鈍い私が言うのも変だけど、なぜかモッチーを信用することができた。

今日会うまで見ず知らずの人の言葉を信賴するなんて、今までの私にはなかった。

これが自分でもびっくりするほど不思議。特に男という生き物に対しては、疑念から抱いて来た私。

そんな私が、超肥満で売れない芸人・ブタモッチーの言葉が絶対に正しいと根拠もなく確信している。

もしかして、これが女の直感というものなんだろうか？

恥ずかしながら、私は女でありながら、そんな直感が働くなんて経験、悲しいことに一度もない。

でも今は感じる。目で見て、耳で聴いて、肌で感じて確信した気がする。

それはなぜかと聞かれても、私には答えることができないけれど。

ブタモッチーって一体何者？

ふと、また違った疑問も浮かんできた。

あまりにもすごい彼の観察力や洞察力。
とても見た目からは想像できるものじゃない。

——あ……いけない。また私の悪いクセ。見た目で人の第1印象を決めつけるクセ。

きつとモッチーは超肥満とは言え、リュウヤ以上に繊細な心の持ち主なのかもしれない。

だからこそ、リュウヤの隠れた奥底の気持ちまでも、理解してあげられるんだ。

そんな親友がいるリュウヤがうらやましい。いつからなんだろう？ 私にも、さゆみというたった一人の親友がいるけれど、彼女の言葉が強すぎて心に刺さるときもしばしば。

本音でしゃべってくれるのはありがたいことだけど、私の精神上、時と場合によっては凹んでしまう。

一体、ボタモッチーはなぜお笑いなんかしてるんだろう？
カウンセラーとか、もつと人の役に立つことができそうなのに。

こうして話しが横道にそれるのも私の悪いところ。

人のことより自分のこと。私が今後どうするかが大事なところ。

リュウヤには追い返されたけれど、絶対このままにはしておけない。

酔い潰れていたリュウヤ。毎日あんなんじゃない、彼の人生も潰れそう。

私の今までの人生もろくなもんじゃないけれど、長年、私のことを思い続けてくれた彼の人生まで壊してほしくない。

私がリュウヤにできること。

それは決して同情ではなく、愛情を込めて彼に接すること。

そして彼にきちんと謝ること。

ほとほと意地っぱりだった私をもっと素直になること。

意地っぱりなのはリユウヤも同じ。だから彼は酔い潰れた自分を私に見られて、すねてしまったに違いないもの。

私は自分に誓った。

もう同じ失敗は繰り返さない！

会うタイミングを間違えたりしない！

セフレと遊びまくってメチャクチャな私だったけれど…

本当の相思相愛が叶う相手はリユウヤしかない。

世間からバッシングされ、辛い立場のリユウヤ。

それを救ってあげられるのは私。

自惚れかもしれないけど、彼を守ってあげることが、今の私の使命。

行こう！もう一度、彼の元へ！

私は決意した。次の休みまでは遠すぎる。

明日にでもすぐに、私の仕事が終わったら直接リユウヤの家に行こう。

彼がいなかったら、いる日まで毎日でも通い続けよう。

それくらいの努力は私のせめてもの償い。これが償いと言えるかどうかわからないけど。

気持ちに整理がつくと、なぜだか元気になれるもの。

テーブルの上のチョコパイに手を伸ばした私。

それを頬張りながら部屋のテレビを何気につける。

「あ！」

私は思わず声をあげた。

今は日曜の午後10時13分。

テレビでは、「トークバラエティ」おしゃれ気分”のレギュラー放送の真っ最中。

そして、その中には噂の渦中の女性がひとり。

そう、悲劇のヒロイン・横瀬リリアが出演していた。

（続く）

41話 女に嫌われる女

「いい勉強になりました。これが私にとって、乗り越えなきゃならない試練だったと思います」

画面の中の横瀬リリアが、うるうるした目でしゃべっている。

途中からテレビをつけた私だけど、たぶんリュウヤとの別れについて話していたに違いない。

でも私には、涙を浮かべてる彼女を観ても、同情する気には全然なれない。

モッチーの話を信じている私には、むしろ、しれゝつとした目で観ているだけ。

確かにリリア側の言い分も聞くのが本当だけれど、画面の彼女を観ていると、全てがウソ臭く感じてしまう。

これって私だけ？私の偏見のせい？先入観が強すぎるから？

いや、絶対これはお芝居に見える。

同情どころか、よくもまあこれだけの演技ができるものだと驚くばかり。

それプラス、腹立たしさも加わって、私は手に持っていたチョコパイを一気に口に押し込めた。

怒りの矛先がこのおやつとは、なんか自分も情けなくて、また別な意味の苛立ちもある。

そんな中、リリアは更にこんな言葉をぬけぬけと語る。

「私のファンや、このテレビを観ているみなさんに言いたいのは、チビリおぱんつさんを責めないでほしいんです」

「優しいんですね。リリアさんは」

——司会者も彼女の味方なんだ。

「彼には元々私より好きな人がいただけの話。それをテレビで言ったのは、自分に正直になれたってことです」

「まあ確かにそうですね……」

「もし、ウソをつかれたまま彼と付き合い続けていたら、私は今よりもっと傷ついたでしょう。これは彼の私に対する思いやりなんです」

「思いやり……ですかね？言葉が悪いかもしれませんが、あなたは彼に捨てられたんですよ？」

「ええ。でも……私は彼に対して恨みも悔しさもありません。ホントになにも。」

と言いながら、リリアは大粒の涙を流した。

——つまい。。すごい演技。アカデミーの新人賞並みだわ。

もはや奇立ちを通り越して、感心してしまった私。

これでリリアへの同情票はうなぎのぼり。好感度UPも間違いないし。

表の顔は童顔でフェミニンな清纯派モデル。

でも実際はかなり知的な策略家であり、レベルの高い演技派。

凡人の私には同じことなんてできないし、なすすべもない。

いつかりリアの化けの皮を引っ剥がしてやりたいと思って無理な話。

憎しみ——それは人間として醜いことだけど、今の私は彼女に對してその感情しかなかった。

翌朝の通勤電車の中。

男子学生のバカ数人が、さっそくその話題を持ち出していた。

「昨日おしゃれ気分観たか？リリアって、めちやくちゃ可愛いよなあ」

「おう、観た観た。リリア、いいよなあ。年上でも彼女にしてえよ」

「だよなあ。それにしてもリリアを泣かせたあのパンツ野郎、ボコボコにしてやりてえな」

「全くだ。落ち目芸人のくせに、身の程知らずもいいとこだ」

やっぱりこいつら男どもは、見事に彼女の術中にハマっている。

あの茶番なお芝居を見破る有能な男子なんて、いやしない。

そんな男子を求めても所詮それは無理な話。みんな彼女のとりこなんだから。

「でもよ、パンツ野郎が言ってた“忘れられない女”なんてよお、リリアより可愛いんかな？」

「んなわけねえじゃん。あれ以上の美人どこにいんだよ。どうせブサイクに決まってるじゃん」

ちよつとカチンと来た私。

「その女もパンツかぶってたりしてイヒヒヒヒーッ（ ）ノ
ッ ばんばん！！」

「がハハハハハ（ ）ノッッ ばんばん」

——て、てめえらあ…ぶっ殺しちやろかあ（、へ、＃）

とハラワタの煮えくりかえっていた私。自分の顔が火照って来るのがわかる。

——いけない。ここは冷静にならなきゃ…

なんと言ってもこいつらはまだ思春期の男子。言葉を真に受けて

はダメ。

好き勝手に話すまだ青二才の男子。やがて彼らの話は男の本能的な話題へと変わっていった。

「しかしよお、あのパンツ野郎うらやましすぎるぜ。別れるまで一体リリアと何回ヤツてたんだろう？」

——下ネタがよっ！全くこのクソガキどもは…（――）

「俺には想像できんな。ヤツてないんじゃないの？」

「バカ！付き合うつてことは、やりまくるのが当然だろが！」

「でもよお…チクショウ！そんなこと想像したくねえ！」

「だったらすんなよ。凹むわマジで俺も」

こんな低レベルな会話を人前で平気に話す男子に聴き耳を立てている私も私。

iPodでも聴いていれば良かった。

それにしても世の男たちをここまで自分の味方につける横瀬リリアはやっぱりすごい。

私はモッチーから事情を聴いてるからだけど、もしそうでなかったら、ひよっとしてこの学生たちと同じ意見だったかもしれない。

そう思うと、少し怖くなってきた。そして、それと同時に余計な迷いも生じてくる。

それは決して私が思っではいけないこと。惑わされてはいけないことなのに…

——もし、モッチーの言うことが違ったとしたら？

リリアの言葉が本当だとしたら？あれが演技じゃなかったとしたら？

モッチーもリュウヤも信じているのに、そしてリリアに対してもムカついているにも関わらず、こんなことが頭によぎってしまう私。今日の仕事帰りにはリュウヤの家へ行く予定。

そのとき、リュウヤの口から直接聞けばハッキリするはず。

そうよ。それでいいじゃない。今迷うことなんてない。

もう私は迷っちゃいけないんだ！

（続く）

42話 あの頃のように

6世帯が入居している2階建てのボロアパート。

壁の色も薄汚れたドスグレー。

震度2の地震でも全壊してしまいそう。

そんなアパート1階の右端の部屋で、一人暮らしをしているリュウヤ。

なぜもつとマシなマンションにでも引っ越さないんだろう？

去年、ギャグがブレイクして結構稼いでるはずなのに。

と、余計なお世話的なことを考えながら、玄関のチャイムを鳴らす私。

部屋の奥から足音が近づいて来るのがわかった。

今日は私の意思をちゃんと伝えなければならない。一瞬にして私に緊張が走る。

玄関のドアの前で足音がピタリと止まり、10秒くらいの静かな間。

おそらくリュウヤは覗き穴から私を見ているんだろうと思った。衝動的に、その穴に向かってピースをしそうになった私。

でもそれはあまりに不自然なことに気づいて、思いとどまった。

——もつと落ち着かなきゃ…自分をごまかしちゃダメ。

やがてドアが静かに開いた。

「安佳里……どうした？」

良かった。今日のリュウヤは酔ってない。これから飲むつもりなのかは知らないけど。

「うん。リュウヤときちんと話したいと思って。こないだはごめenne。突然押し掛けて」

なんとかスムーズに言えた。

「いいよ別に。今日もアポなしじゃん」

「…まあそうなんだけど。。。」

会話が途切れて数秒間の沈黙。

でも再び話し始めたのはリュウヤから。

「とりあえず上げれよ。何もないけど水ならある」

「うん^^;」

私はリュウヤの後ろについて中に入る。

先を歩く彼が、こちらを振り向かず私に言った。

「昨日は俺も悪かった。あんな酔っぱらった姿見せちまって…みっともねえったらありやしない」

小声でボソツと自分自身にも言い聞かすような物静かな言い方。

昔から変わらないリュウヤの言い回し。

こんな場面で不思議と懐かしさを感じた私。

今日は本音で話せる気がした。

昨日まで飲み散らかってたビールの空き缶はすでに片付けられていた。

私はテーブルの下に敷かれた座布団に案内されて腰を落ち着ける。

その後リュウヤは本当に、グラスに注いだ水を私に持ってきた。

「ありがとう。ちなみにビールは？」

と聞いてみる。

「全部飲んだ」

「そう^^;」

「飲みたかった？」

「ううん。聞いてみただけ」

「買って来るよ？」

「違うよ。ホントに聞いただけなの」

「遠慮すんなよ」

「してないってば。今日はリュウヤと話したかったの。私、酔ったら寝ちゃうもん」

「…そっか。じゃあゆっくり話そうか」

「うん」

不思議なくらいに、とても大人しくて優しい口調のリュウヤになっていた。

彼は私を斜め横から見る位置に、ドカッと座る。

私も最初から足を崩していて、正座なんてしていない。

不意に、二人とも地ベタリアンだったことを思い出した。

かつて付き合っていた高校時代。リュウヤの影響で、私はどこでも構わず座れる人になった。

当時はそんな中で、いつも二人でたわいのない会話をしていた。

今はアパートの中だけけど、まさに当時のそんなムードになりつつあるような気がする。

でもそれは、あくまで私が勝手に思ってるだけで、今のリュウヤがどう感じてるのはまだ不明。

私の方がまだ、精神が幼いのかもれない。いえ、きっとそう。もうあれから7年も経とうとしてる大人なのに。

いつまでも沈黙は良くない。私の方から話しに来たんだから、しっかり伝えなければならぬ。

お水をひと口いただいて、私は今の思いをストレートに言う決意をした。

遠まわしにまわりくどく言っただって、リュウヤに苛立ちを起こさせるだけなもの。

「リュウヤ…私、今までのこと全部謝る」

リュウヤがキョトンとした。

「え？なに？今までのことって？」

「私の態度全て。あなたと6年ぶりに再会したときからの私全て。いえ…高校時代に別れたときの私から全て」

「な……」

ダメな私。まだストレートに言えてない。心を言葉にすればいいだけなのにそれができない。

——先に好きだって言えばいいじゃない。それから謝ればいいのよ。

そう自分に言い聞かせて、今度こそ素直に話そうと思った矢先、
「俺の方こそ謝らないと。安佳里に随分気を遣わせちゃったよな。ごめん」

私が躊躇しているうちに、リュウヤから先にしゃべらせてしまった。

「芸能リポーターに付きまとわれてないか？」

「全然^^;」

「そっか…もう俺も落ち目だしな。リポーターにも見放されたか。」

「

「……」

「俺のことはもう気にしなくていいから、安佳里は自分にあった彼氏を見つけて幸せになってくれ」

いけない。これじゃリュウヤペース。何のために私がここに来たのかわからない。

「リュウヤあのね…」

——ピンポン

と、そのとき玄関にチャイムの音。思わずため息の私。

「ブタかな？」

リュウヤが言うブタとは親友の芸人仲間“ボタモッチー”さんのことだとすぐにわかった。

「わりの。カギかけてるから、ちょっと見てくる」

その約10秒後、血相を変えて戻ってきたリュウヤ。

まさしく予想外のこと起きたことに間違いない。

「安佳里！！…ちょっとその…とにかく隠れてくれっ！」

あたふたと慌てふためくリュウヤ。

「なに？どうしたの？」

リュウヤは私に目をそむけながら言った。

「のぞき穴の外に…リリアがいる。。」

「（□、；）えええええ〜？」

（続く）

43話 隠れた場所から

「シート！聞こえる聞こえる！」

リュウヤがかなり焦りながら私の腕を引いて立ち上がらせた。

「居留守つかえばいいじゃない？」

「もう無理だ。ちよつと待っててくれと言っちゃまった（ - ；」

「バカ（ - - - ）」

「あ！そうだ。安佳里の靴が玄関に…」

「ダメじゃん^^；」

リュウヤはドタドタとした足音も立てずに、流れるようなスリ足で一目散に玄関へ。

まるで祖先が忍びだったような小刻みな足の運び。

再び戻った彼の手には私のローファーが握られていた。

「うまいだろ。俺の先祖、伊賀者だったらいいんだ」

「やっぱり…^^；」

「安佳里、ベランダに出て！狭いけどちよつとの間我慢してくれ」

「クローゼットとかないの？」

「ねえよそんなの。さ、早く早く」

背中を押されながらベランダへと追いやられる私。

「待たせた理由をどう言わけするつもり？」

「今、素っ裸だから服着るまで待っててくれと言ってある」

「急によくそんなこと思いついたわね」

「まあな。じゃあ悪いけどこの靴持ってベランダのわきの方へ行ってくれ」

「わき？」

「カーテンはするけど、シルエットが映るかもしれんし」

「なんか怖い…」

まさかここに来て隠れるなんて思ってた。思ってた。

言い知れぬドキドキ感が私を襲う。

「ごめんな。じゃあ」

リュウヤはそう言い残して、私が外に出るなりベランダもカーテンも素早く閉められた。

古いアパートにしてはベランダがあるなんて珍しい。

とは言っても、人ひとりがギリギリ立っていられる幅。

しかも柵の高さは私の腰よりやや低く、体のバランスを崩すと外に落ちてしまいそう。

そもそもこのベランダは、人が出て外の風景なんかを眺めるためのものじゃなく、きつと鉢植え置場が洗濯物干場なんだ。

とにもかくにも、ここが2階じゃなくて良かったと思うばかりの私。

リュウヤの指示通り、ベランダの外枠の端に身を置いた私。

通行人に見られはしないかと、また別な理由でハラハラドキドキ。恥ずかしさも加わって、どうしよう、どうしようと迷いながら何気に見た隣のベランダ。

——男っ！

目と目が合ってしまった。

そこには髪の毛モシヤモシヤ頭の男が、パンツ一丁姿でこちらを見ている。

しかも別なパンツを両手に広げながら固まっている。なぜ？

——へ、変態だっ！

私の表情を読み取ったのか、ストップモーションの魔法が解けた

モシヤモシヤ頭が口を開いた。

「あの…俺、変態じゃないッスから。洗濯物取り込んでただけッス」
なるほど。そう言われてみればそうだ。

隣のベランダの上方には、洗濯ロープが長くかけており、衣類の数々が干されている。

パンツを両手に持っていた理由がようやくわかった。

とりあえず、男の言い訳は正しそうだったので、軽く苦笑いの会釈をする私。

考えてみれば、こんな狭いベランダに突っ立っている私だって、隣からしてみれば怪しい女。人のことは言えない。

これ以上、この男と会話する気もさらさらないし、関わりたくもないので、180度そっぽを向いた。

そんな矢先、わずかに開いた戸の隙間から、声が漏れ聞こえてきた。

明らかに女の声。それは紛れもなく、横瀬リリアその人の声であるのに間違いなかった。

私はその場にしゃがみ込み、開いた戸の隙間に聴き耳を傾ける。盗聴は悪いことだとは知っているけど、聴かずにはいられなかった。

リリアの第一声。それは清純派であり、おしとやかキャラとして人気の彼女とはかけ離れた言動だった。

「アタシに赤っ恥かせて、あんたナニサマのつもり？」

（続く）

44話 リリア登場

「いや…俺的にはこの方が良いと思って…」

リュウヤの明らかに困惑してるような声が聞こえて来る。

「ふざけないで！アタシ、みんなから笑い者よ。落ち目の芸人なんかに愛想尽かされて気の毒ねって」

「ええっ？そんなストレートに言われるもんなのか？」

「まわりの目をみればわかるわ。捨てられた子猫でも見るような目で私を見るもの」

自分を子猫に例えるなんて『私って子猫のように可愛いんだから！』と言ってるようなもの。

それに実際には言われてないことを、想像だけでリュウヤに怒りをぶつけるなんて被害妄想もいいところ。

徐々にムカつきレベルが増す私。

「でもさ、それってまわりが心配してくれてるからじゃないのか？とリュウヤ。でもリリアの語気は強くなるばかり。

「あんたバカじゃないの？みんな心の中ではザマアミロって言うんのよ！」

驚いた。こんなに口が悪くて気の強い一面を持つリリアなんて、当然ながら画面で見たこともない。

たまに見るモデル雑誌にも、キュートで可愛い笑顔を振り撒いている彼女。

しかも可憐という言葉がピッタリくるほど、しとやかな物静かなイメージが出来上がっていて、同姓からも憧れの人気がある。

人って見かけだけではわからないものだとかつくづく痛感した私。チラッとベランダ前の路地を見る。誰も通行人はいない。一応、

今のところははー安心。

「じゃあ、俺はどうすれば良かったんだよ？正直に『僕は横瀬リリアに捨てられました』って言えば良かったのか？」

と、リュウヤの反論。心の中でひそかに彼を応援する私。

「それも絶対ダメ！私のイメージが悪くなるでしょ！マスコミに何書かれるかわかったもんじゃないわ」

「男を手玉にとる女とか？」

「私にケンカ売ってんの？落ち目のあんに言われたくないわ」

「梅子あのだ…」

「ちよつと本名で呼ばないでっ！」

—— * m () プツ。リリアの本名は梅子なんだ。

ムカつきながらもイメージに合わないその名前に、思わず忍び笑
いした私。

外は少しずつ風が強くなって来た。小雨がベランダに差し込んで、
私の服も濡れ始める。

でも私はじつと我慢した。リュウヤがこの女を一刻も早く追いだ
してくれるようお願いながら。

「もうあんに本名で呼ばれる筋合いなんか……んっ？」

リリアの言葉が止まった。

「どうした？」

「香水のにおいがする。誰かいるの？」

私の胸の鼓動がドクンと鳴った。ヤバイ…

「誰もいねえよ。さっき部屋に消臭剤まいたから…」

—— 私の香水は消臭剤と同じ香り？（ - ；

5、6秒の沈黙、再び口を開いたのはリリアから。
「ねえ、なんでカーテン閉めてるの？」

——（。o。；）ノギク！

リリアは何かを感じ取ったらしい。

マジやばい。私は心の中でこっちにだけは来ないでと念じていた。
困ったときの神頼みなど、通用しないと知りながら。

「いつも西日がまぶしいんだ。それよりもさっきの話しだけどさ。

俺は梅子にケンカを売ってるつもりなんて全くない」

「だから梅子って呼ばないでって言ってるでしょ！」

「ごめん。つい……でもさ、結局、君は俺にどうして欲しかったんだよ？」

「黙っていれば良かったのよ！」

「そんな無茶苦茶な……あれは生放送だったんだ。あのアナウンサーの質問を交わすことなんてできなかったし……」

話しが本題に戻って、ベランダへの疑惑はなんとかおさまり、胸をなで下ろす私。

そんなとき、なぜか私に次なる試練が。

しゃがみ込んでいる私の頭の上にバサッと何かが飛んで来て覆いかぶさった。

あまりにも突然のことで、驚きの声を出す寸前だった私。
すぐさま、頭上のモノを手に取り確認する。

——Σ—11（「。；」——1パ、パンツ！！

それは男物のブリーフで、しかもまだ半乾き。

どうやらこの強風で隣のベランダから飛んで来たらしい。

「す、すみません…」

背後から例のモシャモシャ頭の男の声。まだいたなんて。

振り向きざま、無言でギロツと睨みつけると、男がビクツとしたのがわかった。

でも私はすぐに、部屋の中の会話に引き寄せられる。

「芸人なら、ちょっと笑わせて話しをはぐらかすくらいしてよね！」

「無理だよあのときは…」

「そんなんだからすぐ落ち目になるのよ。もっと言いようがあるでしょ！」

「どんな？」

「お互いが自然に合わないなって思うようになったとか、スケジュールのすれ違いで会えなくなったとか、ちょっと考えればいくらでも言えるじゃない！」

なんて女だろう。リュウヤをフツておきながら、その言い方はないんじゃないの？

ましてや、リュウヤはリリアを気遣った上でウソをついてたつていうのに。

雨に打たれている冷たさよりも、私の怒りの感情の方が沸々と煮えたぎっていた。

その後もリリアは一方的にリュウヤを責める。

「アタシのみじめな思い、あなたにはわかるはずもないでしょうね。もう一生の汚点よ」

「……」

「アタシの傷ついたプライドをどうしてくれるの？責任とってくれるの？」

「そう言われても…」

「あなたは引退すればいいだけの話だけど、アタシはまだまだ花を咲かせるの。なのに枯れて行く芸人にコケにされることがどれだけ屈辱かわかる？」

「・・・」

「せっかくアタシのおかげで世間から注目の的にさせてやったのに！恩をアダで返すってこのことね。この恥知らず！」

もう限界。とても聞いてはいられない。

私の怒りはすでにピーク。

許さない！リリアを絶対に許さない！芸能人がモデルが知らないけど、私にとっては上司でも何でもないただのゲス女。

——よし決めた！

意を決した私は毅然と立ち上がり、勢いよくベランダを開けて中へ乗り込んで行った。

（続く）

45話 怒りのコント

「黙って聞いてりゃ好き勝手なことグダグダ言いやがってゴラァ！」

男言葉だろうがなんだろうが、本当はそう言いたかった。

めちゃくちゃそう言いたかったのに……

でも言えなかった。言えなくなってしまった。

確かに勢いよく部屋には入った。でも目の前にいるのはまばゆいオーラに包まれた妖精。

悔しいけど可愛い……可愛すぎる。こんな彼女が悪態をついてるなんて信じられない。

クリツとしたまんまるのつぶらな瞳。髪はショートなはずだけど、ウェーブのかかったウィッグ&エクステ。

洋服はショートワンピで、いやらしくない程度の光沢が更に彼女の清楚なイメージを引き立たせている。

そんなリリアの強烈なインパクトにひるんだ私は言葉を失った。

一方リリアも突然の私の出現に、丸い目を更に大きく見開いて驚きを隠せないでいた。

不穏な空気。ピリッと引き締まったムード。言い知れぬ静寂。

けどその静寂は、ほんの一瞬だけで破られた。

それはリリアが放った次の一言で、私のひるんだ気持ちが一気に吹っ飛んだから。

「ば……化けものっ!!」

明らかにこの女は私を見てそう言った。なぜこの私が化け物なの？

その答えはすぐにわかった。

私の立ち位置からすぐ横にある机の上のスタンドミラー。

そこに映った自分の姿を確認したとき、正直私もビクツとなった。雨に打たれて濡れた前髪がまばらに垂れ、その合間から目を覗かせている私。

洋服も肌にピタツとまとわりつくほどの濡れようで、まさにみすばらしい限り。

そんな女が急に人前に現れたら、驚くのも無理はない。

そりゃ無理はないけど……

だからって、化け物呼ばわりされる筋合いはない。断じてないわ！

「誰が化けものですって？あ？もういつペン言ってみなさいよ！」と、すごむ私。ビビらせてやろうと思ったけど、その甲斐もなくあつさりスルーされた。

「あ、お部屋の消臭剤と同じ匂い」

「Σ―11（；；）――1」

リリアは天然なのか頭の回転が速いのか、すでに冷静になっていて、私を頭の前から足の先まで見下ろしている。

そしていかにも『アタシの勝ちね』と言わんばかりの勝ち誇った表情。

これは私の被害妄想なんかじゃない。

「誰？」

リュウヤに目配せして言い放つリリア。

「この人は……俺の……」

「あーわかった！」

リュウヤが言い終わらないうちに言葉を遮るリリア。

「この人……もしかしてアレじゃない？ほら、あなたがテレビで言ってた人。6年か8年かずっと好きだったっていう……」

「だったら何だって言うのよー！」

できるだけ低い声で言った私。こんな時、高音でわめくような声なんか出したら、余計リリアに見下されるだけだもの。

「ふーん。本当だったんだ。てつきり作り話かと思ってたのに」

リリアは腕組みをしながら、ふてくされたような態度をした。

「リュウヤにはアタシより、そっちの一般人の方がお似合いね。フツという良かったわ」

再び沸々と湧いて来る私の怒り。

「あんた有名人だからって、ナニ様のつもり？」

「アタシはリリア様よ。くたびれた芸人に捨てられた女って世間にレッテル貼られたみじめなモデルよ」

「みじめですって？」

「みじめよ。だってそうでしょ。アタシにもプライドってもんがあるわ」

驚いた。よくもシヤアシヤアと言えるものだ。

普通、自分にそんな嫌味な部分があったとしても、自分が有名人なら人前では隠すもの。

私の声が怒号に変わる。

「ふざけんじゃないわよ！あんたね、リュウヤがどれだけあんたを気遣ってしゃべったと思ってるの！」

リリアはやれやれといった表情で、私から視線をそらせた。

「もういいわ。リュウヤはアタシのお下がりだけど、あなたにあげる。別に恨まないから安心して」

私はもう我慢できなかった。この物言いはなんだ？まわりからチヤホヤされすぎるところなのだろうか？

私の煮えくり返るこの気持ちを、言葉に表すのはもう無理。限界。

足早に4、5歩ほどリリアに歩み寄った私。

そのときすでに私の右手はサイドハンドの投球フォーム。

——パシーンッ！

無言で平手打ちをお見舞いしてやった私。

リリアは体のバランスを崩して床にへたりこんだ。

頬をおさえて再び彼女が私に視線を合わせたとき、その目はもう涙目だった。

「親にもぶたれたことないのにつ！」

甲高い声で何を言うかと思ったら、こんなふざけたこと言っすりア。

「ガンダムのアムロみたいなこと言ってんじゃないわよっ！」

私のこの言葉になぜカリウヤが反応。

「安佳里、そんなことよく知ってるな。タイムリーだったっけ？」

「バカ！再放送に決まってるでしょ！」

ぶたれてからのリリアは態度が急変。

ふてぶてしさから一気にわめき散らすようになった。

「なによもっつ！ほっぺた腫れたらどうしてくれんのよ！」

「知らない」

「お仕事できなくなったら責任取ってもらっわよ！傷害罪で訴えるからっ！」

「どうぞどうぞ。そのときは私が世間に全てを公表するわ」

「うう……」

今度は私が1枚上手。私の勝ち。

……だと思ったら、リリアの意外な反撃が待っていた。

「なにさ変態っ！」

「は？」

怒るよりもマジでキョトンとした私。

「何言ってるの？なんで私が変態なのよ！」

リリアが頬をおさえながら言う。

「どこから盗んで来たのよそのパンツっ！」

「パンツ？え？パンツって……あ！」

ガ　ΣΣ（。Д；）　ン！！

そう言われて自分の身なりをチェックした私。

すると、とんでもないことに気がついた。

私の左腕には、しっかり男性用のパンツがヒジまで通されていたのだ。

しかも生乾きのエロいブリーフが。

「こっ、これは……」

私は激しく動揺した。

もちろんこれはとなりのベランダから風で流されて来たもの。

あのとき、リリアに対するあまりの怒りに、私はこのパンツを投げるどころか、腕に引っ掛けてしまったまま部屋に突入したらしいでも、こんな小ざかしい女に付け入るスキなど与えたくない。そんな私が何とかこの場をごまかそうと、アドリブで出たところの行動は、このパンツをリリアの頭からかぶせることだった。

へ　（　□　へ　）　きゃーー♪

「うるさいっ！タレントならこれくらい平気でしょ！」

「アタシ、お笑いじゃない！モデルだもん！」

「お笑いをバカにすんじゃないわよっ！人前でバカを見せる人ほど、賢い人なのよっ！」

私はパンツを彼女の顔まで引っ張り下げた。

「うっ！く……くさいっ！ゲホッ！」

パンツにむせるリリア。

「ウソおっしやい！ちゃんと洗濯してるはずだわ」

私はリリアから離れ、リュウヤの脇に。

彼女は自分で頭からパンツを脱いで、泣きながらわめいた。

「もういやっ！アタシ帰るっ！」

「あんたが勝手に来ただけでしょ！何しに来たのよ全く！」

「リュウヤに土下座してもらったためよ。でももういい。顔も見たくない！リュウヤもあなたも！」

「それは私も同じよ。サヨナラ梅子ちゃん」

「！！！！」

リリアはワンピースを翻し、勢いよく無言で玄関へ。

彼女がちょうどドアを開けたところに、見覚えのある男が顔を覗かせた。

「あの…すみません。僕の下着がこちらに…あ！それ…」

ハッとしたリリアが手に持っていたブリーフを男に押しつけた。

「男ならボクサーパンツ履きなさいよっ！もうっ！」

そんな捨てゼリフを残して彼女は早足にこのアパートから出て行った。

でも言ってることは適格で、私もその意見には同感。ボクサーパンツが好き。

今そんなことを言ってる場合じゃないけれど^ | ^ ；

玄関の前でとなりの男が放心状態になっている。

「どうかしましたか？」

とリュウヤ。

「あの…今の横瀬リリア…ですか？」

「…まあ、そうだけど」

—— オオーw（*。o。*）w

頭モシャモシャ男のキモい雄たけび。

「横瀬リリアが僕のパンツを持っていたなんて、信じられない!」

「持ってたじゃないわ。かぶってたのよ」

「!？エエエエ（。○。；）エエエエ!？そんなバカな!」

「本当よ」

「だってまだ洗濯してなかったのに!」

「（ノ——）ノコケッ!」

男の表情が驚きから一変、至福の喜びに変わった気がした。

「もう、このパンツ絶対洗わないぞっ!」

そこでリュウヤがボソツと一言。

「洗えよ」

（続く）

46話 こんなときのお邪魔虫

濡れた髪や洋服も乾かぬままに帰宅した。

結局こんな騒動もあって、リュウヤと落ち着いて話すことはできなかった。

でも収穫はある。

帰りはリュウヤのポンコツ車で送ってもらったし、次に会う約束もした。

なのに車の中では私のリリアに対する幻滅と怒りをリュウヤにぶちまけてばかり。

興奮状態がおさまらないせいもあって、なかなか本題には入れなかった。

ちよつと大人げない自分に反省したのは帰宅してからのこと。

またしてもタイミングを逃す私。

(; _ ;) || 3 フウ

深いため息。

車中とはいえ、せつかく二人きりの時間があつたのに、ろくな話もしていない。

しいて言えば、なぜリュウヤは貧乏生活してるのか聞いたこと。

結構稼いでいたはずだから、もっと良いマンションにも住めるし、こんな軽のポンコツにも乗らなくていいはず。

だけどそんな疑問もリュウヤの一言であっさり片付けられた。

「俺、車も家にも興味ないから。てか贅沢したいとも思わんし」
そう言われたら身もフタもない。話しもここで終了。

ダメな私。それ以上、話を膨らますことができない。
かつては付き合った仲だというのに。

反省ばかりが先に立つ。

家に着いた時なぜ『ちよつと寄つてかない?』くらいの一言すら
言えなかったんだろう。

所詮これも結果論。あとからそう思うだけ。

——次に会うときこそ…

今度こそ、私のストレートな気持ちを言おう。

本当は今日もそう決めてたのにリリアに邪魔された。

でも次こそは最後のチャンスだと思って。

言葉はシンプルでいい。今までのことを素直に謝って、そして好きという気持ちを伝えよう。

それで付き合うかどうかはリュウヤの判断。

私は彼を傷つけた。だから私が判断することじゃない。

約束はあさつての夕方。

私の人生において、ひとつのターニングポイントになるかもしれない日。

待ち合わせ場所はリュウヤの指定で、街の真ん中にあるオアシス
広場。

そばには大河が流れていて、向こう岸に見える都会のコンクリー
トジャングル群が、夜になると川の地平線に沿って横一線、きらび
やかな夜景に変わる。

まさに夜は灯りが宝石の輝きにも見えるほどのパノラマ状態。カ
ップルたちの定番。

私も実は2年くらい前に、一度セフレと来たことがある。

その時の第1印象は、まるで“銀河鉄道999”に乗って、空か
ら観た機械都市の灯りを眺めているように思えた。

でもセフレにしてみれば、当時は夜景をロマンティックに眺める
というのではなく、野外エッチに萌える場所として単に選んだだけ
だった。

近くにはオフィス街や芸能プロダクションが多く点在し、リユウヤの事務所もそこから近い。

彼は自分勝手に引退宣言はしたけれど、事務所との契約期間はまだ終わっていないし、仕事のスケジュールも残っていると聞いた。おそらくあさつても、事務所から早く到着できるようにと選んだ場所なのかもしれない。

——ピンポン

玄関からチャイムの音。

そう言えば母は留守。リビングに婦人会の打ち合わせで帰りが遅いとの書置きがあった。

打ちあわせだの会議だのときれいごとの言葉を並べたところで、実質的にはただの飲み会&カラオケ。

どっちにしろ、私が玄関に出なきゃなんない。

シャワーも入ったし、もうだるいから居留守使おうかな。。

——ピンポンピンポンピンポン！

なんだろう？このしつこさ。子供？何か緊急の用件？それとも回覧板？

仕方がないから、様子だけでも見ようと足音を立てずに玄関まで行った私。

そして覗き穴からそつと外を伺った瞬間、私は息を呑んで思わず後ずさりした。

『なんで？なんでここにいるの？』

と、私の心の声。それが何度も自分にこだまする。

だって…だってそこには私が子供のころから大キライな人物が立っていたんだもの。。

しかも母も父もないときに現れるなんて最悪も最悪！

困った。本当に困った。どうしよう。

困惑する私。でも、追いつくわけにはいかない人物。居留守も使えない人物。

例えばその人が私のトラウマを作った張本人だったとしても…

——ギンゾー。。。何で今なのよ。。

（続く）

47話 苦手意識

私はギンゾーを居間に通した。

奥さんに先立たれ、兄弟や親戚の家を転々としながら過ごしている哀れな叔父。

持ち家はあるけれど、子供もない一人暮らしの家には長くこもっていけないらしい。

元々おしゃべりが大好きで、社交的なギンゾーにとって、今は辛すぎる現状なのかもしれない。

そして今日だって百キロも離れた自分の家からはるばるやって来ている。

そんな叔父に私は居留守を使うわけにもいかなかった。

「今日は誰もいないよ。お父さんは夜勤だし、お母さんは帰るの遅いつて」

ソファに座ったギンゾーに、私は少し離れた場所から立ったまま説明する。

「まあいいさ。安佳里さえいれば別にかまわん」

・・・（－－－－－－－－）：）どういう意味？

「安佳里は晚めし食ったのか？」

「まだ。私もちょっと前に帰って来たばかりだから」

「じゃあおじさんと一緒に食べようじゃないか」

ゲッ！Σ（・・ω・；）――やっぱりなんかヤバい展開になって来た。

ギンゾーと私が二人つきりでごはんを食べるなんて想像できない。てか想像したくもない。

でもこれは確かな現実。私にとっての拷問。
疲れて帰宅したのになんてことだろう。。
今日の星座の運勢は最下位だったのかな？

それより第一、急に来たお客さんに出す料理なんて、うちには何も
ない。

いつもならギンゾーは前もって来る日を通達して来るのに、今日
に限ってそれもなし。

我が家は中流家庭よりはやや下のランク。

毎日ごちそうばかり食べてるわけじゃない。

来客予定があるときは、準備時間が必要なのだ。

「おじさん、今日はジンスカンも何もないよ」

「もう食い飽きた。それに最近は脂っこいものが食べれなくなつて
な」

「じゃあ何食べる？私は残りもので簡単に済ますつもりだったから
…」

私がそう言うと、ギンゾーは内ポケットの財布から二万円を取り
出した。

「安佳里、これで寿司をとろう。出前頼んでくれ」

「ええっ？いいの？」

「寿司嫌いか？」

「ううん。大好き」

私は思った。今『寿司嫌いか？』なんて聞くくらいなら、もっと
私が生子供の頃に『ジンスカン嫌いか？』と聞いてほしかった。

なら私はすぐに『お寿司がいい！』と答えることができたのに。

「おじさん、何人前頼めばいいの？お母さんはたぶん食べて来ると

思っけど」

「俺と安佳里しかないんだから五人前でいいさ」

どういう計算なんだ…（^ー^；）

「おじさん、それよりも近くに100円回転寿司があるから行かない？私、案内するから」

「ダメダメ。あんなの見てたら目が回る」

——言ってる意味がわかんない（^□^；A

「でもおじさん、回転寿司なら五千円くらいで済むよ。私、お持ち帰りで買って来る」

こう言ってもギンゾーは真っ向から否定する。

「そんなことしないでいいから。配達してくれるところに頼めばいいだけだろ。寿司はやっぱり寿司職人が握ったのでなきゃダメだ」

「ふうん。」

昔の人だから頑固なこだわりがあるようだ。

まあいいわ。ギンゾーの言うとおりにしてあげよう。

高くてもお金は払ってくれるんだし、おいしいお寿司が食べれるんならそれで。

「もしもし。配達頼みたいんですけど。えと…五人前」

私はタウンページから、住所の近いお寿司屋さんを抜粋して電話をかけた。

ギンゾーが私の背後から指示を出す。

「安佳里。“上”を頼みなさい」

「うん。じゃあ特上を五人前お願いします」

「違うつ！特上じゃない。ただの上っ！」

ギンゾーがちょっと焦ったようだ。

「じゃあただの上でお願いします」

「中トロと穴子は絶対入れるように！」

「中トロと穴子は絶対入れて下さい」 - ;」

私はギンゾーの指示をリピートするように注文した。

それにしても、脂っこいものは食べれなくなったと言うわりには、中トロと穴子を指定するのはいかなものか。

私が一番イヤだったのは、お寿司が来るまでの待ち時間。

ギンゾーと共通の話題なんてひとつもない。

一応はお客さんだし、ギンゾーをリビングにひとり置いて、私が部屋に戻るわけにもいかない。

どうしよう。。とりあえずテレビでも観てもらうしか…

「安佳里、実はおじさんな、お前に話があるんだ」

「えっ？」

「まあここに座ってくつろぎなさい。遠慮はいらん」

——「ここ、私んちなんだけどな… ^ | ^ ;

とりあえず私は言われた通りにするしかなかった。

ギンゾーはソファ。私はテーブルを挟んで、反対側の床の上に座る。

するとギンゾーもソファから降りて、床上にあぐらで座り直した。もちろんカーペットは敷いてあるけれど。

「おじさんはソファに座っていいよ。その方が足も楽…」

と、私の話がまだ済まないうちに、ギンゾーは突然態勢を正座に変えた。

——「えっ？」

そして次の瞬間、勢いよく両手を床につけ、頭を深々と下げた。
「安佳里…すまん。おじさんが悪かった。許してくれっ！」

——ちよ…なに？なんなのこれ？

（続く）

48話 わだかまり

いきなり頭を下げられても全然意味がわからない。

戸惑いよりも驚きの感情の方が上。

昔から豪快で強気な物言いのギンゾーにとって、小娘にすぎない私にひれ伏するなんて前代未聞。

信じられないけどこれが現実の光景。

いくら妄想族の私でも回想と現実の違いくらいわかる。

そんな私の驚きを知ってか知らずか、更にギンゾーは頭を床にこすりつけながら謝罪の言葉をしゃべっている。

「本当に申し訳ない。この通りだ安佳里」

本当に不可解だった。

ギンゾーはまだ酔っ払っていないようだし、本気で私に謝ってるのに疑問の余地はない。

でもなんか、そんなマジモードのギンゾーを見ていると哀れに思えてきた。

大嫌いなギンゾーだけど、寄る年並みに性格が少し丸くなったのかもしれない。

「おじさん、頭上げて。もういいから。なんだかさっぱりわかんないし」

とぶっちゃけ正直な意見も付け加えて言う私。

ギンゾーは両手をついたままで少し顔を上げたけど、目線は目の前のテーブルよりまだ低い。

その姿勢のまま、再び口を開くギンゾー。

「安佳里はおじさんのこと嫌いだろ？」

凶星を指す質問に思わず『うん』って即答しそうになったけど、さすがの私もそれは自重した。

「おじさんはどうしてそう思うの？」

「聞いたんだよ。お母さんから」

「えっ？Σ―11（；）―1」

私の胸の高鳴りが一気に加速する。

――まさか…まさか母が私の秘密をギンゾーにしゃべるなんてことは…

「安佳里がジングスカンが嫌いだなんて今まで全く知らなかったんだよ」

「は？――あ、ああ…そのこと」

「おじさんがここに来るたびジングスカン食わしてもらってから、この家族もみんな大好きなんだと思ってたんだ」

「でも私が食べてるの見たことないでしょ？」

「全然そんなこと気にして見てなかった」

――（ノ――）ノコケッ！

ここでギンゾーはやっと床についた両手を離し、姿勢を起こした。驚くほど真顔だけど、私を見るとわずかな笑みを浮かべながらこう言った。

「だから今日は安佳里の好きなだけ寿司食ってくれ。な」

「・・・」

――そっか。そうだったんだ。だからなんだ…

「おじさん、最初から私にお寿司を食べさせてくれるつもりで…」「いやいやいや…脂っこいのが食えなくなっただけさ。それに年とるとな、量も食べれなくなるんだ」

「…ほんとに？」

「ホントだとも。おじさんは中トロと穴子さえ食べれば他はもういらん」

——だからじゅうぶん脂がのってる魚でしょうが（-_-;）

「もうすぐ出前も来るころだな。江戸前食べるのは久しぶりだ」

「江戸前かどうかかわかないよ」

「ここらへんは江戸前に決まってるさ。鹿児島島の親戚の近所にも江戸前寿司があるくらいだからな」

「ふうん…」

それにしてもホツとした。ジんギスカンは私の秘密の一部ではあるけれど、どうやら私のトラウマに関する直接的なことは知らされてないようだ。

やがて、出前が届き、ついにギンゾーと二人きりの食事が始まった。

これはこれでまた別のストレスがたまるもの。

なんせ、今まで私はずっとギンゾーを避けてきたわけだから当然の話。

ただ黙々と食べるしかない。共通する話題なんてありそうもないし、そこまで気を使ったらせつかくのお寿司がまずくなる。

考えてみたら私にとって回転しないお寿司なんて、人生で初めてなんだもの。

テーブルに置かれたお寿司の丸い盛り皿。

私がすぐにしたことは、自分専用の取り皿に食べたいお寿司を先に取り置きすること。

案の定、ギンゾーから突っ込みが入る。

「そんなことせんでもいい。安佳里の分まで食べたりせんから」

「自分の手前にあった方が食べやすいから…^ | ^ ;」

苦し紛れの言い訳。でも本当の理由は違う。

ギンゾーの使う割り箸で、ひとつのお皿のお寿司を取り合いたくないから。

もつとわかりやすく言えば、ひとつの寄せ鍋に他人の食い箸が突っ込まれるのがイヤだから。

でもさすがにそれをバカ正直に言うのも失礼なことだし。

そういつときつて、全てのことが裏目に出るもの。

私の心中など知るよしもないギンゾーは、

「安佳里、この中トロは特にネタがいい。大トロに近いぞ。ほら」と言いながら、自分の食い箸で中トロを挟んで私のお皿に入れようとする。

——っ!!

その一言を口には出さずに心の中に押し込んだ。

「食べてみる。うまいから」

「…うん。でも私、おいしいものは最後に食べる方なの（ - ; ;
ジンギスカンじゃなくても、ギンゾーとこはん食べるのは至難の業だと悟った私。」

テレビをつけながら食べてたせいで、少しは間が持てた。

ちょうどお笑い番組『爆笑！Heyカモン』の放送中。

でもリユウヤはもうここにはいない。一抹の寂しさを感じる私。

そんな食事中のひととき、またまたギンゾーからの度胆を抜く言葉が私の耳と胸に突き刺さった。

「安佳里…お前…なんだその…」

「????なあに?おじさん」

「だからその…キ、キッスっちゅうか…せ、せっぷんができないんだって?」

「!?!?!」

(続く)

49話 ギンゾーの涙

後頭部を殴られたような衝撃が走る。

私は食べようとしていたサーモンを醤油の入った小皿に落とした。

”ビチャッ!”

「Σ—11(;)——1はうつ!」

続けざまのダブルショック。

飛び散った醤油が私のTシャツを茶色に染める。

でも汚れたシャツを気にしたのは一瞬だけ。

それよりも何よりも、私のCPUはギンゾーの言葉による衝撃を優先した。

ギンゾーが私のトラウマを……知ってる?

「おじさん、それ誰から聞いたの?」

私の秘密を知ってるのは母しかないわけだから、この質問は無意味かもしれないけど、確認のために聞いてみる。

「やっぱり本当なのか?」

それには答えず質問返しをする私。

「おじさんにしゃべったのお母さんでしょ?」

その答えは予想外なもので、しかも即答だった。

「いや、銀次郎だ」

ガ ΣΣ(。D ;) ン!!

銀次郎とはギンゾーの弟であり、私の父。

その父が知ってるということは、教えたのは絶対母。

あれほどお父さんには言わないでって念を押してたのに…

ギンゾーに言ったところで、どうなるもんじゃないのに…

私の表情が顔に出たせいで、ギンゾーもそれ以上は何も聞いてこない。

それが私にとっての救いだっただ。

もし、ギンゾーが酔っ払っていて、二ヘラっつと笑いながら、

『おじさんとキッスでも試してみるか？（＊、＊）ウヒョヒョ』

なんて言おうものならブチ殺すところ。

でも実際はその逆。真顔で私に視線を送りながら箸が止まっていた。

私に何か次の言葉を求めているのはわかってるけど、どう答えていいかわからない。

動揺してしまった私が今更否定したところで、ギンゾーに受け入れられるはずもない。

というか、早くこの話題から逃れたい。

「あ、そういえばビールあるの忘れてた。お茶だけじゃ物足りないよね。すぐ持つて来る」

そそくさと立ち上がる私。それが余計に白々しいお芝居になったけど、とにかく一旦この場を出たかったから。

冷蔵庫の前で一息間をとったあと、缶ビールを2本取り出した。

このまま普通に帰っても大丈夫かもしれない。

ギンゾーはもうわかってるんだし、動揺した私をこれ以上追及しては来ないはず。

そう思いながらも緊張している私は、つい小芝居じみた明るい声で席に戻る。

「おじさんお待たせー！グラスに空けた方がいいよね？（＊…、

＊）ウフッ」

ギンゾーは無言。私は目線を合わさずに、グラスにビールを注ぐ。「はい、おじさん。ごめんね遅くなって」

チラッとギンゾーと目が合ったその瞬間、私は自分の目を疑った。

——ギンゾーが泣いている…

信じられなかった。真顔のギンゾーの目に涙がにじんでいるなんて。

あつけに取られて言い出す言葉も見当たらない私に、ギンゾーが話し出す。

「安佳里…おじさんのせいなんだな…」

「えっ？」

「おじさんのせいで…チウウでなくなっただろ？」

所詮ごまかそうと思っても無駄だった。

「それもお父さんから聞いたの？」

「…そうか。やっぱり本当だったのか…」

「え！？どういうこと？」

「原因は誰からも聞いてない。おじさんがそう思ったただけだ」

「……！」

おじさんはあぐらをかいたひざに両手をあて、深々と頭を下げた。

「安佳里すまん。本当にすまん。銀次郎にも申し訳ない…」

再び謝られてもどうすることもできない。

現に今もトラウマを引きずってる私。

『おじさん、そんなこともうどうでもいいよ』とも言えない自分がいる。

私がせいぜい言えたのはギンゾーに尋ねることだけ。

「おじさん、どうしてそう思ったの？自分が原因だって」

ギンゾーは少し頭を上げただけで目線はまだ下を向いている。

そしてそのままの状態で口を開いた。

「うちは長年子供に恵まれなくてな…安佳里が生まれたときから可愛くてしょうがなかったんだよ」

「・・・」

「だからしょっちゅう、口実をつけてはここに来てたんだ。お前に会いにな」

「私に…会ったために？」

「ああ。そして安佳里にチュウばかりしてたんだ。自分でもしつこすぎるのがわかったくらいだ。だから気がついたんだ。それが安佳里にとってはかなりの苦痛だったとね」

「それにいつも酒臭かったからだよ。ヒゲもこすれて痛かったし、なぜかすんなり言えた私。」

「すまん。おじさんの酒グセは生まれつきなもんでな…」

——それ、生れつきって言わないと思うけど（^ー^；）

「それに毛深いからヒゲもすぐ伸びるんだ。子供の軟い皮膚には痛かったかもしれん。でもわかってくれ。おじさんは安佳里が可愛くて可愛くて、舐めるくらい大好きだったんだよ」

「舐めるくらいっていつか…舐めまくってたよおじさんは（- -；）」

「そうだったかもしれん」

「あのね…」（- -）

「お前がおじさんを毛嫌いしてることは知っていた。安佳里が子供の頃、おじさんの口に脱いだ靴下を突っ込んだときの真剣な顔を見てそう思った」

「そんな前から…（^ー^；）」

「その理由が今ようやくわかったよ。心からお詫びする」

ギンゾーがみたび深々を頭を下げた。

「おじさん、もういいよ。そんな何度も…」

「すまん…本当にすまん。安佳里の人生を台無しにしたかもしれん。」

チュウもできなきゃ彼氏も作れなかっただろうて……」

——っ！鋭い。でも彼氏はいたけど続かなかったただけだけど^^；

「もう頭下げなくていいよ。普通にして。おじさん」

さっきのように、少しだけ頭を上げたギンゾーの目からは、滲んでいた涙が落ちている。

口を開く声も涙声。まだビールも飲んでいないから、泣き上戸になつてゐるわけじゃない。

「おじさんの若い頃は厳しくてな。結婚するまで何もしちゃあいけなかったが、今はそんなこと言ってる時代じゃないからな」

「本当に何もしなかったの？」

「それは無理だった」

「（ノ——）ノコケツ！」

「それを思うと、余計に安佳里が不憫ふびんに思えてなあ……」

別に私、したくてたまらなかったわけじゃないんだけど^^；

「こんな寿司じゃお詫びにもならんが、好きなだけ食ってくれ」

ギンゾーはビールには手を出さずに泣いて私に謝っていた。

こんな真剣に、そして対等に話したのは初めてのこと。

「安佳里、ほら」

ギンゾーがポケットの財布から1万円札を出して私に差し出した。

「いいよおじさん。お寿司ごちそうしてもらったんだし」

「違う。これはそのTシャツ代だ」

「あ……」

「おじさんのせいで汚してしまったんだから、新しいのを買いなさい」

「悪いもん……」

「若い娘が醤油のシミのついたシャツで外に出れんだろうっ」

「シミはちゃんと落とすから（＾―＾；）それにこれ、部屋着だし」
「まあいいからいいから」

結局、無理やりお金を押しつけられて受け取ってしまった私。

「おじさんがここに来るのも今日が最後だ。安佳里にしてやれることはもうない」

「え？」

「引越するんだ。距離も遠くなるからなかなか来れないと思う」
「手伝いに行こうか？」

「ありがとう。その言葉だけで充分。気持ちだけ受け取っておく。
おじさんが言えた義理じゃないが、いい嫁さんになってくれ。それが一番の願いだ」

「おじさん……」

このとき私は二つのことに気がついた。

子供の頃から毛嫌いしていたギンゾーに、これほどまで深く愛されていたんだと。

実の子じゃないのに。単なる姪っ子なのに。泣いて私に詫びるほどに。

そして今夜の訪問は、最初から計画的だったこと。

きつと父や母と連携して、今夜は家を留守にし、私とギンゾーを二人きりにさせたのだ。

ギンゾーが私の大好きなお寿司をとってくれたのもそのせい。

私が回転寿司に連れて行こうとしたときも、出前にこだわった理由もよくわかる。

なんだか不思議。

そう思うと、今までのわだかまりが一気に解けてゆくような気がした。

これほどの長い確執が^{かくしつ}一気に……

そして次に私の口から出た言葉。

今までの私とは信じられないセリフが飛び出した。

「おじさんが来れないんだったら、私が会いに行くよ。待っててね」

「安佳里…」

ギンゾーは自分の手で涙をぬぐった。

「こんな年取ったおじさんが姪っ子の前で泣くなんて、みっともねえや…ハハ」

「おじさん、お寿司食べよ。まだいっぱいあるよ」

「あ、ああ…」

こうして長年続いたギンゾーとの犬猿の仲に終止符が打たれた。

ビールを飲んでものに爽やかな、そして清々しい夜だった。

ギンゾーと会ったのが、これが本当の最後になるとは夢にも思わなかった。。

（続く）

50話 オアシス広場

夕方と言っても空はまだ明るかった。

フェンス越しに大河の流れを見てみると、心なしか風はないけど涼しい感じ。

ついに来た。約束の待ち合わせ場所に。

多少の緊張はあるけれど、迷いはない。

それを更に確定づけたのは、意外にもおとといのギンゾーの訪問。あのギンゾーが、私ごときの小娘に頭を下げ、泣いて謝った。

自分が悪いと気づいたらすぐに謝る姿勢。

今まで軽蔑の念しか抱いてなかったギンゾーのイメージを、一気に払拭^{はつしよく}することにもなった。

当たり前のことかもしれないけど、これができなかった私。

悪いと気づいてもすぐには謝れなかったこと。頑^{かたく}なに意地を張ること。

でも今日は言える。今日こそ言える。今日だから言える。

あとはリュウヤが来るのを待つだけ。

広場中央にはベンチもたくさんあるけれど、すでに人で埋まっていた。

川に沿って数百メートル続いているフェンスにも、所々にカップルや、彼氏待ち、彼女待ちの面々が点在している。

昼の強い日差しも遠ざかり、私にとっては最良のコンディション。元々、晴天はキライ。真昼でも曇りの方が大好き。

私の性格を反映してるのかもしれないけれど。

遠くにリュウヤの姿が見えた。

広場からここまではまだ少し距離があるけど、彼は私に気づいたようで、こちらに向かって手を振った。

私は自分の胸のあたりで小さく手を振り、すぐに流れる川の方へ向き直る。

だって、彼が歩いて来るのをじっと見つめながら待つのも、なんとなく恥ずかしかったから。

それに実は、私の思い描いている理想の待ち合わせというものがひとつあって…

それは、フェンス越しに向こう岸の街並みを見ている私を、背後から優しくそつと声をかけて欲しいこと。

贅沢を言えば、背後から優しく肩に触れてくれてもいい。もしくは抱きしめてくれたって構わない。

それが今の関係ではとても無理なことだとわかっていても。

こんな乙女チックでドラマじみたことを妄想しているなんて、スレた私には今までなかった。

やっぱり私はリュウヤが好き。あらためてそう確信した。

「ごめん安佳里。遅くなった」

川を眺めている私の耳に聞こえてくるなじみの声。リュウヤの到着。

でもなぜか……ちょっと声が遠くて、聞こえてくる方向も真横から。

「あ…（――）」

不審に思った私が振り向くと、彼は10メートルほど離れたところにいる別な女性に声をかけていた。

振り向く知らない女性の顔を見て、ハッと後ずさりするリュウヤ。その光景を見た私は噴き出してしまった。

「リュウヤこっちこっちっ！（＾□＾）」

助け舟を出した私にやっと思ついたらリュウヤ。驚きの真顔がまた笑える。

「す…すみません。間違えました」

丁重に謝つて、頭をかきながら私の方へ歩いて来る彼。

「わりい。ドジった。後姿が似てたから」

「いいよ。なんか緊張がほぐれたよ私」

「ん？緊張してたのか？」

「ちよつとね。いい風が吹いて来たわ。気持ちいい」

私が再びフェンスに両手をかけ、川の対岸に目をやると、リュウヤも私のとなりで同じ姿勢をとった。

「ここ来るの初めてかい？」

私はその質問には答えなかった。

グズグズして本題を伸ばすのもうNG。

今ここで決着しないと、途中またどんな邪魔が入るかわからない。言うなら今。今しかない。

私はリュウヤに向き直った。

「私ね、今まですごくズルい女だったの」

この言葉に首をかしげるリュウヤ。

「安佳里、先にごはん食べに行こうよ。話しはそこでしないか？」

やっぱりこんなパターンになつてしまふ。これじゃいけない。

「お願い。今言わせて。今じゃないと言えなくなっちゃう」

私の真剣な眼差しが伝わったのか、リュウヤが折れた。

「うん…いいよ。安佳里がここでいいなら」

彼も私に体ごと向き直り、片手はフェンスの上部に添えていた。これでもう邪魔は入らない。私に与えられた時間に気持ちをぶつけるだけ。

「リュウヤ。今まで本当にごめんなさい」

私は深々とお辞儀をした。

「ん？今まで？どういうことだ？なんで安佳里が謝るんだ？」

「聞いて。私ね…私、リュウヤが好き。本当は大好きなのに今まで言えなかった…」

「……」

「それなのに思わせぶりな態度したり、あなたを見下すような言い方したこともあった。私、本当に反省してるの。今も悔やんでる」

「……」

「私、横瀬リリアにすごい嫉妬してた。自分でも驚くくらい。そしてハッキリ気づいたの。私はリュウヤが好きなんだって」

「ん〜」

リュウヤがややうつむいて考え込んでしまった。

それにどんな意味があるのか気にはなるけれど、とにかく私は自分の主張を言い続けた。

「私は自分勝手な女。だからリュウヤにその気がなかったら、付き合えなくなっただけいい。私が撒いた種だから。ただ、どうしても私の意志を今日、あなたに伝えなかった。そして謝りたかった。今日はその一念だけ。私からの要求は何もないわ」

言えた。完璧とは言えないけれどなんとか言いきれた。

次に気になるのはリュウヤの言葉。

どんなことを言われようと、私はそれに従うつもり。

今までセフレと好き勝手してきた私に、ハッピーな結果が待っているのは都合が良すぎるし、そんなこと天が許してくれるとも思わない。

でもそれはそれで、真摯^{しんじ}に受け止めよう。それでいい。

今日、決めて来たことだから。

（続く）

51話 スキってなに？

ひとりでカラオケに来るのは初めて。

——そう、私ひとり。なぜかひとり。

リュウヤと会って話したまでは良かった。

でもその後、一緒にごはんを食べに行った店では、すでに意気消沈していた私。

残さず食べる親のしつけのせいで完食はしたけれど、味を堪能できる精神状態ではなかった。

別にフラれたわけじゃない。決してそうじゃないんだけど…

リュウヤは私を家まで送ってくれると言ってくれた。優しい口調で穏やかに。

少しぎこちない言葉の噛み具合は、高校時代を思い出す。

彼の変わったところと言えば、自分のことを“僕”と表現していたのが“俺”になっていたくらい。

そんなこと別に不自然でも何でもない。

とにかく私は送り返されるのを断った。

こんなモヤった気持ちのまま家で帰りたくなかったから。

どうせすぐに帰ったところで私のことだから、部屋の天井を見つめて妄想と回想の世界に入るだけ。

今はそんな自分にはなりたくない。

カラ元気でいいからもつと明るい自分でいたい。

だって、そうじゃない。

キライって言われたわけじゃないのに…

むしろ好きって言われたのに…

なのに煮え切らない私の心。リュウヤの真意は本当にあれで良かったのかな？

考えれば考えるほど悩みは尽きない。

でも今日はこれ以上、悩みたくない。気分を立て直したい。だから私はカラオケで歌うことに決めた。

一般的にはひとりカラオケだって最近では珍しくない。

他のOLグループに受付を見られているときは恥ずかしかったけど、ルームに入ってしまったえばこっちのもの。

今夜は歌いまくるんだ！お酒も好きなだけ飲んじゃえばいい。よくいる大阪のおばちゃんみたいなガラガラ声になったって。

アップテンポな歌を中心に、思いつくままの選曲。

JUJU、ミリヤ、カエラ、テルマ…

一息つくとかクテルをお代わりして一気に飲み干す。

そして次にモー娘、E.L.T、林檎、パフィ…

だんだんと歌う曲が昔のヒット曲に移り変わってゆく。

そんな中、何曲目だろう？私はすっかり選曲ミスをしてしまう。

つい、ユーミンのバラードを入れたもんだから、私の奥底にくすぶっていた感情が掘り起こされてしまったのだ。

私得意のフラッシュバック癖がついに勃発。

こうなると自分の目の前が幻影だらけになる。

人はこれを上の空というのだろう。今話かけられても多分私は反応しない。

そこまで自分を知っていながら、そんなリピート世界に入り込ん

でゆく私。

今日で——今日で全てが決着すると思っていた。そうすべきだと心に誓っていた。

なのに実際はその逆で、何をどうしたらいいかわからない難題にぶち当たってしまった。

なすべきことがわからない。迷うばかりの私。

これがベストだったんだろうか？これが新しい恋愛の形なの？

以前にもまして独り言が多くなった私。

狭いルームで独りブツクサ言ってる様は、人が見たら薄気味悪いかもしれない。

でもいいんだ。気にすることはないもの。ここは私だけの空間なんだから。

回想しながらも歌い続けている私。

これって器用なのか変なのか。

しかも泣きながら歌う私。今歌ってる曲はドリのLOVE LOVE LOVE。

歌詞に対する感動もあるけれど、リュウヤとの会話が鮮明に蘇って来たことが最大の理由。

——約1時間前

「俺も安佳里がずっと好きだったよ」

少し照れくさそうにうつむき加減で言うリュウヤ。

私はその一言で胸が熱くなった。

もう私のことなんて、とっくに冷めてしまったんじゃないかと内

心もなやましていたから。

「ごめんな。梅子との一件で俺はウソをついていた」

リュウヤのこの言葉に対して、私は深く追及しないことにした。モッチーからも事情は聞いてるし、今ここで本当の気持ちが聞けたのだから。

「もういいよ…」

そう言う私の返事をよそに、彼は自分なりの釈明を語り始めた。

「良くないさ。俺はズルかった。自分をごまかしてたんだ。本当に情けないと思ってる」

「情けないのは私。リュウヤじゃないよ」

その時の私達はもう目を見て話してはいなかった。

打ちあわせしてるわけじゃないのに、二人ともほぼ同時に流れる川の向こう岸に目をやり、ただボーっと眺めながらお互いの声に耳を傾けていた。

「俺は臆病者だったんだ。一方的な俺の片思いだとはっきりわかったとき…」

「だから違うよ。私だって…」

「まあ聞け。とにかく俺はそう思ってたんだ」

「・・・」

「そんな自分の重たい性格に嫌気がさしてさ。ずっと続いた片思いも冷めたふりをしてたんだ。俺は強気で押すタイプの男じゃない。わかるだろ？」

「う…ん。」

「俺は逃げに入った。どうせ両思いじゃないのに、いつまでもこっちが好きのまんまじゃバカみたいだと思ってな。安佳里には随分と気のない素振りもしたよな。本当にすまないと思ってる」

リュウヤがこんなに正直に話してくれている。
高校時代から胸のうちを言葉に出すのが苦手な彼。
そんな彼が今、こうして私の前で語ってくれている。

思えば、私はリュウヤに助けられてばかり。
高校時代、私がトラウマを思い起こさないための自然な別れ。
そして彼が芸人になってからも、まさに彼流、誰も思いつきなど
しないトラウマの克服法を考えてくれていた。

リュウヤは何も悪くない。
逆に私の方がどれだけ迷惑をかけたことか。
リュウヤは全て自分のせいにしてる。
そうじゃない。絶対そうじゃない。

「リュウヤ、もう謝らないで。あなたが責任を感じることもなんて何
もない」

私の方に振り向くリュウヤ。私も彼を見つめた。
何秒間か…いや、何十秒か…いや何分か…

別にテレパシーなんてないから、意志疎通ができるわけじゃない。
でもリュウヤが次に口にしたことは、私が思っていたことと同じ
だった。

「もう過去の話しはこれくらいにしよう」
ほんのり微笑むリュウヤ。優しい眼差し。

私はここに来るまで、受け身でいようと思っていた。
これからどうなろうとリュウヤの意志のままに進もうと。
ここまで来る過程はいろいろあったけど、お互いが両思いを確認
できた今、もう私たちには障害はない。

そう。今がまさにそれが証明された瞬間。

そして、これから二人の進むべき選択肢が、ついに彼の意志によって始まるうとしているのを直感的に感じた。
リュウヤは何らかの結論を出したはず。
いよいよそれが次の言葉で決まる。。

——でも……でもそれは。。

あまりにも意外な言葉から始まった。

「スキってなんなんだろう？」

——は？

「好きっていうのとき、付き合っっていうのは同じことなのかな？」

どう答えていいのか、完全に言葉を失った私。

（続く）

52話 恋人のかたち

ひとりカラオケで4杯目のおかわりはモスコミュール。
歌いながらの立ち飲みや回想も、さすがにできなくなっていた。

最高に明るくしていた部屋の照明も最低に下げ、長いソファに勢いよくバタツとのけぞる私。

天井の消えかかったオレンジ色の照明をぼんやり眺めながら、大きく深呼吸をした。

でも実際の話、それは深呼吸ではなくて、深いため息にすぎない。

「ダメだわこれじゃ……絶対ダメ」

今やすっかり定番となった独り言。

誰も聞いてないと思うと、心に思うことも口に出してしまう習慣になっている。

「これじゃ自分のベッドにいるのと同じじゃない……」

すぐに飛び起きる私。酔いがまわってるせいもあって、頭がふらついた。

なのにテーブルのお酒を再び手に取って、まるで反射的な行動のように喉に流し込む。

ここにきて、なんだか急に体がだるくなったような気がする。
ソファの上で背筋を伸ばして座ってることすら、もうおっくう。

張りつめた気持ちで臨んだリュウヤとの対面。

いい意味で、緊張がほぐれたための疲労なら何も問題はなかった。
でもこれは重い疲れ。抜け出せない迷路に入り込んだような重苦

しい胸のうち。

いつまでもこんな湿った気持ちでいるのはイヤ。

「やっぱり30分くらい寝よう」

そう割り切った私は、再び勢いよく仰向けにドサッとソファに倒れ込んだ。

——ところが…

そこで私はとんでもないドジをしてしまう。

酔っていたせいで思考回路がマヒしてる私は、片手にお酒の入ったグラスを握ったまま、仰向けに崩れたのだ。

必然的に、グラスから飛び出た4杯目のモスコミュールが私の顔を直撃。

それだけじゃない。鉄砲水のように鼻の穴まで襲ったその液体は、私を呼吸困難にした。

「うぐっ！うぐぐう…うつ…」

再び飛び起きた私は目も開けられず、わさびを感じたときのようにツーンと染みる鼻をおさえながら、もがき苦しんでいた。

一瞬で酔いが覚めたのは言うまでもない。

「もうイヤだ…」

自前のハンカチで顔を拭き、少し落ち着きを取り戻すと、しばらく放心状態になった。

5分…10分…いや、ひょっとしたら30分以上、私は固まっていたかもしれない。

と言っても、この私が無の境地のはずもなく、当然のように深く入り込んでいった回想シーンはさっきの続き。
そう。私を悩ませたリュウヤのあのセリフ。

「好きっていつのとき、付き合うつていうのは同じことなのかな？」

私を悩ませることになったリュウヤのセリフ。
私をひとりカラオケに來させた発端のセリフ。

このあと彼は、自分なりの持論があるかのように話を続けた。

「俺、こう思うんだ。長年ずっと好きな人を思い続けているとき。
もうそれだけでいいんじゃないかって」

「…え？」

どうということなのか、よく呑み込めない私。

「だってほら。結局付き合っちゃったりしたらさ、すれ違いだって
必ず生じてくるわけだろ。付き合う前と微妙に思い描いてたことと
違ったりしてさ」

「それは確かにあるとは思うけど…」

やっと返せた言葉がリュウヤに相槌を打つようなセリフだなんて、
情けなくてしかたなかった。

「そんなのって、なんか切ないと思わないか？」

「……私には…よくわかんない」

そうとしか答えられない。今日は受け身のつもりでここに来た私。
何を言われてもリュウヤに従うつもりで来た私。

——でも…

でもリュウヤったら何でそんなこと私にフルんだろ？
それもそうだよなんて、私が言うとも思ってるんだろうか？
それとも単に同意を求めたいだけ？

「安佳里には悪いけど、俺はそう思っただ。今までずっと安佳里のことを遠くから見て来た。俺なりにできることもしてきた。だからもう俺はこれで満足なんだよ」

「…満足？ ホントにそれで？」

「ああ。なんていうかその…俺はまだガキみたいな恋愛をしていたっていうかさ」

「……」

「つまりその…なんかこっ恥ずかしいな>(; ^ _ ^)」
じれったいけど、リュウヤの言葉を待つしかなかった。一体何がしたいのか？

「あの…あのな。安佳里は俺の心の支えだったんだ。俺にとっては女神様みたいなもんだ」

リュウヤのとんだ買いかぶり。私なんて女神とは似ても似つかない女。

人を正しい方向に導くこともないし、優しさ溢れる女でもない。その逆に、憎まれ愚痴なら何度でも叩く。セフレとも遊びまくる。

「リュウヤ。それは間違ってる。私は絶対リュウヤが思ってるような女じゃないよ」

なぜかここは自信を持って言えた。言っておけなければならなかった。

なのにリュウヤの口から、いとも簡単に返答が。

「わかってるさ」

「えっ？」

「そんなのわかってる。だからもう言っな」

「だって…」

フェンスに寄りかかったまま、首だけ私の方へ振り返るリュウヤ。

その顔は真顔ではなく、ほころびかかっているような表情で、そして優しい眼差しで私を見つめていた。

「今のままの関係でいよう。俺に今のままの気持ちでいさせてくれないかな」

「……それでリュウヤは本当にいいの？」

「なんていうかその……仮に安佳里と同棲をしたとしたとするだろうか？」

「うん……」

「そんなの全く想像つかないんだ。安佳里と現実の生活をするってことがさ」

「私って、生活感のない女に見える？」

「そうじゃない。そうじゃなくて、俺が安佳里に対して生活感を感じたくないんだ。永遠の彼女であり、女神であり。」

「そんな恥ずかしいよ。私、カリスマモデルでもナイチンゲールでもないんだよ」

「ん？…ナイチンゲールなんて誰だ？」

「ごめん。例え間違えた。マリア様だった……」

「それもよくは知らないけど、ニュアンスはわかる」

お互いあまり「学」がないから、下手な例えを言っているとボロが出るし、説得力にも欠ける。

でもここは、私がリュウヤの意見に折れるしかないようだ。

それに最後の最後に言われた言葉がコレ。

「安佳里は俺をずっと思い続けてくれたわけではないだろ？俺の一方的な片思いを最近になって受け止めてくれただけだと思うんだ」
「違うよ。そんなんじゃない。でも……もしもそんな理由だったとしたら……ダメなの？」

「ダメとかそういうことじゃない。むしろその方がいい。お互いの細かい^{ほんのう}煩惱なんて、何も知らない方がいい。今まで通りのカタチで

いられるからね」

こう言われては、もうどうしようもなかった。

煩惱だなんて。まさかここでリュウヤの口からお坊さんの言う単語が出てくるなんて思ってもみなかった。

「わかった。。じゃあ…今までの関係のままってことね。。」

「ありがとう。納得してくれて」

（続く）

53話 普通じゃいられない

一応、納得した形にはなった。そうしないとまたこじれそうだったから。

もうゴタゴタするのもイヤだし、ケンカもしたくない。
でも心の中のモヤモヤはおさまらない。

私が完全に嫌われた方が決着がついたのに。
友達でいようというならまだマシ。

でも、恋人のかたちのまま付き合わないというのは全くの想定外。
リュウヤの判断に従うつもりで来たけれど、素直に割り切ること
なんてできるわけがない。

二人でごはんを食べて別れたあと、私はまたさっきのオアシス広
場の川べりに戻った。

ここのカラオケに来る直前のこと。

風が強くなっていた。寒くはないけど心地よい風でもない。
飛ばされて来た紙屑が、木のまわりで渦を巻いている。

私は小石を探した。

それをつかんで思いっきり川に向かって遠投しなくなったから。
子供の頃、青春ドラマでそんな場面をバカにしていた自分が、今
そんな気分になるなんて。。

「フフ…」

なんか笑えた。

小石が見つかって希望通りのことができたならまだ良かったのに、
いくら探してもアスファルトの地面にそんなものは見当たらない。
腰を丸めて石を目当てにさまよう姿は、きつと落し物でも探して

いるんだろうと人は思うに違いない。

実際はこんなバカみたいなことしてるのに。

急な突風のせいで、飛んできた新聞紙が大きく広がりながら、いきなり私の顔にベタッと貼りついた。

「ふがつ…！」

前かがみだった腰が後ろにのけぞって倒れそうになったけど、そこはなんとかこらえた私。

まわりには若干、3組くらいのバカカップル。

こんな言い方は失礼だけど、今の私には何の縁もない普通のカップルもみんなそう見える。そうとしか見えない。

そんなやつらにクスクスと忍び笑いをされている自分に余計腹が立った。

「もう何よっ！新聞紙のクセにっ！」

人にアタれない分、紙切れにアタる自分が全くもって情けない。場は完全にしらけ、チラ見していた数人のカップルもすでに素知らぬフリ。

とてもじゃないけど、このままの精神状態で家になんか帰りたくない。

ここで私は回想シーンから現実に戻った。

一応は姿勢正しく座っていられる。

でも心はブルーそのもの。むしろ内出血した青紫色のようになりつつあるかもしれない。

まあ、そんなわけで今このカラオケに、意気消沈の私がいるのだ。結局、お酒にもバカにされた形になったけど。

平日は仕事だから、なんとか気も紛らせた。

でも辛いのは週末。得意の妄想も今は苦しいだけ。

自分の都合のいいような妄想は、子供時代は大好きだった。

それが大人になるにつれ、自分に試練を与えるような妄想に変わって来るのはなぜ？

他人はどうなんだろう？

とにかく今の私はそれがイヤで、さゆみを無理やり誘って出かけ、スケジュールを埋めた。

お互い愚痴友だけど、ここ最近は私が彼女を頼りにしてばかり。なのに、意外にも私とリュウヤの関係を深く追及してこないさゆみが不思議だった。

あえて気を遣ってくれてるのかもしれないけれど。

でも、いくらなんでもそんな状態が長く続くはずもなく、毎週末さゆみとショッピングやお茶ばかりして約3か月が過ぎた頃、ついに事態が動き始めることになる。

「安佳里、アタシもうしばらくあんと遊ばない」

（続く）

54話 ゴールへの系口（前編）

どうして？とは聞かなかった。

いずれこうなることは予想していたから。

リュウヤの一件があつてから、さゆみをずっと連れまわして気を紛らわせて来た私。

わざとらしいほどに明るく振る舞いながら、恋愛話とは真逆な話ばかりして。

こんな茶番じみた猿芝居、さゆみはすぐにわかったはず。

なのに彼女はこの3か月、何も聞かずに黙って付き合ってくれた。最初は呆れて聞く気にもならないのだろうと思っただけ、それは私の間違つた認識。

彼女は私を本当に察しているからこそ、何も触れては来なかったのだ。

にも関わらず、さゆみに思いきり甘え過ぎていた私。

そんな私にしびれを切らすのは当然。さゆみの言い分はごもっとも。

「わかつた…ごめんねさゆみ」

これしか言えずにうつむいた私。

昼さがりのお茶の席。対面した二人の間に流れる沈黙。

店内のBGMなんて耳に入らない。

さゆみが紅茶をコクンと喉に流し込む音の方がリアルに聴こえる。

何分このままの状態でいたんだろう？話す言葉が見つからない私。お互いがお茶をすすする動作だけがしばらく続く。

そんな中、ついに口を開いたのはさゆみ。私からしゃべる気配のないことを悟ったからだろう。

「安佳里ってさ、アタシといっても時々ボーツとしてるよね」

彼女に指摘されたことは自分でも前々から感じてはいたこと。

私は集中力と思考力が持続しない。特に悩みや迷いがあると、余計に気が散漫してしまう。

一種の“現実逃避パターン”と言われても仕方がない。

「そうかもしれないけど、今は…違うよ。」

「それはわかってる。今のことを言ってるんじゃないよ」

「そう…」

「アタシが安佳里に言うことはもう何も無いわ。言ったところで前と同じことしか言えないし」

「……」

言葉の返せない私に、さゆみはゆっくりと説明するように話す。

「じゃあもう一度最後に同じこと言うけどね、あんたが行動しないと何も変わらないんだよ」

この言葉には私なりの反論があった。

「行動しないとして…私、ちゃんとしたよ。リュウヤと会って言うべきこともちゃんと伝えたんだから」

「ほんとに？」

「私、頑張ったよ。かなり頑張った。でも…無理だった。」

「やつと言ってくれたね。もっと早く言ってくれたらいいのに。やるだけやってフラれたんならそれでもういいじゃない。昔の安佳里なら次の男を探してたはずだよ」

確かにそう。昔はそうだった。でもそれは外面だけのこと。

そもそも男というものを信用していなかったから、本当に好きな人を探してたわけじゃない。

高校を卒業してからの私と付き合った男たちなんて、いつ別れても平気だった。

もつとこの人のことが知りたいなんて好奇心は更々なく、遊び相手以上の感情も芽生えることはなかった。

でも今は違う。リユウヤは遊び相手じゃない。本当に好きな人。これが恋なんだと思える人。

だから昔のようにすんなり割り切ることなんてできない。

本当はさゆみには一番にわかってもらいたいの、うまく説明する自信がない私。

でも言わなきゃ…

「あのねさゆみ…自己弁護するわけじゃないんだけど…昔の私ってさ、出会いはいつも探してたかもしれないけど、恋は探してなかったんだよね…」

「知ってるよ。それがセフレっていうもんでしょ」

さゆみの即答に驚いた私。知ってるならなぜ…？

「安佳里、アタシが言いたいのはね、あんた自身がどうしたいのか、はつきりと方向性を決めるべきだってことなの」

「方向性…」

「そう。アタシが昔の例を出したのはね、以前の安佳里は決断力にキレがあったことに対してだけ。そして今、またそれが必要な時だってことなの。わかる？」

「んん、それはなんとなくわかるけど…」

「わかるなら、それほど迷うことある？」

やっぱりさゆみには言っておくべきだったかな…

できるだけ自分自身で解決しようと心に誓っていたけどやっぱり

無理。

だいいちこの3か月、さゆみを引っ張りまわして迷惑ばかりかけている。

自分自身で解決しようだなんて、言い分と行動が矛盾すぎる。
やっぱり言おう。私の今の迷いを。
言える相手はさゆみしかいないんだから。

「さゆみ、実は私ね… フラれたわけじゃないんだ…」

やっと彼女の目をまともに見て話し出せた。

「へ？ どういうこと？」

カップを持つ手が止まったさゆみ。本当に驚いたようだ。

私がリユウヤにフラれたと確信していたかのよう。まあそれも当然なんだけれど。

「なんていうかその……彼とはつかず離れずのまま？ そんな関係で
いようみたいな…」

「それ、パンツが言ったの？」

「ちゃんとチビリおぼんつって言うてよ^^； そこ省略したらな
んかへん」

「細かいことは言わないの。で、つまりそれはどういうこと？」

「ん？ なんていうか…」

「友達関係でいようってこと？」

「でもないんだよね……」

「はあ？ 意味わかんない。なんかイライラする」

私はさゆみの口から出たその言葉に真っ先に便乗した。

「そう。そうなの。イライラするの。モヤモヤが消えないのよ。フ
ラレもしないけど、付き合いもしない。お互いよく知らない方が人
のアラを見なくていいんじゃないかって」

それを聞いたさゆみはテーブルに頬杖をついて私をマジマジと見
つめ、

「はは〜ん。なるほどね」と口角を上げた。

「え？なに？なるほどって何がわかるの？」

（続く）

55話 ゴールへの系口（後編）

さゆみが急に歯を見せない謎の笑みを浮かべて私を見ている。
なんなんだろう？何がわかったっていうんだろう？

その表情から伺える自信たっぷりの口調で解説を始めるさゆみ。

「安佳里、あのパンツはさ。ただのいくじなしか、単なる幼稚な男だよ」

そう言ってさゆみは頬づえをやめ、残りのお茶を一気に飲み干した。

「コメンテーターさゆみの批評は辛口ね」

少し皮肉交じりで言った言葉にさゆみも若干気が引けたようだ。

「あ、ごめんごめん。別にパンツをバカにしてるわけじゃないの」「それはわかるけど…」

「まあ聞いて。いくじなしでも幼稚でも、ハッキリ言えることはあいつが安佳里をめちゃくちゃ好きだってことね」

笑みの消えないさゆみの表情。一体その自信はどこからくるのか。

「んっ…ホントにそうなのかなあ…？」

どこまで信じていいのかわからないさゆみの言動。

今の私にはさゆみの言葉が単なる慰めにしか受け取れない。

私のことがめちゃくちゃ好きだなんて…

なら普通は絶対一緒にいたいはずじゃないの？

なんかさゆみは悟りきったもの言いだけど、彼女は神様でも占い師でもないんだし、絶対正しいことを言ってるとは限らない。

「安佳里わかんない？あいつはね、安佳里とまともに付き合ってフ

ラれることが怖いんだよ」

「でも高校時代は付き合ってたんだよ」

「だから尚更なのよ。同じ相手に二度フラれたら立ち直れないほどのショックだもん。ひょっとしたらリリアと別れた後遺症もあるかもしれないわ」

「うゝゝん。。」

「それともうひとつ。アタシがパンツを幼稚だって言ったのはね、安佳里のことを美化しすぎてるんじゃないかって思うのね」

「美化って…どういうこと？」

「パンツにとっちゃ安佳里はお姫様か女神様みたいなもんってこと」
「！！」

すごい…リュウヤが私に言ったことと同じことをさゆみが勘だけでしゃべってる。

「安佳里わかる？あいつの心の中のアナはオナラなんて絶対しないし、うんこもするはずがないのよ！」

熱のこもったさゆみの語調が強かったため、横のテーブルとさゆみの背後のお客さんが振り向いた。

「ちょ…ちよつとさゆみ、声が大きいってばっ」

小声で注意する私にハッとしたのか、横のテーブルのお客さんを見て少し顔を赤らめたさゆみ。

「アタシとしたことが…（＾＾）」

つまり彼女の言いたいことは、リュウヤが判断した選択は、私に対する愛情が強すぎることによるものだという。

いくじなしのリュウヤが、もしも私と付き合い続けてイヤな部分を垣間見たとしたら、保ち続けて来た深い愛情が冷めてゆくのが怖かった。または私に冷めてゆかれるのが怖かったんじゃないか。

これがさゆみの出した見解。確信をついていると私も思う。

言葉は違っけれど、リュウヤ本人も本質的には同じことを言うる。

“結局付き合っちゃったりしたらさ、すれ違いだって必ず生じてくるわけだろ。付き合う前と微妙に思い描いてたことと違ったりしてさ”

私の脳裏にあのときのリュウヤのセリフがフラッシュバックした。
「わかったさゆみ。たぶんその通り。ハッキリさせてくれてありがとう」

「少しは気が晴れた？」

「うん。私決めたよ。たった今」

「おおー！そうそう。クヨクヨしたって仕方ないもの。そうでなくちゃ！」

「うん」

「で、安佳里としてはどう決めたの？」

「私、彼とこのまま距離を置くことにする。それで自然消滅になったとしても後悔しない」

「——は？」

きつねにつままれたようなさゆみの顔。開いた口がふさがっていない。

私、何かおかしいこと言ったかな？そんなに変なこと？

「そんな顔しないでさゆみ。私は本当にもうやるだけやったの。これ以上は何もできないし、何もしたくないの」

「んーそつかあ…そう考えちゃったんだ」

明らかにガッカリした様子のさゆみ。

「そんなにかかしい？彼の意志どおりにしちゃいけないこと？」

「別にいけないわけじゃないけどさあ……あともう一步なのに惜し

いなあって」

「そんなことないよ。惜しいだなんて…」

「惜しいよ。所詮無理な恋愛なら諦めもつくけど、安佳里の場合みすみす目の前の恋を諦めるようなもんじゃない」

「悪いけど私はそうは思えない。これ以上私が動くとしつこすぎるだけのような気がするの」

「でも安佳里…」

「あらためてこんな形の恋愛もアリなんだって考えてみてもいいかも…いえ、考えるべきなのかも…」

「ん~~~~ん………」

さゆみが考え込んでしまった。座席の背もたれに寄りかかって腕組みをしながら目をつぶっている。

さながら体育会系の男監督のよう。

そして彼女はそのままの状態で、吐くため息と同時に言葉を漏らす。

「はーっ…ゴールは近いのになあ…絶対近いはずなのに…」

(続く)

56話 キレルしかなかった

やっぱり一番落ち着くのは自分の部屋。

妄想ばかりしてる部屋だけど、冷静にじっくり考えられる自分に
戻れる。

さっき帰宅するまでは決してこうじゃなかった。

興奮冷めやらず家に駆け込んだ私。

それが歓喜の興奮ならどれだけ嬉しいことだろう。
でも結果はその全く逆。

そう…私はさゆみに逆ギレしてしまった。

大切な親友に食ってかかっちゃうなんて、なんてバカなことをし
たんだろう。

いつも部屋に戻ってからは後悔することばかり。

後の祭りの繰り返しばかりで学習能力も何もない。自分でも呆れ
るほど。

これだけアドバイスや助け舟を出してくれるさゆみには感謝すべ
きなのに。。

そして私はまたまたベッドの上でフラッシュバックの世界へ溶け
込んでゆく…

自分なりの結論を出して、そろそろ店を出ようかというときにそ
れは起こった。

「ねえ安佳里。アンタはとても恵まれてるんだよ。わかってる？」
「恵まれてる？どういう意味？」

立ち上がろうとして中腰だった私たち。

でも私がさゆみの問いに座り直したために、彼女もまた腰を落ち
着けた。

「気を悪くしないで聞いてね。理由がどうであれ、安佳里の付き合った男は数知れずいたわよね」

「だからそれは恋愛っていうんじゃないよ…」

「わかってる。でもね、アンタの悩みはハッキリ言って贅沢よ」

さゆみの違和感のある言葉に驚く私。

「は？なんで？なんで贅沢なの？」

「そう思わない？アタシから見ればね、安佳里は恋愛をオモチャにしているようにしか見えないの」

「そんなことないよ…さゆみにそんなこと言われるなんてショック…」

「ごめん。でもこの際だから言わせてもらっね。私の知り合いの例を出して悪いんだけど、生れてこのかた一度も彼氏のいない子がいるのよ」

「その人いくつ？」

「アタシや安佳里と同じよ。実はいとこなんだけどね」

「ふうん…」

「とっても素直で性格もいい子なの。なのに…なのにただちょっと見た目が男ウケしないというか…」

「ブサイクってこと？」

「アタシはそういう言葉は使いたくないの。偏見は大嫌いだから」

「でもさゆみは男を見る目は厳しいじゃない。イケメンしか受け付けなかったんじゃないの？」

「男は女と違うわ」

何がどう違うのかは聞いても仕方ないし、話題がそれていくのでこれ以上は避けた。

そして話は再び本題へ。

「でね、あの子は子供の頃から妖怪って呼ばれて苛められっ子だったの。本当に可哀そうだった。アタシでさえ世の中なんて理不尽だ

「思ったもん」

さゆみの言いたいことはなんとなくわかったような気がした。でも私は反論せずに、彼女の言葉をじつと聞いていた。私だって人の子。さゆみの気の毒な親戚には同情するもの。

「アタシその子が今どうしてるのか、久々に家に遊びに行ったらね、いきなり部屋で泣かれちゃったんだ…」

さゆみはそのときの光景を思い出したのか、目が潤んでいるように見えた。

「彼女はこう言ったわ。『さゆみちゃん。私、彼氏が欲しいよ…今すぐにでも恋がしたいし、デートもしたい。私にはそんな資格はないのかな？ブスは結婚しちゃいけないの？』って…」

「さゆみはどう答えたの？」

「せつなかつたわ…そんなことない。誰にでもチャンスは必ずやって来るって言う以外何も言えなかったわよ」

「そう…そうよね。」

「だからわかる？安佳里はたとえ恋愛はしてなくてもセフレはいた。そりゃ辛いこともあるだろうけど、気を紛らすことはできた。体の欲求もお互いに満たすことができた」

「……」

「その子にとってはセフレなんてとんでもない話なの。恋愛を侮辱するふざけた話にしか受け取れないはずよ」

「そうかもしれないけど、セフレってふざけた関係ばかりじゃなくて、お互いの空虚な心を慰めてあったりもするんだよ。今はもうやめたけど…」

「そう、それぞれ！」

「???」

急にさゆみの語調が強くなった。

「それを平気でできる安佳里が贅沢だって言ってるの。アタシのい
ところは当然だけどまだバージン。慰めてくれる人なんていないから、
自分で解決するしかないのよ。わかる？」

「自分で解決って…？」

何か余計なことを口走ったかのようにハツとするさゆみ。少し言
いづらそうに口ごもる。

「そんなの…想像すればわかるじゃない。アタシに言わせないでよ」
「わかんないよ…私にはさっぱり…」

そんな鈍感な私にムツとしたさゆみが再び語気を荒げた。

「ひとりエッチよ！」

まわりの席のお客さんが一斉にこちらに振り向いた。これで二度
目。

それに気づいてハツとしたさゆみの顔が真っ赤になっている。
私も恥ずかしくなって自分の頬が少し紅潮してるのがわかった。

テーブルに伏せるように身をかがめ、顔を私に近づけて小声にな
る彼女。

「別におかしいことじゃないわ。24年間彼氏がいないんだもの。
ごく自然なことよ」

「そ、そうなのかなあ…？私にはちよつと…やっぱりわかんない」

「安佳里はそういう必要がなかったからよ。ここが大きな違い」

「なんでそんなことがわかるの？見たの？」

「何を？」

「何をつて…いじわるね。言わせたいの？」

「だから何を？」

「もっつ！ひとりでその…なんていうか…慰める行為？」

「不思議ね。男性経験の多さじゃズバ抜けて多い安佳里がこんなこ

とも言えないウブな子だとは」

「さゆみのバカ…」

この時点での私はまだカチンと来たわけでもなかった。

「アタシ直接見たわけじゃないんだけど、いところが泣き顔を洗いに部屋から出て行ったあと、なにげにDVDプレーヤーを再生しちゃうたのよ」

「そ、それで？」

「なんとそれがAVだったわけ。しかも絡みのシーンばかり。もうアタシビックリしてすぐに停止したわ」

「それってすぐに停止したことになるの？（ - ；」

「とにかくアタシが言いたいのはね・・・」

さゆみが状態を起こして通常の姿勢に戻った。

「安佳里は恵まれてるよ。この子みたいに自分の顔にコンプレックスがあつて、一度も彼氏のできない子なんかたくさんいるわ。でもアタシにはそれが無いんだもの」

「そんなことは…」

「安佳里は可愛いし、自分自身の気持ちひとつで恋愛を成就させることができる。そういう立場にいるのにそれができないでいるだけ」
「……」

「何度も言うけどそれが贅沢ってことなの。人をヤキモキさせるだけでいつまで経っても結果を出せていない。正直、付き合わされているアタシもうんざりなの」

「！……！」

私の頭と胸に衝撃が走った。

さゆみから、こつもはつきりと引導を渡されるなんて…

“もつうんざり”

親友からの決定的なダメだし。ショック以外の何物でもない。
これまでの会話に出て来た単語が私の脳裏を駆け巡る。

“贅沢” 恵まれすぎ” “ふざけた関係” “結果が出せない”

沸々と湧いて来る怒りと苛立ち。

「ちょっと待ってよさゆみ。私ってすごくヒドイ女に聴こえるけど？」

「口が悪かったらごめんなさい。アタシ、安佳里に頑張ってもらいたい。ただそれだけなの」

「そんなこと言われたって…」

「それにアタシの友達の中にはね、病気で寝たきりの母親の面倒を見るために恋のひともできない子もいるわ」

この瞬間、私は一気にキレた。

この時点でも相当なダメージの私に対して、さゆみは更に別な子の例を挙げての決定的なダメだし。

さゆみは私を精神的に攻撃しているとしか思えなかった。

「いい加減にしてっ！」

テーブルを両手で叩いて立ち上がった私。

その音に近くのお客さんたちも気づいてはいたんだろうけど、もう勝手にすれば？というような素知らぬふりをしていた。

今度は私が声を荒げる番。

「私だって子供の頃から辛い思いをしてきたの。さゆみの知り合いの子も気の毒だとは思っわ。けど私の味わって来た苦しみってそんなに軽すぎる？たわいもないこと？」

「安佳里…」

「私が子供の頃から引きずってるトラウマのせいで、どれだけ自分

の恋を台無しにして来たかわかる？恋をした分、その数だけ傷ついて来たのよ！辛くて苦しくてたまらなかった。でも誰も救ってはくれなかったわ！」

「……」

「こんな私って、どうしようもないゲスな女なの？価値のない女？ただ甘ったれてるだけの女？私のトラウマなんてさゆみから見たら『へ』のようなもん？病気の母親の面倒を看てる人から見れば私の苦しみなんか、モノの数には入らないってこと？」

「アタシ、そこまでは言ってな……」

「私だってもうウンザリよ！」

「えっ？」

「もうさゆみの説教も聞きたくない。どうせ私の気持ちなんて軽いものとしか受け止められないなら、わかってもらおうとは思わない！」

「そうじゃなくてね……」

「サヨナラさゆみ」

こうして私は先に席を立ち、一度もさゆみに振り向かず、店を後にしたのだった。

本当にバカな私。もう幾度こう思っただろう？

3か月もさゆみをショッピングやお茶に振り回し、アドバイスの悪態について逆ギレしながら退場するなんて。

やっぱり私はダメダメ人間。人として劣っている。

回想シーンから戻った私は、すぐにさゆみにお詫びのメールを入れた。

返信は30秒と経たないうちに返って来た。

『アタシも言い過ぎたよ。ごめんね。次はアタシから誘うからまた連絡するね』

正直ホツとした。もう絶交なんじゃないかと思ったから。
さゆみとはこのままずっと親友でいたいもの。。

だけど……

だけど彼女のアドバイスを再び実行する自信なんか、今の私には
もう残っていないのが現状。

もうそんな気力すらないんだもの。——ホントにないんだもん。

このまま時に流されて生きてゆくしかないのかな…

こんな世捨て人みたいな考えって、なんかもう人生が終わってる
ような気がする…

（続く）

57話 流される日々の中で

やっぱり社交辞令だったのかも…

そう感じたのがさゆみと最後に会ってから2か月後。

つくづく鈍感な私。失恋したときより重く感じるむなしさ。

親友に社交辞令を言われるようになったらおしまい。それは親友とは言えない。

そもそも愚痴友が真の親友と言えるかどうかも疑問に思えるようになってきた。

相変わらず流される時間の中で無難に過ごして来た私。

今が戦国時代なら、この平穏な何もない生活が何よりの幸せなのかもしれないど、現在はそんな時代じゃないから幸せとは思えない。なぜ急に現代を戦国時代に例えるのか自分でも不思議。

そう考えたときに思わずフツと自分自身を鼻で笑った。

もしかしたら、少しでも自分がプラス思考になれるよう、幸せ意識を高めるよう、脳が勝手に判断したんだろうか？

この2ヶ月間、職場との往復だけで私の社交性は露と消え、休日は丸一日引きこもり。

でもこれはまだマシな方。本を読んだり料理をしたりして、私の習性である妄想壁を避ければ少しは気が紛れる。

けど、さゆみと連絡を取らなくなってから3か月目、私の引きこもり生活に追い打ちをかけるような出来事が起きた。

これにより、私の心に更なる深いダメージが。。

——ギンゾーが死んだ。

私が毛嫌いするほど元気がとりえのギンゾーが。

母の話で、入院して5か月目だと聞いたとき、瞬時に胸がズキンとした私。

つまりギンゾーは、家で私と一緒に夜ごはんを食べた2日後に入院したということ。

今思えば、もうあの時は入院する覚悟を決めて私に会いに来てくれたように思う。

もしかしたら自分の寿命も知っていたのかもしれない。いえ、おそらくそう。

だから父や母と連携して、あんなシチュエーションを用意してくれたんだ。

それなら全てツジツマが合う。

そう思うと、私は込み上げてくる涙を抑えることができなかった。流れる涙をぬぐいもせずに…

それでも声には出さず、ただひたすら唇をかみしめて泣いていた。私の認識していた以上にこんな深刻な事情があったなんて。

そんな大病にかかっているとは思わなかった。

最初からわかっていたら私だってもっと…

でもそれに関しては、ギンゾーが父と母に強く口止めしていたらしい。

キモくて汚ならしくて、常識に欠けているオジサンだと思っていた人が、人一倍律儀な人だった。

私にとっては迷惑行為でも、ギンゾーにとっては精一杯の愛情表現。

まだ元気なうちに、少しでもそれがわかってあげられたなら…

せめてもの救いは、最後の晚餐と言えるあの夜に、一緒に食事ができたこと。

それが本当にせめてもの救い。。。

そんな思いからか、ギンゾーの葬儀・告別式には後悔と謝罪の気持ちしかなかった。

人前で声に出して言う勇氣はなかったけど、自分自身の心の中で謝り続けていた。

臆病でズルイ自分を恥じながら…

けどもう遅い…遅すぎる。生きてるうちに言えなかったんだもの。この20年以上、ギンゾーを無視し続けて来た私。恨みさえもした。

愛情表現が少し過剰だっただけの叔父なのに…

ただそれだけなのに…

詫びても詫びても足りない気がして、身内の者が首をひねるほど、私はギンゾーの棺の前で放心状態になっていた。

どれだけ月日が過ぎたんだろう？

今日が何月何日だなんて、何の興味もなかった。

平日は出勤。土日は会社に行かない。ただそれだけの認識で過ごしている。

季節はすっかり秋めいて、夏物からの衣替えすら全くしていなかったことに気づく始末。

半袖で出歩く人もまばらになっていく時期に、私はそのまばらな仲間になっていた。

同僚に指摘されて『私、暑がりだから』というのは白々しい言い訳。

毎日通勤しているのにも関わらず、空気も読めないどころか、まわりのファッションにさえ気付いていないなんて心の病は重症だ。

ある日の土曜。半日ばかりで衣替え作業をした。

余計なことを考えまいとするせいか、予想以上に作業が捗り、自

分でも驚くほど。

私のオハコでもある“妄想の扉”が開けかかる瞬間も何度かあったけど、そこは自制心でなんとか防ぎきった。

意外にも、こんなときに自制心が働くのには理由がある。

今の現状で私がこれ以上、妄想の世界に入り浸りになれば、明らかに精神障害になるという恐怖心が湧いてきたから。

ここで落ちたら私はもう終り。私自身というものが存在しなくなる気がする。

でも、一体いつまで耐えられるだろうか？

いつまで今の精神状態が保てるだろうか？

もうセフレを求める気には到底なれない。

そんな矢先、ケータイに着信音が。しかも久々に聴く音。

私がさゆみからの受信メールに設定した曲。

h e l l o w a g a i n ~ 昔からある場所 ~ (M Y L I T T
L E L O V E R)

ちょっと古いけど大好き。この曲もさゆみのことも。

” 安佳里元気？今度の木曜の夜、空けといて。約束通りアタシから誘うわ。いい返事待ってる ”

突然のお誘いメールに驚いた私。

何より“約束通り”と文面に載ってること。

さゆみはちゃんと覚えてくれていたんだ。社交辞令じゃなかったんだ。

そう思うと少し心が和んだ。嬉しさがじわじわと時間差で込み上げて来る。

今度の木曜…土日じゃないなんて珍しい。一体何日なんだろう…
私の部屋にはカレンダーがない。すぐにケータイから確認してみ
ると…

——あ！この日って、私の誕生日だ…

（続く）

58話 思いがけないところへ

さゆみからのメールに返信するには若干の躊躇があった。

彼女が平日の夜にわざわざ都合をつけて誘って来るのは、明らかに私の誕生日のために考えてくれていることだと思う。

それはとても嬉しいことだし、迷惑だなんて思わない。

さゆみだって当日は仕事帰りできつと疲れてるはず。

むしろこんなグダグダの私にここまで気を遣ってくれるさゆみには、いつか倍返しでお礼をしなきゃいけない。

でも一体、それはいつの日になるのか、本当に実現できるのかは疑問だけだ。

そんな感謝すべきさゆみに、私が返信を渋っていたのにはもちろん理由がある。

可能性は薄いことはわかってる。でもバカな私はその可能性を捨てきれないでいる。

もしかしたらその日、リュウヤから誘われるのではないかというかすかな期待。

その可能性が1%でもあるのなら、さゆみの誘いと重なったらマズいことになると思ったから。

どうしようか迷ったあげく、わたしが起こした行動は、単にリュウヤにメールで確認することだった。

たかがこれしきのことでも、今の私には大変な勇気だし、正直恥ずかしかった。

なるべく自分の誕生日のことを言わずに、相手の予定だけを聞くなんて不自然きわまりないこと。

逆に“私の誕生日忘れてない？”とアピールしてるみたいでイヤだった。

送ったメールに返信が返ってきたのは約1時間後。

その返事はあっけなく、どうかしたのか？などという気にした疑問符は全くなく、

“ごめん。その日は都合が悪い”の一文だけ。

この瞬間、わずかに持っていた期待もなくなり、緊張の糸が切れて気持ちが萎えた。

——— だけど…

だけどこれで迷うことがなくなったのも事実。

そう。さゆみを裏切らないで済むんだもの。これで良しとしなきゃ…

5分後、私はさゆみにお誘いメール承諾の返信をした。

ダラダラしていればいつも時間が長く、何か予定を入れたらその日はすぐにやって来る。

私のバースデー当日もそんな感じでおとずれた。

午後6時。仕事帰りに待ち合わせたさゆみと私。

久しぶりの対面なのに、まるで毎日会ってるかのような軽い挨拶。

「Hi安佳里。じゃ行こっか」

会うなり彼女は早歩きで私を誘導しながら先に進む。

不思議に思った私は、そんなさゆみに問いかける。

「ねえさゆみ。なんでそんなに急いでるの？どこかのお店でも予約してるの？」

彼女は私にちょっと振り返っただけですぐ前に向き直り、歩くペ

ースを落とさずに答えた。

「予約っていうか…時間がちょっとね」

「遅れたらキャンセルされちゃうとか？」

「そうじゃないけど、早く行ってゆつくりした方がいいでしょ」
「まあそうだけど…」

今いちしつくり来ない理由だけどそれ以上聞くのはもうやめた。
行ってみればわかることだし、早歩きでしゃべるのもきついし。

5分ほど歩くとさゆみがメイン通りから脇道に折れた。

細い路地に入ったその一帯は、この日の営業が始まったばかりの
スナックやカラオケ店。

そしてその合間にコンビニや仕出し弁当。

または女性専用か男性専用なのか見分けがつかないサロンのよう
な店も点在している。

もちろん私がこんなところを歩くのは初めて。でもさゆみは迷うこ
となくスイスイと先へ行く。

「ねえさゆみ。まだ着かないの？足痛いよ」

さゆみはローヒールだからマシに歩けるけど、ミドルヒールの私
にはやっぱり無理。

足に疲れを感じたところでついにボヤいた私。

「もう着いたよ。ここ」

10メートルほど先を歩いていた彼女が立ち止まって一軒の店を
指さした。

“カフェバー 雲の巣”

ネーミングだけで推測すると、こ汚くて魔女でもいそうな感じの
店に思える。

けど漢字が“雲”で、虫の“蜘蛛”じゃないところがまだ救い。

それともうひとつ、私が入口で目にとまったものがあった。

それは明らかに手書きで書いたポスターが1枚、ドアに堂々と恥
ずかしげもなく貼られていたから。

“ 本日限定！楽しくなかったらお代は一切いりません ”

私がポカンとその貼り紙を見ていたもんだから、苛立つさゆみに
せかされた。

「 安佳里、何してんの。入るよ早くおいで！ 」
「 う…うん。 」

腑に落ちないままに、私はさゆみの後を追ひ、謎の店内へと入っ
て行く。

それでも私はまだ考えていた。

—— 楽しくなかったら…おいしくなかったらの間違いじ
やないの？

（ 続く ）

59話 謎のお食事会

さゆみがバッグからチケットらしきものを2枚、カウンターの店員に差し出した。

チラッと見えた感じでは、これも手書き風の字体のよう。
案内係の女性に誘導されて、私たちは奥の席へと通された。

席はほとんど丸いテーブルで、四方に4人は座れる大きさ。

他はバーカウンターに7、8人分くらいのスペースで、すでにそこは満員。

私とさゆみがテーブルに落ち着いた頃には、全席がほとんど埋まっているようだった。

と言っても、それほど大きな店ではないから、満員でも30人そこそこ。

「この店知ってたの？」

私がさゆみに疑問を投げかける。

「ううん。初めて」

あっけらかんと返事をするさゆみ。

「じゃあなんでチケット持ってたの？」

「数日前、街頭でこのタダ券を配ってた人からもらったの」

「タダ券って…ここにいて楽しくなければって条件でしょ？入口の貼り紙見なかった？」

「楽しくないフリしてればいいのよ」

「あ、そう…（^ー^;）」

「タダに勝るものなし！見なさいよこの繁盛ぶり。普通、こんなさびれた路地裏の店なんか満員御礼になるはずないじゃない」

「ちよつとさゆみ、聞こえるってば…（^□^;A」

「いいのよ。どうせもう来ないから—*、m（」プ

私の疑問は増すばかり。

バスデーのお祝いに、二度と来ない店に親友を連れて来るもの？
しかもタダかもしれないっていうケチ臭い理由で。

そんな私の内心をよそに、さゆみの顔は微妙にほくそ笑んでいて、
なぜか意味深。

「安佳里、アタシがおごるから好きなもの注文して」

「タダにするって言ったじゃない^| ^;」

「万が一の場合よ。万が一」

何が万が一なのかわからないけど、さゆみのありがたいお言葉に
甘えることにした。

意外や意外。この店のメニューはなかなか充実していて、チョイス
するのに目移りするくらい。

「安佳里、迷うんだったらみんな頼んじゃえバ？アタシと半分ずつ
食べればいいんだし」

そう言われたところで食べきれるはずもないけど、少しは気が楽
になった私。結局頼んだものがこれ。

アンチョビとモツツアレラチーズのトマトソースピザ

じゃがベーコンのマスタードソースピザ

トマトソースパスタ

カルボナーラ

野菜ときのこのデミグラスソース

海老とブロッコリーのタルタルサラダ

チーズ3種盛り合わせ

シャンパン・ロゼ

「ちょっと欲張り過ぎかなあ？さゆみ手伝ってね」

「これくらい平気平気。かなり絞った方じゃない安佳里」

「そ、そう思う？　^^;」

「あとでお酒も追加しましょ」

「私、シャンパン一本あれば充分だけど」

「こんな子供だましょ。乾杯の音頭に過ぎないわ」

「……^|^;」

そうだった。さゆみは胃下垂で大酒飲みだった。特に大食いはお手のもの。

私の後始末はさゆみがきれいにペロリ平らげてくれる。

私たちは先に出されたお冷やを飲みながら、この薄暗い部屋の観察をしていた。

今頃気づいたことだけど、丸いテーブルがランダムに並べられた先には、小さなステージーらしきものがあって、中央にスタンドマイクもセッティングされている。

たまに何かジャズ演奏でもするんだろうか？　でもなんか変。

舞台なんか用意するよりも、グラントピアノでも置いて、食事をしながら演奏を聴いてる方がよっぽどムードが出るのに。

そんなことをさゆみに言つと、「まあそうだよねえ」とそつけない返事でよそ見をしている。

と、そのとき。バイトらしき若い男の子が、私たちの席の前に頼みもしないものを運んで来た。

「えっ？　何これ？」

とびつくりする私より、もっと仰天したのはなぜかさゆみの方だった。

「ちよつちよつちよつと〜！　何で今持ってくるのよバカ！　引つ込めて早く！　ほらっ！」

「は？　えっ？　まだ…でしたか？」　困惑する男の子。

「タイミングが違うのよ！　早く下げてっ！」

「は、はい…すみません」

そう。彼が持つて来たのはバースデーケーキ。直径20cmくらいの生クリームたっぷりなケーキの円周には、カラフルなキャンドルと苺が隙間なく並べられ、その真ん中に文字の書かれたホワイトチョコのプレートが1枚。

“happy birthday あかり”

更にケーキの平面には直接デコペンで書かれた英文が…

明らかに素人が書いたものだとなるヨレヨレのアルファベット。

嬉しさと衝撃と疑問が入り混じった感情で、私の心が揺れた。

さゆみがこんなことしてくれるなんて、マジで予想もしてなかった。

なのに……

「安佳里ごめん。今見たのは忘れて。見なかったことにして。ね！」
「???」

驚きと同時に不思議に思えてならないさゆみと店員のやりとり。せつかく持つて来てくれたものをなぜ引つ込めさせるの？タイミングって何？

私は問いかけずにはいれなかった。

「さゆみ、私よくわかんないんだけど…」

「今はわかんなくていいの」

「もうバースデーケーキってわかつちやったもん。引つ込めなかったって良かったのに…」

「その他にも意味があるのよ。見たでしょ」

「見たって……ひょっとしてあの英文？」

「お願い！だから見なかったことにして！」

なるほど。わかった。さゆみが焦っていたのはそのことだったんだ。

確かに私もあれを見た瞬間は動揺したけれど、ちょっとしたジョークだと思えば何ともない。

さつき、ケーキの平面にデコペンで書かれた言葉。

“M a r r y m e ”

そのままメアリーミーと読めば決して意味をなさない。

“r”が1個抜けているのは大目に見るとして、その意味に衝撃を覚えた私。

“M a r r y m e ”私と結婚しましょう。

一体、私はどう解釈したらいいんだろう？

さゆみが私のことを？この長年の親友が、実は同性愛者だってこと？

考えれば考えるほど、パニックっていくのが私の欠点。

「さゆみ…私、どう答えていいか…」

「別に答えなくていいから」

「私ね…さゆみのこと大好きだよ。親友だっと思ってる。ホントだよ」

「アタシもだよ。安佳里のことが好きだから今日誘ったんだし」「う…」

私は言葉に詰まってしまった。

“安佳里のことが好き”

そう言ったさゆみの言葉が耳に響いて心に重くのしかかる。いけない。このままじゃ話しがこじれそう。

今のうちにハッキリとした姿勢は見せておかないと。今のうちに…

「でもねさゆみ。私…私その…レズじゃないし」

「――11（　　；）――1」

さゆみが目を丸くして、まばたきをバシャバシャと数回。
アメリカ人が「Oh!」と叫んだときの口の形。

――そ、そんなにショックだったなんて……（　　）

（続く）

60話 名「レスビアン」

「あのね安佳里。アンタすっごく勘違いしてるよ」

「えっ？」

「普通そう思わないでしょ？アンタ天然にもほどがあるわよ」

「なんか真っ向から私の予想を否定され、戸惑いと恥ずかしさが交錯する。」

「……………ごめんさゆみ。私の頭じゃそうとしか思えないの。わかんないから教えてよ」

「そりゃ天然要素たつぷりの私だけど、まさかこの場で指摘されるなんて考えてなかった。」

「さゆみが私の表情をマジマジと感心しながら覗き込んでいる。」

「しっかしよくそんな発想できたわね。アタシがレスビアンなわけないでしょ」

「だって…普通にそう思ったんだん。ホントに違うの？」

「（ノ——）ノコケツ！これだもの（；・ー・）」「3 フウ」

「なんだかバツが悪くなった。」

「私だって勇気を振り絞ってこんな言いづらいこと言ったのに。恥ずかしいのを承知の上で言ったのに。」

「私はすぐに浮かんだ疑問について問いただしてみた。納得できる説明がほしいもの。」

「じゃあ聞いてさゆみ。だったらあのケーキの文字の意味は何だったの？」

「私がそう言うや否や、矢継ぎ早に出てきた彼女の言葉。」

「だから見なかったことにしてってさっきから言ってるでしょ！」

「さゆみがイラッとしたようだ。語調も強いし、ちよっと怒っているような顔が怖い。」

「だってわかんないんだもん。怒る前に教えてくれてもいいじゃない」

私だってこのまま大人しく引き下がれない。

さゆみがチラッとケータイで時間を確認した。

「時間ね…」

また意味不明なことを口走るさゆみ。なぜすぐに教えてくれないんだろう？彼女はそんな秘密主義じゃないのに。

「安佳里、心配しないで。アタシが教えなくてもすぐにわかるわよ」
「???」

その意味を理解する時間は、そう長く待たずにやって来た。

店内に流れるお知らせアナウンス。

「皆様、本日はご来店誠にありがとうございます。お待ち致しました。本日限定・スペシャルステージでございます」

何のことがピンと来なくて、そっとさゆみに耳打ちする私。

「お待たせって言ったって、何が始まるのか知らないのにおかしいよね？」

するとさゆみはキョトンとして言い放つ。

「ライブだよ。チケットに書いてたじゃない」

「私、チケット見てないもん」

「私がカウンターに出したとき見たでしょ」

「あんな一瞬で何がわかるのよっ！」

ちよっとイラッときた私。でもさゆみはあっけらかんと、

「ああ、そうだったっけ」と軽く受け流すだけ。

「もっつ！」

アナウンスは更に続いた。

「これから当店の特設ステージにて、本日デビューのお笑いコンビが登場してネタを披露します」

私は小声でさゆみに囁いていた。

「初舞台の芸人さんが会場の客にウケることなんてあり得くない？」

「バカね。それがいいのよ。面白くなかったらお金払わなくて済むんだから」

「あー、なるほどね。そう言う意味だったんだ」

「そういうこと」

「でもさあ、どんなコンビが知らないけど、なんだか気の毒ね」

「・・・」

店内スピーカーからのアナウンスがコンビを紹介する。

「それでは登場してもらいましょう。“もちドラゴン”のお二人です！」

会場から形式的な軽い拍手に迎えられ、ステージの隅から今にもはちきれんばかりのぴゅぴゅちなスーツを着た超肥満の男性が現れた。

これほどの肥満体型な人を見たのは、リュウヤのアパートでモッチーを見て以来…えっ？ええっ？

私は驚きのあまり、テーブルから立ち上がってしまった。

私たちのテーブルはステージから一番遠い位置だったから、突然立ち上がってもまわりは誰も気づいていない。

——モッチー本人じゃないの！

ステージのモッチーは、予め用意されていたイスに座って演技を始めた。

「そろそろ予約の相談者が来るころだが…」

と言って間もなく、お約束のように次なる人物が登場。

「あのお、すみません。恋愛のカウンセリングをされている丸餅先生でしょうか？」

突っ立って見ていた私は、更なる驚きで自分のイスにドサッと尻

もちをつくように腰を下ろした。

「リュウヤだ……………」

さゆみの視線を感じた。彼女はおそらくこのことを知っていたに違いない。

だからきつと私に微笑んでくれるのかもしれない。
でも今すぐには彼女の方へは振り向けなかった。

だって…だって今の私は数ヶ月ぶりで観るリュウヤに視線が釘付けだったから。。

それにしても、もちドラゴンだなんて……………」

（続く）

61話 ただ見つめて。そして見入って

リュウヤはもうパンツをかぶっていなかった。

他のかぶりものもせずに素顔のままです。

お客さんは芸人“チビリオぱんつ”の素顔を知らないから、当然この場もそれに気づかれることはない。

これは今のリュウヤにとって本当に都合が良いこと。

リリア騒動で、世間からのバッシングを受けることなくネタを披露できる。

私の思いこみかもしれないけど、今のリュウヤは自信を持って伸び伸びと演じてるような気がする。

その上、彼の心情を最も理解しているモッチーとコンビを組むのはまさにベスト。

今まで芽の出なかったモッチーにとっても、リュウヤと共に心機一転、出直すチャンス。

私はなんだかわくわくして来て、最初の驚きから徐々に二人のネタを真剣に見入るようになっていた。

この二人のネタの面白いところは、巨体のモッチーには到底ミスマッチな恋愛カウンセラー役。

どう見てもそうは見えないところが、忍び笑いを誘う。

リュウヤ「てつきりカウンセリングしてくれる先生は女性だと思ってました」

モッチー「バカですねー。私が女性だったら、あなたは私に恋しちゃうかもしれないじゃないですか」

リュウヤ「そんなこと、みじんも思っていないし（＾ー＾；）それにバカって…」

モッチー「さて、ザレゴトはここまでにして本題に入りましょう」

リュウヤ「ザレゴトだったんですか（「」；」」
モツチー「で、どんな恋愛でお悩みなんです？」

リュウヤ「あ、えっとですね。まあその…好きな彼女がいるんですけど…」

モツチー「ちよつと待って下さい。それって女性？男性？」

リュウヤ「だから彼女って言ってるじゃないですか」

モツチー「この時代、彼女と言っても女性とは限りません」

リュウヤ「あー、僕はそっち系じゃないんで」

モツチー「なるほど。ではノーマルということですよね？」

リュウヤ「念を押すまでもないと思うんですけど…（「」；」」

モツチー「まずはそれが大事なのよ。あなたはその彼女に自分の気持ちを伝えたのかしら？」

リュウヤ「ちよつと先生、なぜ急に女言葉になるんですか？（「」；」」

モツチー「女性に対するお悩みなら、女性の立場からカウンセリングするのが常識なのよ」

リュウヤ「でも先生、マジ気持ち悪いんですけど（「」；」」

モツチー「もうこの子だったら…人を見かけで判断しちゃダメって言ったでしょ！」

リュウヤ「言ったも何も初対面なんですけど。それに何で子供扱いなんですか（「」；」」

モツチー「あのね、漫才してるんじゃないんだから、いちいち突っ込み入れるのやめてくれない？」

リュウヤ「あー、僕は一体どうしたらいいんですか？」

モツチー「だから気軽に相談してくれればいいのよ。女の立場から答えるわ」

リュウヤ「先生は多重人格者なんですか？」

モツチー「バカなこと言わないで！本気で演じてるだけよ。患者さんのためにね」

リュウヤ「患者のためを思うなら、ドン引きするんでやめた方が…」

モッチー「なんですって?! そんなこと言われたの初めてだわ」

リュウヤ「誰も言う勇氣がなかったただけかも^^;」

モッチー「こんなに完璧な仕事してるのに?」

リュウヤ「だいいち先生はすぐに女性になりきれんんですか?」

モッチー「何よ今更。アタシはこれで20年ごはん食べてるもの。

ちよつと食べ過ぎちゃってるけど体重は140キロでキープしてるわ」

リュウヤ「ひやくよんじゅ…(^□^;A」

モッチー「話しが脱線したわね。で、好きな彼女に思いは届いたの?」

リュウヤ「んゝ、届いてるような、ないような…」

モッチー「随分曖昧ね。ところで何か飲む?」

リュウヤ「いえいえ、おかまいなく」

モッチー「アタシが飲みたいの。一人だけじゃ見せびらかしてるようにイヤなの」

リュウヤ「そうは思いませんけど(^―^;)」

モッチー「いいから、何飲む?」

リュウヤ「じゃあ、ウーロン茶とか」

モッチー「やっぱり曖昧ね。まずはそのクセ直した方がいいわよ」

リュウヤ「へ?」

モッチー「気に入らないわ。『とか』って言うのやめなさい」

リュウヤ「いけませんか?」

モッチー「当然よ。絶対ウーロン茶以外のものを持って来なくなるわ」

リュウヤ「な、なるほど…(――)」

モッチー「あなた、たぶんアタシが超おデブだから信用できないんでしょ?」

リュウヤ「はい」

モッチー「(ノ――)ノコケッ!あのね。アタシだって産まれたときはこんなじゃなかったのよ」

リュウヤ「産まれたときに140キロある赤ちゃんなんて僕も見ることありませんし」

モツチー「当たり前でしょっ！たたくもっ！アタシの子供の頃を見せたいくらいだわ」

リュウヤ「別に見なくていいです」

モツチー「あ、そうだ！最近アタシね、小学校時代に埋めたタイムカプセル開けたのよ」

リュウヤ「あー、僕もやりましたよ。それがどうかしたんですか？」

モツチー「何が入ってたと思う？」

リュウヤ「よげんの書とか？」

モツチー「どつかの映画みたいなこと言わないの！」

リュウヤ「じゃあ、新よげんの書とか？」

モツチー「あのね、ちよつとそこから離れてくれない？」

リュウヤ「先生、本題に入りましょうよ」

モツチー「あんたのせいよっ！」

テンポよく、二人のコントが続いている。

私はただ見つめて…そしてかたずを呑んで見入っていた。

（続く）

62話 ノンフィクション・コント

リュウヤ「で、タイムカプセルには何が入ってたんですか？」

モッチー「フッフ…聞きたい？」

リュウヤ「いえ別に」

モッチー「そんなに聞きたいんなら仕方ないわね。教えてあげる」

リュウヤ「あのー…」

モッチー「アタシが小5のときの写真を入れてたの。もうそれはそれは凛々しい姿よ」

リュウヤ「自画自賛ですか（ - ;）」

モッチー「だってまだ体重が80キロしかなかったときですもの」
リュウヤ「小5で80キロ…（ - - - ;）」

ステージでの熱演は更に続いた。

会場内は、大笑いこそしてないけど、クスクスと笑う声はあちこちから聞こえる。

私は自分が笑うよりも、まわりの反応が気になっていて、どうかこのステージが成功するようにと無意識に願っていた。

コントもすでに15分を超えるロングサイズ。

そろそろ終盤に差し掛かって来る頃だと思われた。

リュウヤ「先生、本当にカウンセリングなんかできるんですか？」

モッチー「どういう意味？」

リュウヤ「だって、恋愛相談ってのは、自分の豊富な経験を元に良いアドバイスをしてくれるもんじゃないですか？」

モッチー「それが全てではないけど、まあそうね」

リュウヤ「失礼ですけど、先生のルックスでは恋愛経験豊富とは思えないんですけど」

モッチー「なにを無礼な!!」

リュウヤ「だってモテそうに見えませんか」

モッチー「そこが甘いつてさっきから言ってるのよ！」

リュウヤ「今初めて言われましたけど……^|^;」

モッチー「いい？恋愛経験ってのはね、なにもお付き合いすることが全てじゃないの！」

リュウヤ「はあ……？」

モッチー「モテるだけが経験じゃないわ。アタシには撃沈経験が101回という記録があるもの」

リュウヤ「あんたは武田鉄也か？（-_-;）」

モッチー「アタシにとって輝かしい自慢の記録よ」

リュウヤ「開き直つてるとしか思えません……」

モッチー「この経験がバネになって、アタシの今の地位があるの。わかる？」

リュウヤ「全然」

モッチー「頭悪いわね」

リュウヤ「すみませんけど、お願いですから女言葉はもうやめてもらえませんか？何だかマツコデ。ツクスがしゃべってるみたいで」

モッチー「そう、その例え。アタシは昔からそうやって肥満の有名な人に例えられてバカにされて来たのよ」

リュウヤ「僕は肥満をバカにしてるんじゃないで、オカマのマネをやめてほしいだけなんですけどね」

モッチー「あなたはわかってない！」

リュウヤ「は？」

モッチー「この異性のキャラができるからこそ、アタシは男女両方の失恋の辛さや苦しみが充分にわかるの！モテない人の切実な思いや、消極的にならざるを得ない人の心の痛みがね」

リュウヤ「よくわかんないけど、きっとそれは一理あるんでしょうね……（-_-;）」

モッチー「そういうことね」

リュウヤ「じゃあそろそろ僕の悩みを言うことにします」

モッチー「つべこべ言わずに早く言えば良かったのに。ここまで20分経ってるから2万円よ」

リュウヤ「ガ ΣΣ(。D ;) ン!!時間制ですかっ?!」
モッチー「基本1分1000円よ。リーズナブルでしょ?」

リュウヤ「ボツタクリじゃないですかっ (^ □ ^ ; A」

モッチー「いいから早く言いなさい。時間はどんどん経過して行くわ」

リュウヤ「じゃ、じゃあ急いで言います。その…僕の好きな彼女なんですけど」

モッチー「それって男性?それとも女性?」

リュウヤ「それ、さっきも言いました!女性です(、へ、#)」

モッチー「で、その彼女に気持ちを伝えようとして、できないってこと?」

リュウヤ「いえ、伝えてはいるんですけど、僕の本心とは違った伝え方をしてしまったんです」

モッチー「このバカタレがっ!とうへんぼくっ!」

リュウヤ「(、□、;)!!なんでいきなり怒るんですか?まだ詳しく言ってないのに」

モッチー「これが怒らずにいられるかってんだ!」

リュウヤ「先生。キャラが男に戻りましたけど」

モッチー「う…ちょっと茶化さないでよ!大事なとこなんだから!」

リュウヤ「すんませんw」

モッチー「あなたの悩みなんて全然大したことないわね」

リュウヤ「え?どういうことです?」

モッチー「あなたはただの意気地ナシで度胸ナシのクソったれよ」

リュウヤ「ボロカスですね(、ー、;」

モッチー「当たってるでしょ?」

リュウヤ「確かにその通りです。僕は意気地も度胸もないし、お通じも良いからクソったれです」

モッチー「あなたは本心を言うのが怖いだけ。仮に本心言ったと

しても、その言葉に自信が持てない。将来を思うと不安が付きまとう。そう思ってるからでしょ？」

リュウヤ「な、なんでそこまでわかるんですか？」

モッチー「女の勘よ」

リュウヤ「先生は男じゃないですか（――；）」

モッチー「まあそれは冗談として、長年の経験がなせる業ってところね」

リュウヤ「撃沈の経験しかないくせに……」

モッチー「なんですって?!」

リュウヤ「いえ、何でもないです（^□^；先生、僕はどうすればいいんでしょう？教えて下さい」

モッチー「あなたは甘えてる。ブサイクでもないのに言うべきことも言えないなんて最低よ」

リュウヤ「ブサイクでないことが甘えに関係してるんですかね？^；」

モッチー「大ありよ。ブサイクの人間はね、何を言っても人には不快に聞こえるの。聞く耳さえ持ってくれないときもよくあるわ」

リュウヤ「僕は何も言えないタイプだしなあ……」

モッチー「そこが甘ったれだっていうの！ブサイクはね、告白する勇気が人の100倍はいるの。決死の覚悟で告白しないと先に進まない。でも結局はフラれて傷つくのよ」

リュウヤ「それが先生の101回だったわけですね？」

モッチー「アタシのことはもういいの！つまりあなたのような“中の上”みたいな男が、本心を言えないなんて甘ったれもいいところ」

リュウヤ「手厳しいですね；――」

モッチー「顔のいい男はくだらないこと言っても女性にはウケるでしょ。だからあなたは恵まれてるの」

リュウヤ「そうですかねえ……」

モッチー「自分の容姿にコンプレックスがあたり？」

リュウヤ「ないです」

モッチー「ホラみなさい。あなたはそんな立場にありながら心が情けないほど燻くすぶってる。アタシから見ればふざけた話よ」

リュウヤ「なんだかコントじゃなくなつて来たようなんですけど…」

(ハ―ハ・・)「」

モッチー「マジ話コントだもの」

リュウヤ「で、結局僕はどうしたら？」

モッチー「そんなのひとつに決まってるでしょ！あなたの本心を全おおやけて公に伝えればいいのよ」

リュウヤ「公つてどういうことですか？」

モッチー「どうせあなたの性格なら、彼女とひっそり会つてコソコソと誤解を招くような言い方しかできないのがオチ」

リュウヤ「はつきり言いますね。それも当たってますけどハ―ハ・・」

モッチー「だからこの場を借りて、今ハッキリさせるのよ。それが公つてこと。わかる？」

リュウヤ「なるほど。よくわかりました。じゃあ僕…言いますっ！」

モッチー「そうよ！その意気よ！」

リュウヤ「ちょうど今日は彼女のバースデーなんです。それも兼ねて言わせてもらいます」

モッチー「つべこべ言わずにさっさと行動しなさい！」

コントを観ていた私の胸がドクンと鳴り、それから鼓動が急に速くなった。

リュウヤがステージ中央まで歩み出て、観客席を見回し始めたから。

もしかして――—と思つたのもつかの間。

彼の視線はついに私をとらえた。

「安佳里いいいいーっ！ハッピーバースデー！誕生日おめでとうー！」

こちらに向かつて大声で叫ぶリュウヤ。お客さんも一斉に私の方を振り向く。

突然の出来事に度胆を抜かれた私。

まさかまさか——いきなりこの場で名前を呼ばれるなんて。。

（続く）

63話 リアクション

これがドラマなら、予期せぬサプライズの感動に、溢れんばかりの涙を流している主人公がいて、会場のエキストラたちも大拍手でバースデーを祝ってくれているシーン。

でもそれはあくまでフィクションの世界。実際の話、現実っていうのは作られたシナリオのようにはいかない。

リュウヤからいきなり名前を呼ばれたときは、驚きすぎて固まってしまった。

目を見開いて口はアルファベットの“O”の字。に開き、両手はほっぺたの横へ。

誰が見てもヘン顔に見える私がそこにいるだけ。

しかも観客から注目の視線を一齐に受け、そのヘン顔を会場全体にさらしてしまうハメに。

恥ずかしさで自分の顔が火照ってゆくのがわかる。おそらく真っ赤になってるかも。

当然ながら、そこにはドラマのように演出された割れんばかりの拍手なんて存在しない。キョトンとしたお客さんが好奇心の眼差しで私を見てるだけ。

——困った。本当に困っちゃった。

この空気をしらせせないために私はどうしたらいいの？

別に私は芸人じゃないんだから、そんなことまで考えなくてもいいんだけど、冷静さに欠けた私の脳が一人歩きしそうになる。

と、そのときだった。

リュウヤの口から新たな言葉が発せられたのだ。

「安佳里いいー！受け取ってくれええ！俺の気持ちはそれだあああ
！」

——それって何？何なの？

そう思ったのは一瞬だけだった。

気づくと目の前にはさっきのバイト風の店員が、さっきのバース
デーケーキを再び片手に持ち、私たちのテーブルの前でさっきのよ
うに立っていた。

デコペンで書かれた“r”の一字足りない“mary me”も
そのままに。

たださっきと違うのは、ろうそくの灯がもう点いていること。

明らかにバツの悪そうな表情の店員。私と目を合わそうとしない。
そんなことよりも、ここで私は自分の大変な勘違いにやっと気づ
いた。本当におバカな勘違い。

そもそもこのケーキは最初からリュウヤが予定していたもので、
今のタイミングで出されるものだったはず。

それが店員のうっかりミスで先に出されてしまったために、私は
さゆみからのプロポーズだと受け取り、彼女を同性愛者だと思いこ
んでしまったというわけ。

——はあゝ勘違いで良かった。

冷静さを欠きながらも、ホッと胸をなで下ろしている自分もそこ
にいた。

さゆみとはいつまでも親友でいたいもの。そんな関係は信じられ
ないし想像もつかない。

そんな状況の中、焦り気味のさゆみが小声で私に囁いた。

「ほら安佳里、もっと驚いてよっ！さっきも言ったでしょ！これは

見なかったことにしてって」

「…あ」

「今あんたは初めてこのケーキを見たのよ。わかる？さ、早く何か言いなさい！驚いたリアクションでもいいから。早くっ！」

さゆみの強い命令口調に、なぜか素直に指示に従う私。

正直、私に多少なりともM気があることは否めない。

「す、すごおおい！このケーキい〜！ビックリしちゃったあ！」

それはそれはとてつもなく白々しい小学生がやる学芸会でのお芝居だった。

私の横でさゆみがズッコけている。

小声でさゆみに言い返す私。

「しょうがないじゃない！突然そんなこと言われたって私、女優じゃないもの。一度見ちゃってるんだからねっ！このプレートの文字もプロポーズの言葉も……」

——（。○。；）ハッ！！

突然、私は事の重大さに気がついた。

リュ、リュウヤが私にプロポーズしてるってこと！！？

反応が鈍い私の胸に再びズキョンと衝撃が襲った。

「それよそれ！上手じゃないの安佳里。その表情ならOKよ！」

「これはお芝居じゃないもんっ！」

私はステージ上のリュウヤを観た。彼とモツチーはもうネタをしていない。ただじっと私を見ているだけ。

——まさか…返事を待ってるつもりなの？今ここで？

そのときリユウヤが叫んだ。

「安佳里いいい〜！とりあえず、ろっそく吹き消してくれえええ〜！」

Σ（ノ。。（ノあ！

今度はちょっと早合点しすぎちゃったかも。 。 ） - ；

（続く）

64話 どうしてもドラマティック？

ローソクの灯を吹き消したときの大拍手は、嬉しさ反面、戸惑いと恥ずかしさでいっぱいだった。

知らない人たちばかりなのに、おめでとうの掛声がいくつも湧き上がる。

私の誕生日ごときに、こんな大勢の人たちから祝福されるのなんぞ生まれて初めてのこと。

たとえこの場限りのことであっても、決して悪い気はしない。

椅子から立ち上がった私は、丁重に店内のお客さんに何度もお辞儀をして、そそくさと自分の席に落ち着く。

本来なら、お客さんにとってはチンプンカンプンなこと。

お笑いネタとリアルな事実が混ざり合ってるわけだから、どういう事情が呑み込めず、場がシラケてしまうのが普通。

でもそこは機転のきいたリュウヤ。たぶん予定通りなんだろうけど、私がろうそくの灯を消す直前に、彼からのフォローが入った。

つまり、店内のお客さんに向けてのリアルな説明。

「あのー、お客さんには本当に申し訳ありませんけど、これはもうネタじゃないんです」

私の方を向いていた店内のお客さんたちが、再びステージのリュウヤに振り向く。

「もう気づいちゃったかもしれませんが、あっちのテーブルにいる女性はっていうのは……んと、僕のリアル彼女……です。彼女なんです」

さっきまでテンポのいいコントをしていたリュウヤとはまるで別人なしゃべり口調。

でも私にはわかる。確かに緊張はしてるかもしれないけど、実際

はこれが普通。

彼は高校時代から小心者で口ベタ。

この言葉から感じ取れる若干の気弱さが、まさに昔から私が知ってるリュウヤの姿。

どうやらお客さんも事情が呑み込めたみたい。所々から小さな声で『おおー！』という声が聞こえる。

コントのおちやらけていない真剣な眼差しで、噛みながら説明しているリュウヤの姿が、逆に店内のお客さんの心を惹きつけたようだ。

「僕は今日まで、彼女と3か月以上……いやそれ以上かな？ 実は全然会っていなかったんです。でも……その……ケンカしたからとか、そういう理由じゃなくて……」

一気に静まり返った会場。みんながリュウヤのトークに耳を傾けている。

「全ては僕が不甲斐なくて優柔不断だったからで……それに考え方も間違っていました……」

シャイなリュウヤは、お客さんと視線が合わないようにうつむき加減で話している。

けれど、自分の気持ちはしっかりと言葉にノッていると感じた私。「すいません。こんなこと言ってもみなさんには伝わらないですよ。とにかく僕は今日、ある決意をしてこの会場を借りました。

彼女の誕生日を選んで、更にこの日を人生にとってもっと大切な日にしようと決めたんです」

見違えるほどリュウヤがまぶしく見えた。

コントや漫才ネタなら露知らず、素のリュウヤがこんな大勢の前で自分の話をするなんてあり得ないことだし、とても想像できないことから。

「今日、僕がここでライブをすることを、実は彼女に知らせていなくて、彼女の友人に協力してもらい、内密に連れて来てもらいました。今日ここで祝いと決意の告白をするために」

その言葉を受けて、私はすぐにさゆみを見た。

「ねえ、どうしてリュウヤがさゆみのこと知ってるの？」

「バカね。今はそういうことは後回し！さ、早いところソク吹き消しちゃいなさいよ！」

「う、うん…そうね、そうよね…」

こうして会場のお客さんを味方につけたリュウヤの“ハッピーバースデーコール”で、私は盛大な拍手を受けた。

でも事はこれだけでは収まらない。

ケーキに書かれた問題の英文。この返事もこの場でしなければいけないのだろうか？

店員のフライングで二度も見た、至ってシンプルなプロポーズの言葉。

“ m a r y m e ”

直訳すれば“メアリーが私に？”というトンチンカンな意味。別に訳す必要もないんだけど。

この意味が通らないスペル間違いはわざと？ウケ狙い？私の気持ちをほぐすため？

たとえそうだとしても、少なからず緊張が走る私。

このデコペン文字は私とさゆみにしか見えてないわけだし、この場はこれでお開きにして、あとは二人で場所を代えて話した方がリュウヤにとっても良いのでは思ったものの、なかなかどうして、そうは甘くなかった。

それは、ややテンパリ気味のリュウヤが、ケーキに書かれた文字を訳して大声で叫んだから。

「安佳里、俺と結婚しよう！」

嬉しさ反面、戸惑いばかりが先に来る。

お互い大人になってから、まともに付き合いもしないでそのまま3か月以上も連絡なし。

そして、久々にやっと会えたその日にプロポーズだなんて、そんな大事なことを今、軽はずみに返事できるはずもないじゃない。

でも会場は私の返事に注目していた。みんな興味しんしんに私が発する言葉に注目している。

そしてドラマのエンディングのようなセリフを期待しているに違いない。

——ああ…私は一体どうしたらいいの？リュウヤは好きだけど…大好きだけど…

（続く）

65話 胸のうちすべて

ある意味、こんな状況でのプロポーズなんてズルい。

ドラマティックな見せ場を作っておいて返事を求めても、私にノーという選択肢はないもの。

来客の誰もが、ここはイエスに決まってるって確信しているに違いない。

けど、どうしてもすんなり返事を言えない私がいる。

別に私はノーと言いたいわけじゃない。決してそんなわけじゃない。

こういうのって、何かが違うような気がするから。

こんなグズグズなところが私の欠点なのかもしれない。

ここですんなりイエスが言えたら、今までの悩みも後悔も全て解消するかもしれないのに。

ずっとモノトーンで生きて来た人生にカラーがつくかもしれないのに。

そうになったらどんなに楽になることだろう。

理屈ではわかってるのに。。

今、ほとんどの視線が私に降り注がれている。

この静まり返った間を早く埋めないと、どう答えても不自然になる。

——よし、決めた！もう少し時間を下さいって言おう。

私はゆっくりと席から立ち上がり、胸の内で自問自答をする。

——これなら断ったことにはならないもの。そうだね？

——うん、そうそう。

——ホントに？

——もし、ごめんなさいって言ったらどうなると思う？

——バカね。大ブーイングに決まってるじゃない。会場のムードぶち壊しよ！

——そうよね…やっぱこれがベストなのかな？

——悩んでる時間ないよ！さ、早く！

うつむき加減の私。緊張と恥ずかしさで、リュウヤを真っ直ぐみることができないまま返事をしようとした。

「あのお……もうすこ……」

と、言いかけた瞬間、突然リュウヤの声に私の言葉が遮ぎられた。

「安佳里、その前に聞いて欲しい。そしてお客さんにも」

——えっ？

お客さんの視線が私からまたまたリュウヤに移る。

一斉に首が振り返るのを見て、心持ちホッとした私。

知らない人から注目されるのは、有名人でもない私には正直しんどい。

それにしてもリュウヤは一体、何を語ろうとしてるんだろう？

私もお客さん同様、リュウヤに視線を合わせた。

「安佳里ごめん。返事は別に今しなくていいんだ」

リュウヤの表情にはわずかながらの笑みはあるけど、それは明らかに意識的なもので、緊張しているのがよくわかる。

「しばらく会ってもいないのに、安佳里にいきなりプロポーズすること自体、非常識なのは俺の方だし」

静まり返った店内。注文した料理に手を出してる人は、おそらく誰もいないと思う。

「率直に言う。俺が間違ってた。俺が相当のバカだった。どうしようもないほどアホだった」

出だしから自暴自棄のリユウヤ。今の私はただ黙って彼の言葉に耳を傾けるしかない。

そばでは相手のモチーも、3メートルほど後退した位置から真顔で彼を見守るように立っている。

「安佳里、俺は見当違いをしてた。安佳里と距離を置けば、お互い本当の気持ちが見えて来るものだと思っていたんだ。そうすることで相手を思ふ心の深さや度合、必要性を知ることが出来るものね」
リユウヤはひとつ咳払いをして軽く深呼吸をした。

そしてさつきよりもやや顔を上げ、話しの続きを始めた。

「でもこれは…何度も言うけど俺の間違いだった。自分に都合の良い建前にすぎなかったんだ。実際の俺はただの臆病者で意気地なしなのさ。高校時代からずっと安佳里を思い続けて来たのは一方的に俺の方なのに、煮え切らない態度しかできなかったバカな男なんだ。だから、安佳里に幻滅されてるんじゃないかと、飽きられてるんじゃないかと、被害妄想ばかりが膨らんで…」

リユウヤの両手は両脇に下りたまま握りこぶしだった。力もかなり入ってるように見える。

「俺は安佳里に嫌われたくなかった。自分の欠点を見せたくなかった。欠点を知られて冷めた目で見られるのがイヤだった。他の人間ならそんなの全く気にしない。けど安佳里だけは…安佳里だけには…」

感極まったりリユウヤが言葉に詰まった。これは絶対にお芝居なんかじゃない。そんな人を騙す能力なんて彼にはないもの。

「わりい。ティッシュ持つてる？」

リユウヤが背後のモチーにティッシュの要求。ポケットティッシュを受け取ったりリユウヤは、

「ちよつとすみません」

と言って、後ろを振り返り“ブミッ！！”という大きな音を一度だ

け立てて、鼻をかんだ。

「失礼しました。あの…お客さんには退屈かもしれませんが、もうちょっとだけ聞いて下さい。そんなの裏で話せと思われる人も多いでしょうが、これも訳あつてのことなんです。その理由もこれから話しますし、もう少しで終わりますんでどうか勘弁して下さい…」

丁寧に深々とお辞儀をしたリュウヤ。

その反応として意外や意外。店内のいくつかの席から掛声があがる。

「がんばって！」

「最後までしつかり！」

その言葉に後押しされたのか、背筋がピンと伸びたリュウヤは、視線をハッキリと私に向けた。

「俺は自分のふがいなさに後悔ばかりしていた。安佳里の方から好きだと言ってくれた最大のチャンスの時がありながら、バカな俺は疑念ばかり抱いて信じようとしなかった。俺の一方的な気持ちに安佳里が仕方なく折れたただだと思ひ込んでたんだ。それがイヤで俺は逆に安佳里を遠ざけるようになってしまった…」

今、私は初めてリュウヤの心の葛藤を知った。

彼は彼なりに相当苦しんでいたんだと思うとなんだか胸が痛くなる。と同時に自分を恥じた。

「安佳里、俺ってバカみたいだろ？自分では気づかないヘンなプライドがあつたりしてさ。お客さんもそう思うでしょ？」

数人の女性がコクリとうなづくのが見えた。

「そして俺はこんな曖昧な気持ちのままに、リリアと番組の共演がきっかけで付き合い始めた」

リュウヤの口から出た“リリア”という言葉に、会場がざわめいた。

“リリアって横瀬リリアのこと？” “だよね？” というような囁き

があちこちらから聞こえて来る。

けど、それにはお構いなしにしゃべり続けるリュウヤ。

「リリアに対しても失礼なことをしたと思ってる。結局、彼女とも色々な事情があって短い付き合いで終わってしまった。その後の俺の生活はもうグズグズな毎日ばかりだった。安佳里が俺のアパートに来てくれたときも、俺はろくなことが言えなかったような気がする。酔っ払ってたからよく覚えてないけど……」

気づけばリュウヤは話し方がとても上手になっている。

最初は少し噛みながら、しかも自分のことを“僕”と言いながら話し始めていたのが、いつの間にか“俺”に変化している。余計な緊張が解けたのかもしれない。

「その後俺が再び安佳里と会って、距離を置こうと言って別れたあと、俺はこいつにえらい説教をされたんだ」

そう言ってリュウヤは、人を紹介するように、斜め後ろに立っているモッチーに左手を差し出した。

「こいつに言われたよ。ふざけるなって。お前が最初から心に決めてたのは誰なんだ？ って」

後ろのモッチーは、少し照れくさそうに頭をかいていた。

「こいつにはめちゃくちゃ言われたんだ。リリアとは終わったじゃないか。ここで区切りをつけて原点に戻ればどうすればいいかわかるじゃないかって」

私はモッチーを見た。彼は私に対してもリュウヤに対しても、影の強い存在であり、支えになっていることがわかった。

リュウヤの目はずっと私に向けられている。

ただひとつ腑に落ちないのは、ここまでのプライベートな事情を、赤の他人であるお客さんに話す必要があるのかということ。

でもそれは彼がさっき言った通り、承知の上のこと。私は只々、

黙って話を聞くしかない。

「俺が安佳里と距離を置こうとした本心も、こいつは全て見抜いていたんだ。度胆を抜けたよ。あとからじわじわ心にも沁み渡った。あまりに的確すぎてさ。その時こいつはこう言っただ」

——お前はリリアにふられたショックを安佳里さんと重ねて合わせて考えている！そんなんじゃない絶対ダメだ！

シーンとした店内からゴクリという生唾を飲み込む音が聞こえた。それほど会場は、リュウヤの話に誰ひとり集中が切れる人がいなかったんだと思う。

「俺はこいつの凶星な言葉に衝撃を受けた。俺は逃げていたんだ。安佳里と付き合って失望されるのが怖かった。自分に自信をなくした俺は、リリアと同じことが繰り返されるのが怖かった。安佳里に愛想を尽かされたらとても耐えきれないと思った…」

私は潤んだ目で視界がぼやけていた。
人によつてはこんなだらしない男は願い下げだという人もいるだろう。

けど私はそうは思わなかった。

私なんかより、リュウヤの方が何倍も苦しんでいたのかもしれないもの。

私は自分のことばかりで、リュウヤの歩んで来た道のりも複雑な心境も、推し量ることすらしてなかった。

なのにリュウヤは自分を追い詰めるように、人前で自分の欠点をさらけ出している。

全てをさらけ出して、私の審判を仰ごうということなの？なぜ？

私なんて、取るに足らない女。リュウヤがここまでするほど価値

のある女じゃない。

長年慕ってくれてることには感動するほど嬉しい。こんなに思われてるなんて、きつと幸せ者なんだと思う。

それだけに、リュウヤにここまでさせた私は大バカ者だと恥じていた。

このあと、リュウヤが話す最後のメの言葉が、私の決断のときなんだろうか？

返事はあとでもいいと言ったけれど、それではいけないような気がする。。

そう……絶対にいけない。今までどれほどの時間を費やして来たことか。

もう、時間稼ぎは終わりにしなきゃなんない。

——そうよ。ここで、この場でハッキリさせなきゃ！！

（続く）

66話 僕はチビりおばんつです

「ごめんな安佳里。俺はもう躊躇ちゅうちゆしない。だからどうかこれからこの先、いつまでも俺と一緒にいてほしい。俺と一緒に生きて行つてほしいんだ」

お客さんが交互に私とリュウヤの顔を見るようになった。

不思議ともう、私には人に見られる恥ずかしさなど、どこかへ飛んで消えてしまったよう。

そんなことよりも、口ベタなりユウヤが真剣な眼差しで、精一杯の熱弁をしている姿に私の胸は熱くなるばかり。

更に彼の言葉は続く。

「俺を支えて欲しいだなんて都合のいいことは言わない。俺が安佳里を支える。誓つて言える。俺と結婚しよう」

会場から“おおー”という女性の声が、ちよつとずつの時間差であちこちから聞こえて来た。

通常なら、まともにお付き合いもしないでいきなり結婚だなんて、この上なく非常識なこと。

にも関わらず、この時の私には迷いや戸惑いなど、頭の隅にも存在していなかった。

「現実問題、今の俺には稼ぎがない。でも安佳里を絶対に不安にさせたりしない。そのために心機一転この新コンビを結成したんだ。

俺は必ず復活する！復活してみせる！これからはずっと俺と一緒にいよう。俺には安佳里しかいないんだ。安佳里でなきゃダメなんだ」

ここまで言い終わると、肩で大きく息をしたリュウヤ。

二度ほど深呼吸をしたあと、彼は私からお客さん全体に目を向けた。

「みなさんにはお食事もストップさせてしまつて本当に申し訳ありませんでした」

深々とお辞儀をするリュウヤ。再び頭を上げると、さっきとは違った慎ましやかな口調で話し出した。

「みなさんの中には違和感を感じてる人もいるかと思います。カッコつけすぎとか、きつと演技だとか。そう思われても仕方ありません」

今日のリュウヤは今までに見たこともないリュウヤ。

——あなたは一体、お客さんに何を言おうとしてるの？

「口ではいくらでもうまいことは言えます。だからこそ、今日はなるべく多くの人に集まつてもらいたかったです。僕の話聞いてもらいたかったです。つまりそれは、僕が安佳里の前で誓った言葉の証人になつてもらつたためです」

いきなりのプロポーズとはまた別な意味で驚いた私。

リュウヤがそこまで考えて今日のイベントの準備をしていたなんて……

もし今日、お客さんがこんなにいなかったらどうするつもり……

ハッ(。○。;))

突然めつたに起こらないひらめきが働いた私。

そのひらめきが正しいことを証明するかのように、リュウヤが語ってゆく。

「だから僕は数日前に街頭でチケットを配りました。楽しくなかったらお代は一切いりませんと。人を大勢呼ぶための手段です。支払われなかった食事は全て僕が負担することで、こここのオーナーさんにも協力してもらいました」

そう言つてカウンターの方をチラ見するリュウヤ。釣られて私を

含めた数人が彼の目線に目をやると、そこには オーナーらしき人が立っていて、こちらに向かつてほんの軽く会釈をした。

「もちろん、今日は相方とのコントデビュー初披露でもありました。でも、自分のことにケジメをつけてからでないと、僕の再スタートはあり得ないと思いました。だからこういう形をとらせてもらったんです」

まさに、かつてのリユウヤとは見違えるほどの言動。彼は人間的にも素晴らしく成長している。

お客さんに対しては自分のことをちゃんと“僕”と言い換えている。自分の言葉に責任を持って発言しているのがよくわかる。

「ここまで言えば、みなさんも僕の話の内容から薄々気づいてると思います。かつての僕が誰であるかを。隠す必要もないし、むしろ今日は言うつもりでしたので」

ここでリユウヤはひと呼吸整えた。そして後ろ斜めにいるモツチーとアイコンタクトをして、前に向き直る。

「僕のかつての正体は——覆面芸人“チビリおぱんつ”です」

会場からどよめきが起こった。

やっぱりという囁き。ええ？マジで？というような驚き。そんな様々なリアクションが私の目や耳に飛び込んでくる。

そのどよめきが収まらないまま、リユウヤは話し始めた。

「お客さんにお願ひがあります。今後、僕とこいつのコンビが成功してテレビに出られるようになるかわかりませんが、もしそんな時が来て、僕にスキャンダルでも発覚したとしたら、みなさんは迷わず僕を批難して下さい。マスコミにでもプロダクションにでも、お叱りの投書なりFAXなりで、遠慮なく僕をバッシングして下さい。そして今日の僕の誓いを一証人として聞いていたことを明記してください」

そう言ってリュウヤは、事務所の名前をお客さんに大きな声でゆつくりと告げた。

次に彼が目線を向けた先は再び私。

「安佳里、わかってくれたかな？ 優柔不断な俺が口先だけじゃないことを理解してもらうためには、こんな方法しか思いつかなかったんだ。恥ずかしい思いをさせたことは許してほしい」

もう充分だった。充分過ぎるほどリュウヤの気持ち伝わったものの。

あとは私の番――

私は覚悟を決めて同席のさゆみを見た。小さな笑みを浮かべ、無言でコクンとうなづく彼女。

――よしっ！

小さなステージに立っているリュウヤに向き直る私。そしてすつくと立ち上がる。

もうまわりの視線なんて全然気にならない。むしろ勇気を奮い立たせてくれるよう。

「私、あなたのプロポーズをお受けします。どうぞよろしくお願いします！」

（続く）

67話 みんな繋がってた

夜も8時をまわった頃、私とさゆみは場所をファミレスに移していた。

と言っても、さっきの店ではバイキング並みに食べまくったし、
／＼にバースデーケーキまで平らげた。

もちろん私が独り占めした訳じゃなくて、祝福してくれたまわり
のお客さんたちにもおすそ分け。

世の中まだ捨てたもんじゃない。赤の他人なのに“おめでとうござ
います”と言ってワインを注ぎに来る人が3人ほど。

リュウヤとモチーは役目を終え、ステージ裏に下がってしまった
ため、私達のテーブルには来なかった。

店内のお客さんが通常通りの食事タイムに戻ると、まわりから常
にチラ見される視線が気になって、なんとなく居心地が悪い。

食べすぎるほど食べたのも、もったいないからとか、そういう貧
乏的な意味合いではなく、見られているという極度の緊張を振り
払うため。

普通なら食べれなくなる人の方が多いかもしれないけど、私の場
合はなぜか逆に意識レベルが働いた。

そんなさ中、私のケータイにリュウヤからの着信メールが。

“食事が終わったら別な店で飲み直そう”

予想はしていた。だいいち、プロポーズをした本人が、告白後に
満足して勝手に帰るなんてあり得ない。

とはいえ、もう私はお腹いっぱいだし、お酒もこれ以上は無理。

というわけで、今は居酒屋でもなく、バーでもなく、ファミレス
でさゆみとコーヒーをすすっている。

前もって、メールの返信にこの場所を教えたから、もうすぐリュウヤたちもやって来るはず。

その間に、私はさっきまで聞けなかった疑問をさゆみに問いただしてみた。

「ねえ、どうして今日のライブのこと知ってたの？偶然チケットをもらったなんてウソは信じないわよ」

「（＊・・・＊）ウフフフ」

少し酔いがまわってるせいか、いたずらっぽい笑みを浮かべてもつたいぶるさゆみ。

「どうかしらねえ」（「3」）

「もうっ！いじわるしないでよ。こっちはモヤモヤしっぱなしなんだからねっ！」

「おかしいよ、安佳里。プロポーズ受けたくせにまだモヤモヤしてるなんて」

「だからそのことじゃないの。私が今日、あの店に誘われたってことは明らかに計画的なのは明白よ」

「そうよ。だから“あのパンツ”も誕生ケーキを用意してたんじゃない」

「違っつて。そのことじゃなくて、私が言いたいののはね、さゆみとリュウヤはいつから面識があったのかってことよ」

「（「へ」）え？私が？パンツと？そんなのないよ」

「ウソ！こんなの打ち合わせしないとできないことだわ」

「うん。したよ。軽くだけど」

「ほらみなさい」

「安佳里、その言い方、あんたの母親そっくり」

「んもっ！そんなのどうでもいいでしょ！リュウヤと知り合いなの？どうなの？」

別にさゆみを叱ってるわけじゃないけれど、すっきりしない謎にイラッときていた私。

すると、ついにさゆみが回答を出してくれた。

「あのね、確かに打ち合わせはしたけどね、パンツとしたわけじゃないの」

「え？……なに？どういうこと？」

さゆみの意外な言葉に驚いた私。言ってる意味が呑み込めない。

「だから、安佳里のフィアンセじゃなくて、相方のおデブさんちよこつと話しただけよ」

「は？それってモツチーのこと？」

「アハハハ、安佳里はモツチーって言ってるんだ。私はそんな風に呼ばないし」

「知り合いなの？」

「その前に私がなんて呼んでたか知りたくないの？」

「別にそんなの興味ないし」

「ええ！？聞いてよー」

酔ったさゆみはとても上機嫌。

彼女の気分を害するのなんだし、私はそれに付き合うしかない。

「じゃあなんて呼んでたの？ブーちゃんとか？」

「あら安佳里、ずいぶん失礼なこと言うわね」

「じゃあ早く正解教えて（＾|＾；）」

「孝則よ」

「え？それって本名？＾|＾；」

「うん。でも昔からこうだもの。ニックネームが良かった？」

いい加減、求めてる答えを横道にそらされるのもイラッとする。

本当に教えてほしいのは本名でもニックネームでもない。さゆみとモツチーの接点を聞きたいだけ。

そんないぶかしい私の表情を、さゆみはやっと察知したようだ。

「ごめんごめん。ちゃんと言うよ。そんな顔しないの！さっきプロ

ポーズしてもらった女の顔に見えないよ」

「そんなこと言ってたって…」

「あんね、孝則はいとこなのよ、いとこ。前にも言ってたでしょ！身内に芸人がいるって」

「ん〜なんとなく聞いたような気もするけど…でもそれがモツチーだったなんて、偶然すぎやしない？」

「あの二人は元々事務所が同じだったから、新人の頃から仲が良かったみたい」

酔いにまかせて言葉が軽やかになってゆくさゆみ。こんなところは私とは正反対。

私は酔うとますます内にひきこもるタイプ。なんせ妄想族だから。うらやましくも思える、さゆみのなめらかなトークが始まった。

「でね、孝則も全然芽が出ないし、パンツの時代もピークを過ぎちゃったわけでしょ。だからアタシ、一言だけ助言したのよ」

「さゆみが助言？どんな？」

「いつそのこと、二人でコンビ組んでみたらどう？って。半分ジョークのつもりで言ったのに、それが本当になっちゃってさ。もうアタシの方がびっくりよ」

愉快にケタケタ笑ってるさゆみ。

「ふーん、そうだったんだ。」

とりあえず繋がりはわかったけど、なんか隠し事をされてたみたいで、少し心に引っ掛かる。

今日の出来事は、私に対してのサプライズだってことはよくわかるけど、一体さゆみはどこまで関わっていたんだろう？

嬉しさ反面、隠されていた部分が全てハッキリしないと心のモヤモヤが解消しない。

素直に喜べばいいのにと自分でも思う。思うけどできないのが私の悪い性格。

それを解消するには、やはり聞いて納得するしかない。

「ねえ、さゆみはさ、今日のバースデーの演出とか、リユウヤが私にプロポーズすることも、最初から知ってたの？」

さゆみは至って上機嫌が継続されていて、ノリで話すような早い口調でしゃべる。

「全然。私が孝則から今日のイベントを聞いたのが5日前だもん。そして安佳里を連れ出してってくれて」

「ちょ…ちょっと待ってよ。私とさゆみが友達だってこと、何でもツチーが知ってるの？」

「ああ、ごめん。説明不足ね。孝則がパンツとコンビ組むって聞いた時に教えてやったのよ。あんたの相手の彼女は私の親友だってね」「はいはい…そういうことだったのね」

「でも本当にプロポーズのことは知らなかったわ。あの店員が持ってきたケーキの文字を見て、さすがのアタシでも衝撃が走ったもの」「しかも出すタイミングを間違えて、でしょ？」

「そうそう。それぞれ。あのバカ店員ね。大した男前でもないくせに、ろくな仕事もできないなんて最低よね」

「男前だったら許せるの？^ー^」

「当然っ！…まあとにかくね、ケーキが出てくるタイミングだけは聞いてたの。あのコンビがネタを披露して、パンツが安佳里に向かって呼びかけた時だって」

「そうだったんだ。」

「なのに結果がアレでしょ。もうアタシ慌ててケーキ引っ込めさせたわよ。見てたでしょ？」

「うん…そういうことだったのね。」

「そそ。しょうゆのこと」

そう言ってさゆみはテーブルに備え付けの醤油を手にとって私に見せた。

——シーン——

5秒ほど沈黙があつた後、二人して大爆笑。

決して、そんな昔に流行つたギャグなんかにはウケたわけじゃない。絶対にウケないギャグを、あえて真顔でさらつと言いつつ放つたさゆみの大胆さが面白かつたから。

「どう？安佳里。これでスッキリしたでしょ？あんたはもう次のステップを考えなさい」

「うん。。ごめんねさゆみ。そしてありがとう」

「そんな照れくさいこと言わないの。あ、ほら、パンツが来たよ」
私の背後に目をやるさゆみ。その視線を追つて、私も後ろを振り向いた。

そこには、ニツコリと笑顔を振りまくアイドルほどのことではないけれど、それなりの、かつてのリユウヤらしいニヒルな表情で、こちらに近づいていた。

（続く）

68話 偶然と運命

リュウヤが私の前に来る。とても照れくさそうな顔をして、「よお」と、とても小さな声で伏し目がちに私を見る。

ステージ上で見違った姿とは程遠いけど、これが本来のリュウヤ。私にとっては今の方が親近感が沸くし、逆に安心する。

そんな素振りの彼も、次にさゆみを見ると丁重な挨拶に切り替わった。

「さゆみさん…ですよね？」

「あ、はい」

「はじめまして。この度は大変お世話になりました。ありがとうございます」

丁重に深々と頭を下げるリュウヤ。

「いえいえ、アタシは大したことしてませんので…」

リュウヤの丁寧語に釣られてしゃべる酔っ払いのさゆみを見るのもなんとなく笑える。

「さゆみとリュウヤは初対面なの？」

と、確認の意味で聞いてみる。

「そうよ。さつきも言ったでしょ。アタシは孝則と打ちあわせたから、このパンツ…じゃなくて、チビリオパンツさんと会うのは初めてよ」

ちよつと吹き出した私。——この芸名なら略しても略さなくてもどうでもいいのに。

「あのお…」

リュウヤが頭をかきながら言う。

「その芸名はやめることにしたんです。コンビも結成したし、もう僕はパンツもかぶらないんで」

最もらしい理由。私たちはそれもそうねと頷くばかり。

「苗字はつけずにリュウヤでいいかなって。でもメインはやっぱコンビ名を覚えてもらうことだけだよ」

更にうんうんと二人して納得する私たち。そのときさゆみがハツとした様子で切り出す。

「あ、ごめんね。アタシこれで帰るからさ、安佳里とリュウヤさんはまだまだゆっくりしていつて」

そう言うのと、さゆみはすぐに席を立ち、自分の座っていた席にリュウヤを招き入れる。

「じゃあね。安佳里、今日はおめでと。ダブルで」

「うん。ありがとうね。さゆみ」

「ひとつだけ忠告！明日も平日なんだから、朝帰りして仕事に遅れないようにね」

「しないよ、そんな…」

「（「ー」）ニヤリ」わかんないでしょ。男と女だもの。このあとたっぷり…」

「ヤダもう。エロいよさゆみ」

「へへっ…じゃ、お疲れさまでしたー」あ、自分の分は払っとくから。ごゆっくりー」

こうしてさゆみが退場した。途中、こちらに振り返って口に手を当て、フフッと三日月な目で笑いながら。

「もう…さゆみったら」

気を利かせてくれたさゆみのおかげで二人きりになった。

店内はお客さんもまばらで、私たちの席からは遠く離れている。

「正直なところ、安佳里にすぐ返事をもらえるとは思ってなかったよ」

と微笑んで言うリュウヤ。もう緊張はしていない様子。

「私たち、時間をかけ過ぎたもの。これ以上、結論を伸ばしてたら

人生のロスタイムだと思ったの」

「そつか…そうだよな。俺が悪かったせいでこうなっちゃったようなもんだ。本当に反省してる。ごめんな」

「ううん。違う。私はそんな風に思っていないよ。私だってリュウヤの気持ちを逆なでするようなことしたもの」

このとき初めて、お互いが自分の非を認め、その気持ちをしっかりと伝え、わかり合ったような気がした。

「ところでモッチーは…母田さんは来なかったの？」

「誘ったんだけど、行くだけヤボだからやめておくってさ」

「へえ…」

「あいつはデブだけどすごく気がつくんだ」

「デブは余計でしょ」

「あ、わりい^|^; でもあいつはひとの心理を鋭くつかんでるんだ。ビビるくらいの確だし」

それは私も同感だった。

以前、リュウヤのアパートに初めて行ったとき、モッチーとの初対面もあった。

そのときの彼ときたら、リュウヤの気持ちが手に取るようにわかっているといった口ぶりだった。

まるで全てを知り尽くしているかのように。

「でもさ、あいつのおかげで安佳里を今日、呼ぶことができたんだ。これを運命と言ったら大げさかもしれないけど、俺はそう思うんだ」

「運命…ホントにそうなのかな？」

「考えてもみるよ。あいつのいとこがさゆみさんで、その親友が安佳里だなんて偶然というよりは、これが運命の引き合わせだっと思わないか？」

私は少し考えた。言われてみればそうかもしれない。

「俺はあいつに相談したんだ。安佳里をなんとかさっきの店に呼び

出したいって」

ここでリュウヤは、グラスの水を飲んで一呼吸。

「そしたらあいつがさ、自分のいこと安佳里は親友だから、問題ないから心配すんなって言うんだ」

「……よく聞いたらすごいことだね」

「だろ？そう思うだろ？だから運命だっと思うんだ。俺がステージであれだけしゃべれたのも、そう思えたからなんだ」

リュウヤの言葉に茶々をいれる訳じゃないけど、少し気になることを聞いてみる私。

「せっかくのステージデビューなのに、こんなプライベートなことが挟まっちゃって本当に大丈夫だったの？」

「いいんだよ。ネタはちゃんとやったし。あいつのカウンセラーコントはすごかっただろ？」

「うん。さすがだなって」

「あいつの心理分析は鋭いから、なんとかそれをコントにできたら面白いだろうなあって思ったんだ」

「ふうん…でもなんでモッチーは人の心理がわかるんだろうね？経験から？」

「そこまで深く聞いてないんだ。おそらくそうだとは思っけど」

なぜかモッチーの話題に切り替わっていることに、二人ともハッと気づいて、お互い顔を見合わせ、声に出して笑ってしまった。

「俺、まだ何も食ってないんだ。何か注文していいか？」

「どうぞ」

「安佳里は？」

「私はもうお腹いっぱい」

「じゃ悪いけど、ガッツリ食べさせてもらっわ」

終始、なごやかなムードでリュウヤと話すことができた。

こんなので、何年ぶりなんだろう？

すごく居心地のいい時間。空気。ムード。

このままどこかでお泊りするより、ずっとここでリュウヤと向かい合い、朝までおしゃべりしたいと、私は心からそう思った。

（続く）

69話 ミスト・レイン

帰りの電車の中。乗客もまばら。

そんな中、乗降口のポールの隅に、ひとり不自然なニヤけ顔で座ってる私。

こんなところに見られたら、きっと神経がやられてる女に思われなくても仕方ない。

幸い、誰も私に注目する人なんかいないし、気づいていても無視するのが自然な流れ。

でもそんなの、今の私には全然平気。へとも思わない。

妄想と回想は得意中の得意。というか人生の一部。

ベッドじゃないから、自分の気が済むまでとはいかないけれど、降りる駅に着くまではその余韻に浸っていられる至福の時間。

この日はいつになく珍しく、高校時代にリュウヤと公衆トイレの前で出会ったことから、社会人になって再会するまでの回想が順序よく流れたいた。

不思議なことに、その間に付き合った男やセフレもいたのに、そんな思い出など一切出てこないし、顔さえも記憶の外。

そもそも思い出と呼べるものがないからなんだろうけど。

こうして、自分に都合の良い私の回想は、ついさっきまでの出来事に辿り着いた。

——あるとき、終始リュウヤはメガハンバーグを食べながら私と会話をしていた。

かしこまって話すよりは、お互いの緊張もほぐれて良かったと思う。

「安佳里もわかってると思うけどさ、今の俺にはほとんど稼ぎがな

いんだ」

こんなセリフのわりには、神妙な面持ちとは裏腹に、がつつきながらハンバーグをむさぼるように食べるリュウヤ。

言葉と行動のギャップに、普通は違和感を覚えるんだろうけど、私にとつてはそれが逆に安堵感に繋がった。

だって、心にウラのない証拠だもの。私にカッコイイところを見せる男ほど信用できない。過去にはそれが多すぎた。

「だからさ、いずれ貧乏させることになるかもしれないけど、大丈夫か？」

口の中をモゴモゴさせながらも、その眼差しはしっかりと私の目をとらえていた。

余計な詮索だけど、リュウヤが“いずれ”と言ったのは、今はまだ貯蓄があるから安心ということなんだろう。

でも毎日これを切り崩して生活費に充てるとなると、先がなくなるのは目に見えて明らか。

「うん：大丈夫だよ。貧乏は平気。私も働いてるんだし、リュウヤは物欲がないじゃない？」

「そうだけど：そんなことよく覚えてたな」

「えへ（＊＾　　＾＊）ゞ だからなんとかなるよ」

「ならいいけどさ」

と彼の前では言ったものの、正直なところ貧乏が全く平気なわけじゃない。

最低限、守りたい生活レベルってものもある。

でも今の私にはそれが言えない。言うべきじゃないと思ったから。それには私も努力すべきだと思ったから。

その後、がつつき過ぎのリュウヤがお約束のように食べ物をものどにひっかけてむせたので、

「リュウヤ、食べ終わるまでしゃべらなくてもいいから。それでも

つとゆつくり食べて」

と私が言うと、すまんと彼は素直に従ってくれた。

こうして数分の間、私はリュウヤの食べ顔を見続けていた。

新たな会話が始まったのは私の方から。

やはり、どうしても確認しておきたいことがあるから。

プロポーズは受けたけれど、私の中でくすぶっている不安が全て消えたわけじゃない。

「私、リュウヤが思ってるような女じゃないかもしれないよ。それでもいいの？」

ちょうどメガハンバーグ食べ終え、グラスの水を飲みほしたリュウヤが即答する。

「そんなこと言うなよ。俺もバカじゃない。第一印象や外見だけで判断してるわけじゃないんだよ」

「だけど私……怒らないで聞いて」

「ああ」

「私、恋なんかしちゃいけない女なんだって、ずっと頭の隅から離れないでる自分もいるの」

「すごいマイナス思考だな。…トラウマのことか？」

核心をついてくるリュウヤ。私のことを理解してくれるのは彼しかないと思う。

それだけに、彼に負荷を負わせてしまうのも私にとっては辛いこと。

「そう…もちろんそれもあるけど、私自身、人間ができてないし…」
「そんな完璧な人格者なんて、この世にいないよ」

「違うの。私、自分に甘すぎるもの。今まで何の試練もなくここまで来たわ。都合よく遊んで、男と付き合っではすぐ別れて。そして一人で落ち込んで。相手の気持ちも考えずに傷つけてきたかもしれない。それでもまた同じことを繰り返してきた学習能力のない女。」

そんな私がリュウヤと幸せになってもいいのかな？」

この期に及んで何を今更と思われても仕方ない。

でも、このことを踏まえた上でじゃないと、あとで絶対後悔する
と思ったから。

リュウヤの次の言葉を待つ私。

彼は自分のグラスに水を注ぎ、一気に飲み干すとニツコリ私に微笑んだ。

「安佳里が自分のことをそこまでわかってたらもう大丈夫だ。俺には何の不安もないよ」

「本当に？」

「安佳里は子供の頃からトラウマで苦しんできた。セフレなんか知らないけど、遊んで来たのは安佳里が精神的に追い込まれていただけで、それは本当の心の裏返しに過ぎない。俺はそう思ってる」

「リュウヤ……」

「安佳里は純粹だよ。何の心配もいらない。俺の稼ぎの方が心配だ。ハハ……笑いごとじゃないけどな」

この瞬間、心のつかえが体からスーッと抜けていくのを肌で感じた私。

この人は……リュウヤは、私が思ってる以上に心がおおらかで寛大な人なんだ。

もうここで不安を拭い取らないと、彼に対してとても失礼なことになる。

——決めた。もう、この人に全て委ねよう。

例えこの先、彼が芸人として限界が来たとしても、私が支えてあげよう。

そつ心に誓った瞬間でもあった。

「あーまだ食い足りない。ギガハンバーグ一緒に食わない？」

「えゝ？またあ？」

「またじゃないさ。さっきはメガ。今度はギガだよ」

「まあそうだけど…（ハ―ハ；）」

自宅近くの駅に着いた。

最後にリュウヤとマジでギガハンバーグを食べ、お腹がはち切れ
そうでまだ苦しい。

そんな中、ガラスドアに映った自分の顔を確認してみる。

――やっぱりニヤケてる。

お腹の苦しさより、心の満腹感が勝ってる証拠。

外は霧状の雨。傘なんか持ちあわせていない。

昔なら気持ちが悪くすんでしまっただけだった。

でも今夜は違う。

傘なんていらぬ。逆に持ってたらず放り投げたい。そしてこの雨
に打たれたい。

私は構内を出て、空を見上げて両手を広げた。

――リュウヤ、だゝい好きっ！！

こんな日が来るなんて…

ただ、うつとうしいだけだったミストレインが、こんなに素敵な夜
に思えるなんて。

（続く）

70話 Wの驚劇（前編）

人は気持ちひとつでこうも変わるものと、身を持って体験したのは生まれて初めて。

いつも洪々“やつつけ仕事”をしてる私が、次の日の仕事を意欲満々にこなしている姿は、どうやら同僚たちの目を丸くさせて、何か物言いたげ。

それに気づきながらも、今の私にはどこ吹く風。怠けてるんじゃないんだもの。四の五の言わせないわ。

いつも午後5時までが長くて仕方なかった毎日も、この日はまるで半日分だけタイムスリップしたかのように、帰宅時間が訪れた。

——さてと、明日の土曜はさゆみの家ね。

そう決めていた。私の誕生日をお祝いしてくれただけじゃなく、人生最大のイベントをコラボさせてくれた心からの親友。

昨日のうちにメールでアポもとってるし、手土産にはさゆみの大好きな、創作堂の生チョコ蔓ロールを買って持つて行くつもり。

もう死語だけど、ルンルン気分ってこのことなんだとつくづく思う私。

でも、興奮して寝付けなかった昨夜と比べると、今夜はぐっすり熟睡できそうな気がする。

それは私にとって、この上なく満たされた心に他ならないことは、十二分に理解していたから。

そして翌日。

そんな気がした通り、まさに熟睡できた朝を迎えた私。今までの人生ではなかなかこんなことはなかった。

10時間も寝た上に、目覚めがとても清々しいだなんて。私は朝食は食わずに見支度を整え、メイクにかかる。デートじゃないから念入りとまではいけないけれど。

その後、自宅を出たのが午前11時。

今日はさゆみの家でちょっとだけお茶して、そのあと外でランチの予定。

リュウヤはどこか田舎のなんとか祭りの営業が入ってるから、会えない週末。

再デビューしたてだもの。アピールするためにも、もらえる仕事はとても貴重。

さゆみは1LDKの賃貸マンションに一人暮らし。

彼氏は転勤で他県へ異動。遠距離恋愛になってから2年目。彼女も辛い立場なのに、いつも世話をやかせるのは私の方。さゆみに対してはお詫びと感謝の気持ちでいっぱい。

予定通りにロールケーキを買って、彼女のマンションの玄関前に到着した。

チャイムを鳴らそうとする直前、急にドアが開き、中から予想もしなかった人物が現れた。

「え？モッチー！」

思わず口をついた私の叫びに彼もビクツとたじろいだ。そしてその表情を確認した私も更に驚くこととなる。

——モッチーが泣いてる？

明らかに涙目で、赤く充血している。

それを少しでも隠そうと、モッチーはすぐに私から目をそらす。しばし呆然としてる私に、彼は目を合わさないまま口を開いた。

「安佳里さん。もう…リュウヤを離したらダメですよ」

「…え？」

そう言つと、彼は私に背中を向け、巨体には似合わない早足で立ち去った。

と、思ったら出口の方向を間違えたようで、Uターンして私の前を体裁悪そうにうつむきながら通り過ぎて行つた。

「ちよつとさゆみー！」

玄関はモッチーが出たばかりでロックはされていない。

事情の呑み込めない私は、チャイムも押さずに中へ入った。

ちようどさゆみがロックをかけようとしに来たのか、ポーチでバツタリ鉢合わせ。

「あら安佳里、来るのまだ4分早いよ？」

早く来たら都合が悪かつたんだろうか？

モッチーとさゆみのやりとりって一体何？

「今私、ドアの外でモッチーと出くわしたんだけど？」

「あらヤダ。やっぱり？だからもつと早く帰れって言つたのに…」

そう深刻な表情も見せないさゆみ。至つてあつけらかんとしている。

「まさか、ゆうべモッチーを泊めたとか？」

「バカね。いくらいところでそれもそれは無理。アタシは親が来ても泊めないよ。泊めたのは元彼くらいよ」

「じゃ何で来たの？リュウヤとモッチーは今日、営業のはずだよ？」

「そうなのよ。ギリギリになるから早く帰らせようとしたんだけど、あいつ泣き出してさ」

「だから一体、何がどうしたのよ？全然わかんない」

さゆみは（；- -） Ⅱ 3 フウツとため息について、
「玄関先もなんだから、あつちで話しましょ」
と、二人一緒にリビングへ。

さゆみはPOPライター。

いわゆる広告ポスターや売り出しのプライスカードの作製。
手書きの文字書きは彼女独特のセンスがあつて、インパクトがある
と私は思う。

数件の店舗と契約していて、作業はその現場が多いけど、自宅に
持ち帰ることもある。

けど最近では素人でもパソコンで簡単に作れるので、彼女の仕事
はめつきり減っていた。

そんな彼女も今はフルにパソコンを利用しながら作業を進めてい
る。

リビングのデスクには大事なPOPが無造作に散乱している。
全部できてから整理すりゃいいことだからとさゆみは簡単に言う。
そんなところが、彼女の大雑把な性格を物語っている。

「言おうかどうしようかと迷ってたんだけどさあ…」

さゆみがお茶を淹れながらそう言う。

コーヒーか紅茶かと思ったら、本当にお茶だった。

しかもペットボトルの“おいしいお茶”を紙コップに注いだけ。

まあそんなことは今どうでもいいんだけど。。

「孝則なんか言ってた？」

「うん。リュウヤを離れたらダメだって。泣いてたよ」

「ありやりや…」

「ありやりやじゃなくって、どういうこと？」

「んゝそつかあ…見ちゃったら話さないと安佳里も納得できないで
しょうし…」

何かじらしてるような気配のある素振り。

言いにくいことなのか、できれば言いたくないのか…
ちよつとだけど不安がよぎる私。

「何？悪いことなの？」

「うっん。安佳里にとつては全然平気だと…思っけど」

「その不安な言い方は何よ？」　　・　　・　　・

ちよつとうんざりしながら、首を横に振った私。

何気に見たその視線の先に、は？と思わせるPOPが目に入った。

“ポカリスエッチ　１本５８円”

「（＊　m　＊）ププツ。ちよつとさゆみコレ」

思わず嘔き出した私が、誤字を指摘すると、さゆみ自身バカウケして笑いこけていた。

「イヒヒヒヒー♪（　　）ノシ　ばんばん！！ヤダアタシ。文字列がひとつズレちゃったんだわ」

「お店に出したら大変よ」

「アハハハ。このまま持つて行こうかな」

「やめなさいよもう…（＊＾m＾＊）」

なかなか本題に入れない。今もこうして笑いながら話しがそれる。
でもその本題は、まだ笑いがおさまらないうちに始まった。

「いやー、可笑しかったわ。じゃあこのムードのうちに言っちゃうね。孝則はパンツ…じゃなくてリュウヤさんが好きだったの」

——は？——え？

私の笑いは瞬時に固まった。でもさゆみは至ってまだ愉快そう。

「アタシ前にも安佳里に話したことあるよ。いここに失恋してばかりいる子がいるって」

そう言われてちよつと思ひ返してみた私。

「あー、そういえばそんなことが…でもそれって、女の人じゃなかったの？」

「孝則の心は女よ。でも欠点は巨体でブサイクなオカマだってこと。今までにも随分泣かれたけど、今日も久々にね」

あつけにとられて口を開けっ放しの私。

「安佳里、口に虫入るよ。さつき蚊が1匹飛んでたから」

私はハツと我に返って口を閉じた。

「モッチーが…オカマ？全然そんな素ぶりなんて、今までなかったよ？」

「人前で何度もバカにされてるから封印してるのよ。実際はバリバリの女言葉よ」

「おすぎとピーコみたいに？」

「たとえ古いわね。K A B Aちゃんとか仮屋崎先生みたいなもんよ」

「……へえ。」

「相手が安佳里なら、素直に諦めるってよ」

そうだったんだ。だから玄関であんなことを。

私はあらためて考えさせられた。

思えば、モッチーが恋愛に対しての心理分析が適切なことは、全て自分の経験から引き出されているのに違いない。

数知れない場数を踏んで撃沈した辛い経験や思い出が、人の真相心理を探る知識となったのだ。

「あの子も不憫な子なの。安佳里、あんたは孝則の分までリュウヤさんを支えてあげてね」

「う、うん……」

何とも言えない複雑な心境の私。

「そうそう、この話はここまでね。それよりもっとビックリする情報があるのよ」

いきなり話題が変わり、さゆみの表情が別な意味の驚きになる。「なに？まだ他になんかあるの？」

「さっき孝則から聞いたんだけどね。週刊誌にあの日のことスクープされたみたいなの」

「！！！！！！」

（続く）

71話 Wの驚劇（後編）

週刊GEEKISHA。

芸能人のスクープやゴシップを鋭くえぐり、辛口に書きたてる業界一の有名雑誌。

モッチーから聞いたさゆみの話によると、その週刊誌専属記者から事務所に連絡があったらしい。

でも詳しい内容までは明かさずに、ただ来週発売号に掲載予定とだけ。

ただ、ほんの少しだけのヒントとして、取材した日が木曜の夜とのこと。

つまり、リユウヤとモッチーのデビューステージの日。

言い換えれば、リユウヤが私にプロポーズしてくれた日でもある。

「あの日、あの店にGEEKISHAの記者が潜り込んでたのかな？」

私の問いかけにさゆみも首を縦に振る。

「その可能性は大ね」

「写真撮られたのかな？フラッシュが光った憶えはないけど…」

「相手はプロだもん。どんな撮り方だってできるわよ」

「なんか怖くなってきちゃった。せっかく再スタートの次期だっていうのに…」

「覚悟はした方がいいわ。言っちゃ悪いけどリアの一件で、あんたの彼氏は世間の評判がすぐ悪かったりするじゃない？書かれ方によっては芸人生命も…あ、ごめんつい。」

「いいの。わかってるよ。わかってるから…」

「ごめん。この話は終わり。ロールケーキ食べようか？」

「これからランチするでしょ^^」

「あ、そっか。食前のデザートになっちゃうね。じゃやめよ」

その後、予定通りにさゆみと外へ出てランチはしたんだけど、頭の中ではそのことが離れられないでいた。

「ごめん安佳里。アタシ、余計なことばっか言っちゃったね。不安がらせてばかりで…」

と、帰り際にさゆみが申し訳なさそうに言う。

「ううん。それはいいの。あとでいきなり週刊誌見てビックリするよりはね」

「そう…なら良かった」

「うん」

「でも安佳里、アタシが言うのもなんだけどさ、たとえどんな記事が出たってあんたはくじけちゃダメだよ。強くならなきゃ」

そうだ。さゆみの言うとおり。芸人と結婚するということは、マスコミ情報に流されていては身が持たない。

いつも毅然としていないと、ゴシップネタの格好の餌食になってしまう。

私は芸能人じゃないから、もし私に関する記事が書かれることになつたら動揺せずにはいられないかもしれない。

けど、それを超えなきゃ、芸人からのプロポーズなんて受けちゃいけないんだ。

私は自分に強く誓った。こんなことじゃ負けない！

何度も自分の心の中では誓ってるのに、何かあるとすぐ腰砕けになる。

こんな弱い自分を絶対治さなきゃなんない！そう、今この瞬間から！

週刊誌なんて平気。へっちゃらよ！！

とは思ってみっても、やはり生まれ持ったのくじけやすい私の性格。

どうしてもリュウヤに、ぬぐいきれない不安を聞いてもらいたくなる。

というよりも、当事者であるリュウヤ本人が一番不安なはず。本来なら、私が毅然としてリュウヤを安心させなきゃなんないのに。

何やってんだろ、私。

その夜、私は部屋からリュウヤに電話をかけた。かけずにはいらなかった。

「なんだ。そんなことか」

意外にも、リュウヤの反応は私とは真逆で、不安どころか、余裕で笑ってる。

「俺は何を書かれたって平気さ。別に悪いことしてないし」

「でも…」

「だいいち、安佳里のバースデーを祝って、プロポーズしたことが、そんな悪らつな記事になるはずないじゃないか」

「そうだけど……あのさ、リュウヤ怒らないで聞いて」

「ん？」

私は思い切って、一抹の不安になる要素をリュウヤに話した。

「リュウヤがそう思っても世間的にはね、あなたは世間的には、あの横瀬リリアを捨てたって思われてるでしょう？」

「まあ確かに…」

「なのに、あなたが私にプロポーズしたことを記事に書かれたらどうなると思う？」

「んー、そうだなあ。裏切り者とか、浮気者とか、またポイ捨てか？とか言われるかもなあ」

「いとも簡単に言うリュウヤ。」

「怖くないの？めっちゃ書かれても？」

フフッと電話の向こうでまた笑う彼。

「安佳里、俺はもうチビりおぱんつとしては落ち目な芸人なんだ。」

記事にも取り上げられることもなくなった」

「だから何だつて言うの？」

「プラス思考で考えればとても良いことだと思うんだ」

「記事になることが？」

「うん。これはおいしい話じゃないか。再デビューにはもってこいだ。いきなり注目を浴びれるなんて、めったにあることじゃない。

これはチャンスだ」

「おかしいよそんなの。読者や視聴者から非難されたら終わりだよ？チビりおぱんつだつてこともバレルんだよ？」

「ああ、そのことは隠すつもりもないから。だからお客さんの前で告白したんじゃないか。遅かれ早かれ、バレルのは時間の問題。最初から隠す必要がないんだ」

私は言葉を失った。

——つ、強い。リュウヤのハートは私のチキンなハートとは比べ物にならない。

「ただ、ひとつだけ不安がある」

「えっ？」

「安佳里に迷惑をかけることになるってことだよ。俺のせいでイヤな思いをするかもしれないだろ」

「それは……」

「ごめんな。でも俺の気持ちはこの先変わることはない。安佳里と一生添い遂げる。誓ってもいい。絶対にない。だからどうか俺を信じてくれないか？」

胸にズシツときたリュウヤの言葉。

“一生添い遂げる”

時代劇調なセリフだけど、シャイなリュウヤの発する言葉には重みがある。

かつてのセフレたちはどんなに洒落たセリフでも軽いものでしかなかった。それはただの演出にすぎないから。

私はリュウヤの言葉で、浮足立った気持ちが徐々に平静になってゆくのを感じた。

——私ってまだまだ子供だな…

「ごめんねリュウヤ。私、身近でこんな経験したことないから頭が混乱しちゃって…」

「仕方ないさ。俺は何事にも動じない姿勢でいると覚悟してるだけのこと」

「やっぱり強いわ。リュウヤは…」

感心しきりの私。もう私の心はリュウヤマジックによって、あっという間に落ち着きを取り戻していた。

「安佳里、そんなことよりもさ。今週は会えなかったから、来週はデートしようや」

「え？でも週末は営業なんですよ？」

「うん。俺のオフは水曜なんだ。だから水曜の夜、安佳里が仕事終わってからメシでも食わないか？」

「ええっ？」

私はリュウヤが指定した水曜日に大きく反応した。

「どうした？」

「その日は私、休みとってるの」

「おお！グッドタイミングじゃなか。これも運命のなせる技なのかな？」

「そうじゃないの。そうじゃなくってね…」

私は言葉に躊躇した。せっかくの夜のデートをこのまま不意にする返事はしたくないのが本音。

でも説明しなきゃどうしようもない。

「何か用事でもあるのか？」

「うん…実は親戚の法事なの。叔父の四十九日だから…」

そう、水曜日は優しくったギンゾーの四十九日。

その優しさに最後まで気づいてあげられなかった私には、とてつもない悔いが残っている。

せめて今後の法要にはしっかりと参加してあげようと、心に誓っていた。

「ごめんねリュウヤ。その次はもう何も用事ないから…」

「いやいや、それならそれでいいんだけど…あのさ。ちょっと聞いていい？」

「え？」

このあと、私は驚くような事実をリュウヤの口から聞くことになる。

「あのさ、もしかしてそのおじさんて、ギンゾーとかいう人？」

「Σ(□□)…！…なんで？なんでリュウヤがそんなこと知ってるの？」

「そうか…やっぱりそうだったのか。亡くなったとは知らなかった…」

何やら彼は電話の向こうでショックを受けているような感じ。なぜ？

「安佳里、俺もその法事に出席させてもらっよ。いいだろ？」

私の疑問は増すばかり。

「だからなんで？ギンゾーおじさんを知ってるの？」

電話の向こうでリュウヤの深いため息が聞こえてきた。

「うん…実は前に一度会って話したことがあるんだ」

「ええっ？！ウソ？」

全然わけがわからなかった。

芸人と元漁師に何の共通点があるの？どんな接点があるの？
私はリュウヤの次の言葉を待った。

（続く）

72話 心地よい回想

「行つてから話すよ。会つて話したいし」

「えゝゝつ!？」

「で、場所はどこ? 遠いの?」

こんな肩透かしな言葉を言われると、これ以上聞くに聞けない。結局、リュウヤに場所を教えて最後はおやすみの挨拶で通話は終了了。

若干、はぐらかされた感があるように思えるのは私の考えすぎ?

——あ、いけない。また私の悪いクセ。

このまま余計なこと考えると、また自分勝手な妄想が膨れ上がつて大変なことになりそう。

それにたいいてい睡眠不足になるから、体調不良になるのも過去の経験から自覚済み。

これからはこんな自分を変えていかなきゃなんない。
本来なら今すぐにでも変えるべき。

——そうよ。考えたつてしょうがないわ。ギンゾーのことはどうせ水曜にわかるんだから、それでいいじゃない。バカね私も。

そう強く念じてベッドに入つてはみたけど、生まれつきの性分がすぐに変わるはずもなく…

やっぱり気になるものは気になる。ならどうすればいい?

苦し紛れに出た結論はホントにいい加減なもの。

別なことを考えればいいのではと、無理やりモッチーを頭に浮かべることにした。

確かに彼が同性愛者だったなんてまさに寝耳に水。

さゆみからその事実を聞かされたときは、ある程度冷静を装ってはいたけど、実際は大きな衝撃を受けていた私。

しかも心が女性に近いなんて…

失礼な話、あの巨体で女つ気の全くない風貌から、女言葉をしゃべるモツチーなんて想像もつかない。

でも……でもつい妄想を膨らませてしまった私（＾□＾；A

モツチーがハニカミながら『いやん』とか『うふっ』とか、はたまた『お願いよ』とかしゃべってるセリフを勝手に想像して、部屋でひとり爆笑している私がいた。

おかげ様で、ベッドに横になりながら、断続的に襲ってくる妄想

笑いをこらえているうちに、どうやら私は寝入ったようで、気がついたときには快適な日曜の朝を迎えていた。

部屋の壁掛けカレンダーを見る私。

「あと3日か…」

あれほど毛嫌いしていたギンゾーを、今では法要の日を待ち遠しく思ってる私。

そんな自分が不思議で、可笑しくて。

でも手を合わせて祈ってあげたい気持ちがいっぱいで。

——そうだ！ギンゾーの大好きだったジンギスカンをお供えしてあげられないだろうか？

そんな突拍子もないことを、本気で母に伝えると、

「バカじゃないの、あんた」

と本気で言われてしまった私（＾／＼；

元漁師なのに、魚は食べ過ぎて嫌になり、引退後は脂っこいジンギスカンをこよなく愛したギンゾー。

唯一、好きだった魚はお寿司の中トロと穴子。きっと脂っこさがジンギスカンと共通したのかも。

逆にジンギスカンをこよなく毛嫌いした私。

なんか不思議でたまらない。

思い出したくもなかった出来事が、懐かしい映像になって私の脳裏に蘇ってくる。

「そうよ。あと3日よ。リュウヤにも会えるし…そしてギンゾーにも…」

（続く）

73話 影の功労者

水曜日。やわらかな陽ざしの穏やかな日。いわゆるボカボカ陽気。そんな中、ギンゾーの四十九日法要がおごそかに行われた。

場所は一人暮らしだったギンゾーの家。

我が家からはかなり離れた距離にあるけれど、親戚一同、それが妥当であると意見が一致したらしい。

住人がいなくなったこの一軒家の鍵は、彼の実弟であるうちの父が管理していた。

お坊さんが帰られた後はみんなで御膳を囲んでの会食。

特別賑やかでもないけれど、しみりとしたムードでもない。

みんな口ぐちに言うのが、ギンゾーは全くイヤミがなくて親しみやすい人。

いつも笑って話をして、冗談をいいながら場を和ませる人。

近所の農家で田植えや稲刈りをする時期には、必ずどの家にも手伝いに現れる人。

そんな褒め言葉ばかりが私の耳に入る。

その他の会話といえば、親戚どうし、お互いの近況や暮らしぶりなどを雑談してる程度。

リュウヤもはるばる長い道のりを自家用車に乗ってやって来た。

途中、道に迷ったようで、到着したのが法要の真っ最中。

親戚たちからは「誰？」みたいな視線の集中砲火を浴びていた。

礼服でピシッと決めたリュウヤの真顔を見ると、すごい紳士に見えてドキッとした私。

お経終了後は私が彼をきちんと紹介して、一緒に精進明け料理を共にした。

そして今、私はリュウヤと二人で縁側に座ってひなたぼっこ。うちには縁側がないから、ちよつとだけ憧れていた。

こんな環境、テレビのサザエさんでしか見たことなかったし。でもこの場面で一緒にお茶でも啜ってたら、なんか老けこんでしまう気がした。

だから私は缶コーヒーを2本持つて来て、リュウヤにハイと手渡す。

「お、いいね。ちょうど冷たいのが飲みたかったんだ」

ここまで緊張な面持ちだったリュウヤが、初めて私に笑みを見せる。

「今日はありがとね。こんな遠くまで」

リュウヤは開けた缶コーヒーを一口飲んでまた微笑んだ。

「当然だろ。ギンゾーさんの葬儀には出られなかったんだし」

そうそれ。まさに今がリュウヤに訊ねる絶好のタイミング。

ギンゾーとリュウヤの接点って一体なんなのか。

私は待ちに待ったチャンスを得たかのように、疑問を投げかけた。

「ねえ、今日会ったら教えてくれるって言ったよね？」

「ん？ああ、そうだったね。そういえばそうだった」

「リュウヤはギンゾーとどういう関係？」

「関係って…そんなヤラシイ関係じゃないよ」

「誰もそんな意味では聞いてません（――；）」

なかなかすんなり話が前に進まない。私の訊き方が悪いのかな？

「俺、ギンゾーさんに頭下げられたんだ」

「え？」

唐突に本題に入って来たリュウヤ。

「2か月くらい前だったかな…ギンゾーさんがウチの事務所に俺を

訪ねて来たんだ」

「ウソ！Σ（・ω・；）——マジで？」

「うん。ちょうど俺も仕事のない時期だったし、事務所にいたんだよね。そのときが初対面だったんだ」

「そ、それで？」

「それがさ、何の前触れもなしにいきなり頭を下げるんだよ」

「挨拶じゃないの？」

「いや、そんなんじゃないさ」

リュウヤは座った縁側から小さな庭を見つめていたけど、おそらくそんなの視界には入っていない。

ゆつくりと過去の出来事を思い出すように、丁寧に、そして正確にその場面を私に伝え始めた。

——そのときの会話の一部始終

「どうか安佳里と付き合ってもらえませんか？」

「…は？」

「安佳里をあんな風にしたのはこの私なんですよ。あの子は今もあなたに惚れとります。心変わりなんてこれっぽっちもありません」

「はあ…」

「わたしやあの子をこのままダメにしたくないんです。私の力じゃもうどうにもなりません。救えるのはあんたしかおらんです。勝手なお願いだとは重々承知しとります。でもどうかあの子を…」

「あのー、その前にあなたは安佳里とどういう関係で？」

「そんなイヤラシイ関係じゃないです」

「そんなこと聞いてませんよ（^ー^；）」

「なんちゅーか、その…わたしやあの子の父親の兄貴でして…」

「ああ、つまりおじさん？」

「そう、それぞれ。最近言葉がすぐに出てこなくて…年ですか」

「ハハハ…^^;」

「あの子の…アレはご存じでしょう？」

「アレ？」

「その…なんとかウマっていうやつ」

「もしかしてトラウマのことですか？」

「そう、それぞれ。さすが若い人は違いますな」

「安佳里のトラウマなら知ってますけど」

「あの子はそれですつと悩んできたようです。それもこれも原因を作ったのはこの私。全ては私のせいなんですわ」

「……………」

「ちびったパンツさんとか言われましたっけ？」

「いえ、僕はチビリおばんつです^|^; でも実は最近、改名しました…」

「じゃあなんと呼べば？パンツくん？」

「下着の芸名からは離れました。リュウヤでいいです。今は」

「じゃありユウヤさん。あんたの率直な気持ちを聞きたい。安佳里と付き合う気はもうないんですか？」

「そんなことはありません。ちよつと距離を置こうと思ってるだけで…」

「他に惚れた女性がおられると？」

「いえ、いません。本当です」

「ではやはり、あの子のトラウマがあんたの心に引つ掛かつとるんですね？」

「そうではありません。僕は安佳里のことをずっと気の毒には思ってきました。でも正直、どうしてあげればいいかわからないし…」

「わからないと？」

「ええ。子供の頃から傷ついた彼女の心を、僕のおせっかいでその傷を広げてしまったらどうしようかと…そんな思いが先に立ってしまっ

「そうでしたか。それなら話が早い」

「え？（・・）？」

「安佳里はあんたがそばにいただけでいいんです。それ以上の贅沢は望んじやいません。お金持ちと結婚したいとか、外国に住みたいとか、そんな欲望は全然持つてない子なんですよ。いい子だと思いますか」

「はあ……まあ」

「あんたはせつぷん……というか、チューするのは好きかね？」

「（・・）な、なんですかいきなり？」

「チュツチュできない女はイヤですか？付き合えませんか？」

「いえ、それは絶対にはずかしいです。そんなことは理由にならないです」「だったらお願いです。どうか安佳里を救ってやって下さい。あの子は人に尽くす子です。とてもいい子なんです」

「失礼ですけど、誰かに頼まれて僕のところには？」

「とんでもない。これは私の勝手な……なんちゅーかその……個人プレイですわ」

「そうですか……」

「せめて私が生きてるうちにできることはこれくらいで……」

「……？という意味……ですか？」

「まあその……医者から寿命宣告されましてね。でもわたしや、もう充分生きたから満足してますよ。ただ思い残すことがひとつだけ。安佳里のことです。私の命に代えても償わなければならんです」

「命に代えても……ですか。」

「頭を下げれば済むことじゃありませんが、どうかこの通りです。」

「安佳里をよろしゅうに！」

そんなギンゾーとの会話のやりとりを話し終えたりユウヤ。

私はただ、あぜんとしていた。

まさかあのギンゾーが、そこまで私のために行動してくれてたな

んて…

しかも重い病気の体をおしてまで…
きつとしんどかったに違いないはずなのに…

いくらなんでもどうしてなんだろう？

私なんて、ろくな女じゃないのに。

人に命をかけて救われるほどの価値なんて、どこにもない女なの
に。。

「ほら、涙ふけよ」

「…あ」

あぜんとしていた表情から、いつしか涙が一しずくこぼれていた
私。

「俺のアセふいたハンカチで悪いけど――」

「？（。――）！ちょっと！もうふいちゃったよ！」

「ハハ…わりい」

「もう…泣きそびれちゃったじゃない…」

私は泣きながら怒り、そしてなぜか笑えてくるのだった。

「俺さ、そのとき深く反省したよ。俺ってつくづくバカだなんて」

「えっ？」

「そして誓ったんだ。もう自分の心を曲げないってね」

今まで庭ばかり見ていたリュウヤが、私に振り向いた。

「それがあの日のデビューステージと安佳里へのプロポーズに繋が
ったんだ。そのきっかけや決心をつけてくれたのが、まさしくギン
ゾーさんだったんだよ」

充分な納得のいく説明。リュウヤとギンゾーの接点。

それは私に対するギンゾーからのお詫びの印。いえ、それ以上のものを与えてもらった。

——ありがとう。ギンゾーおじさん。

私はギンゾーの遺影を見た。

今や何のわだかまりもない。むしろ感謝の気持ちでいっぱい。けど、不意に気づいた一点の問題。

「ねえ、リュウヤのことをギンゾーに教えたのは誰なんだろう？」

「俺が知ってるはずないじゃん。安佳里がポロッと言ったことがあるんじゃないのか？」

「違うよ。私は全然……」

その時、背後に気配を感じて振り返った私。

そこにいたのは、缶ビールを片手に立っている行儀の悪い母。ちよつと酒グセが悪いのがたまにきず。

そんな母の第一声。

「教えたのはお母さんだよ。」 ♪ ♪ () () ♪ ♪ イエーイ」

(続く)

74話 隠されていた過去（前編）

100キロ離れた自宅に戻る車の中。

ドライバーは父。私が助手席。そして母が後部座席。

リュウヤはマイカーで私達より1時間前に帰って行った。

お昼に聞いた母の話。

私の彼がリュウヤであることをギンゾーに教えたのは母。

しかも、私達があまりうまくいってない事情までも伝えていた。

普通に考えてみても、ギンゾーに教えれるのは母しかないから、当然といえば当然。

でもあくまで母は、事情を説明しただけだと強調する。

つまり、リュウヤの事務所に押し掛けるような行動に出たのはギンゾーひとりの意志だということ。

田舎道を走る車に揺られながら、私はまた昼間と同じことを考えていた。

——どうしてギンゾーは…

けど、私ひとり考えあぐねていても、結論も何も出ないし、推測の域を出ない。

車中の沈黙を破って、私は母に質問を投げかけた。

「お母さん、どうしてギンゾーおじさんはあんなに必死だったのかな？」

昼間、酔いにまかせてテンションの高かった母が、今ではすっかり大人しくなっていた。

問いかけの返事もすぐに返って来ない。たぶん法事の疲れがどつと出て、後部座席で寝てるんだろう。

そう思っていた私が、様子を伺おうと振り向くと、いきなり母と目が合った。

ぎよつとした私。予想外もいいところ。母は眠そうな素ぶりもしないし、疲労の影などみじんも見られないほど目がカツと開いている。

決してまぶたの上から目を描いてるんじゃない。むしろ私の方が疲れていて目力がない。

かなり時間差をおいてから、母の返答があつた。

「…ギンゾーおじさんはね、ずっと責任を感じてたのよ。安佳里に對してね・・・」

それはそう思うけど、それだけでは何か腑に落ちない面もある。

「そうなのかなあ…わざわざ芸能プロダクションまで来るんだよ。すぎ過ぎない？」

母は再び妙な間をおいて、謎めいたセリフを口にした。

「詳しいことは帰ってから話すわ」

「えっ？詳しいこと？」

「ちよつとね、話しておきたいことがあるの。あなたに」

「それなら今言つてよ」

「ダメよ。お父さんも運転中じゃない」

「関係ないと思うけど？^ー^」

「家に着いからきちんと話すわ」

「私、帰つたらお風呂入つてすぐ寝るもん。疲れたし」

「若いのにそんなに早く寝ることないでしょうに」

「お母さん、今じゃダメなの？あと2時間も車の中だよ。ウチら3人しかないじゃない」

一瞬、戸惑いの表情を見せたような母。

口にはしないけど、しょうがないわねえという諦めモードで父の背後から言葉をかける。

「あなた、いい？ここで」

数秒の間をおき、無言を貫き通していた父が重い口を開いた。

父はギンゾーとは実の兄弟なのに、おしゃべり好きなギンゾーに比べてタイプがまるで違う。

「ここで話してもいいんじゃないか。家でかしこまっても、うまく話せんかもしれんしな」

父もまた、母と同調して何かを隠しているような口ぶり。

「わかったわ。あなたがそう言うなら」

「一体何なの？私のことなの？」

私はルームミラー越しに母を見た。それに気づいてこちらに目を合わせる母。

「安佳里、落ち着いて聞いてね」

「落ち着いてるよ」

「これから話すことを聞いても落ち着いてね」

「そんなのわからないよ。聞いてもないのに」

「それじゃ話せないわ」

「もう、わかったよ！わかったからそんなにもったいぶらないで！」

母が言いづらいことを言おうとしてるのはすぐにわかった。

けど、もし何か秘密があるのなら、それを隠されるのは不安よりも辛い。

私だってもう大人。何を言われても動じないフリをするくらいの芝居はできる。

「じゃあ言うわね。ギンゾーおじさんのことなんだけどね・・・」

「え？私のことじゃないの？」

「まあ聞いて。銀蔵さんには子供がいなくて言っただけ、それは事実じゃないの」

「ええっ？それはホントに初耳だわ」

「銀蔵さんには……ひとり娘がいるの。たったひとりだけ。」

母の言葉のニュアンスにハツとした私。

「まさか、その娘って……………私？」

ルームミラー越しの母が無言で静かにうなづいた。

「……………」

私は言葉が出なかった。平気なフリやお芝居もできなかった。

衝撃の大きさと信じられない気持ち、私の中にある規定容量を軽くオーバーして、体が硬直して動かない。

ギンゾーが本当の父親？それならギンゾーより先に亡くなった奥さんのタエおばさんが私の母親ってことになるの？

そんな私の心を読み取ったのか、母が的確に事情の説明を語り始めた。

「安佳里の生みの父親は銀蔵さんだけど、生みの母親は私。これは本当よ」

「……………どういうこと？」

この後、車の中で母は淡々と、今までに隠されていた事実を語り続けることになった。

それは私がまだ生まれる前、まだ母のお腹の中にいた時代までさかのぼっての話。

「当時ね、私と銀蔵さんは夫婦だったの……………」

「……………」

（続く）

75話 隠されていた過去（後編）

すごく疲れているのに全く寝つけなかった。

自宅に着いたらお風呂に入り、すぐに自分のベッドで横になった
までは予定通り。

けど、深夜2時をまわっても眠気ひとつ起こらないなんて計算外。
車の中で母が話した衝撃の事実が目が冴えて、眠るところじゃない。
い。

——ギンゾーが本当の父親

理解に苦しむ私に、事の次第を丁寧に説明してくれた母。
すなわち過去のいきさつ全てについて。

育ての親ということになる今の父は終始無言。

ただ、キュツと口を必要以上に結んで、何かをこらえているよう
な表情が、その横顔からも察知できた。

「昔、銀蔵さんが海で遭難した話は憶えてる？」と母が私に問う。

「うん。かなり昔でしょ？」

「ええ。安佳里がまだ…生まれる前のことだね。そのときお母さん
は銀蔵さんと夫婦だったの」

「…でも無事に救助されたから今まで生きてたんじゃないの？」

私と母はずっと車のルームミラー越しに会話をしていた。

「それはそうなんだけどね・・・」

やはり、少し言いくそな母。

私はこの空気やじれったさがたまらなくイヤで、母にハッキリと
提言した。

「お母さん。私なら大丈夫。ちゃんと話して。黙って最後まで聞い

てるから」

母が運転中の父の方をチラッと見た。

そうしたところで口ベタな父からの助け舟など何もないのだけだ。

「わかったわ。じゃあ言うわね」

「うん」

私はルームミラーから目をそらし、母の話を耳だけに集中させた。

「実はね、銀蔵さんが海で遭難して、無事に戻って来るまでには……3年という年月があったの」

「!!!!!!」

「当時、あの人は自分の船で一人漁に出て遭難した。海上保安庁や水難救済会が幾日も捜査して見つかったのが転覆した船だけだった」

「そ、それで？」

「その後、捜索も打ち切りになって、絶望と判断した私たち親族はお葬式もしたのよ」

「……」

「あの人が航行中の船に拾われたってわかったのは、3年が経過して突然帰って来たとき。つまり銀蔵さんの口から事情を聞いて初めてわかったことなの」

「ギンゾーを拾った船って一体何だったの？」

「無国籍の密輸船か、海賊の可能性が高いそうよ。銀蔵さんの話では、3年間はほとんど船上での生活で、立ち寄る陸といえば小さな島々ばかりだったように」

「今でもその事実にはわからないの？」

「ええ。結局、銀蔵さんは小さなボートに乗せられて、大海原に放置されてるところを日本の巡視艇に発見されたの」

「それって、無国籍の人たちが助けてくれたことになるの？」

「巡視艇が見つつけやすい位置に銀蔵さんを降ろしたのは確かなよう

よ」

「そうだったんだ…」

「本題はここからの。いい？」

「うん」

「海に出る漁師に死はつきもの。銀蔵さんは自分の身に万が一があったときの場合、全てを弟に委ねる。つまりお父さんに託すと常日頃から言ってたの」

「全て…？」

「それについてはきちんと正式な遺言書もあつてね。銀蔵さんの捜索が打ち切りになって間もなくそれは実行されたの」

「それって…つまりお父さんが…？」

「そうよ。弟であるこのお父さんが、まだお腹の中にいる安佳里の面倒を見てゆくということだったの」

一応ここまででは納得のゆく説明だった。けど、考えにくいこともある。

母には最後まで黙って聞いてるからと言った私なのに、思わず口を出してしまった。

「ギンゾーの遺言だからって、お父さんはそれで良かったの？お父さんの人生だよ。お母さんの他に付き合ってた人とかいなかったの？」

「そんなのあらん」

ハンドルを握りながらボソツと小声でつぶやくように言う父。

それでも私は理解し難い部分にこたわった。

「お父さんにとってはギンゾーはお兄さんだから、遺言を守るっていう義務の意識はすごいと思うわ。でも、その遺言にはお母さんと結婚するようについて書いてあったわけ？」

「バカだなお前。腹の中にいる安佳里とお母さんを養っていくんだぞ。夫婦にならなきゃどうしようもないだろが」

「じゃあやっぱり仕方なくってことなんだ？」

「それは違う。俺はずっとお母さんが兄貴と夫婦だったときから好意を持っていたんだ。仕方なくじゃない」

「Σ―11（ ; ）――1ええっ？今の爆弾発言だよお父さん！」

「そうよ。お母さんも今初めて聞いたわ。あなた本当にそうだったの？」

顔が真赤になった父。

「もう何も言わん」

と、口を閉ざしてしまった。

「話しが少し脱線しちゃったわね。とにかく私はこのお父さんと再婚し、そして安佳里が生まれてきたの」

「ふうん。」

「そして3年後、銀蔵さんが突然帰って来て、私達は度胆を抜かれたわ」

「ギンゾーはそのときどうしたの？お母さんとまたヨリを戻したいとか言わなかったの？」

「全然」

「ええっ？じゃあお母さんはどうだったの？」

「あのときは正直、迷ったわよ。でもね、銀蔵さんがそれを望まなかったのよ。自分の都合で弟に押しつけてしまったことだから、元に戻そうと一度は考えたらしいんだけどね」

「だけど？」

「もう今のお父さんと私と安佳里の間にはしっかりと絆ができていた。産まれたときから安佳里はお父さんにすごくなついてたもの。いまでは考えられないけど」

父がむせた。

「それがわかってたから銀蔵さんは諦めた。自分が安佳里の生みの親だとも名乗らない決意をしたの。行方不明になる前から、私が妊娠してたことは知ってたから、安佳里が自分の子だってことはすぐ

にわかつたわ」

「……」

「その代り、条件つてわけじゃないけど、ちよくちよく家にお邪魔して、安佳里の顔を見せてくれないかって……」

「……！」

「だから銀蔵さんがうちに来たときは、安佳里への可愛がりようつたらなかったわ。溺愛といってもおかしくないくらいにね」

「……」

そうだったんだ。ギンゾーは実の親とは名乗れない苦しい立場の中で、私に会いに来ることだけを毎回楽しみにしてたんだ。。

後にギンゾーはタエおばさんと再婚したけれど、ウチに来る間隔がそれほど延びたりはしなかった。

そして元々病気がちだったタエおばさんが亡くなって、またひとりぼっちになったギンゾー。

それなのに私ったら、徹底的にギンゾーを無視してきた。あからさまに嫌な表情を見せたりしたこともあった。

皮肉なことに、我が子可愛さのあまりに舐めまくったり、抱きしめて離さなかったりした行為が、子供としてはその大人を毛嫌にする大きな要因になったなんて。。

「ごめんなさい…ギンゾー。どうか許して下さい。。」

眠れない自分のベッドの中で一人つぶやいた私。

ギンゾーが死んでから、今まで何度も謝って反省してきたけれど、まだまだ足りなかった。

まだ生きてるうちに、いたわりの言葉のひとつもかけることができなかった私の罪は消えない。

なのに…なのにギンゾーは、自分の命が絶えたあとのことまでも、私のこと考えてくれていた。

こんな私のために…こんな自分勝手な私のために…

そう…私が帰りの車の中で驚かされたのはこれだけじゃなく、もうひとつある。

それは今回、新たに作成されていたギンゾーの遺言書。

前回のも実行はされたけど、結局は生きて帰って来たから、今回こそが本当の遺言ということになる。

それはつまり、ギンゾーの家も土地も預貯金も、全て私に譲るというものだった。

それを母から聞いたときは、ただ驚くばかりであぜんとしていた私。

でも今になってじわじわと泣けてきた。

いくらわが子だからって、こんな親不孝娘のためになぜそこまでするの？

通帳には1千万単位の預金があるらしい。

どうして昔の人って、お金を有意義に使わないんだろう？

ギンゾーはもっと自分のために使うべきだったのに…

生きるのは自分のため。人のためじゃない。

——自分の人生を犠牲にして、ギンゾーには何か楽しいことがあったの？

それで命が尽きてしまったら、人生何もせずに終わることになっちゃうんだよ？

枕が涙で濡れて顔が冷たかった。

とても今夜は眠れないけど、じつくりと回想できたおかげで、ギンゾーという人物像がハッキリと見えたような気がした。

それは、かつて私が抱いていたイメージとは180度違ったもの。大嫌いだった叔父が、私とリュウヤの仲を取り持つキューピットの役割までしてくれていた。

お礼を一生言っても足りないくらい。

死んでからお礼をしても意味がないかもしれない。

でも、この世にまだ御霊^{みたま}が存在するならば、今の私の心の意思表示はきつとギンゾーに届くはず…

——ありがとう。本当にありがとう。心から言える…

「大好きだよ。お父さん」

（続く）

75話 隠されていた過去（後編）（後書き）

次回はやっとエピソードにたどりつきますw

76話 エピローグ

「ぬおおおお〜！」

こんな漫画チックな雄たけびなんて初めて聴いた。

でもこれは紛れもなく、リュウヤの口から発したものだ。

残念ながら気合が入ってる言葉とはほぼ真逆で、極度の緊張と恐怖から。

そう、私とリュウヤは絶叫マシーンを乗り終えたばかり。

今二人で園内のベンチに座り、私はリュウヤの顔面蒼白な表情を目の当たりにしている。

「どうして無理に乗ったのよ？ 苦手だったんでしょ？」

これに乗ろうとしたのはリュウヤ。私がせがんだわけじゃない。

「いやいや…俺自身の勇氣と肝っ玉を育てるためで…」

「勇氣は育たないと思うけど…（^―^;）」

その後、5分くらいでリュウヤの顔にも赤みが戻り、彼は空に向かって大きく深呼吸をした。

「もう少し休まない？ 私たち、今日は立て続けに乗りっぱなしだよ」

「うん…でもちよつと…行きたいところが…」

リュウヤが立ち上がる。

「まだ座ってしようよ。乗り物はまだいいってば」

「いや違うんだ。その…パンツ買いに行かなきゃって…」

「ええっ？ パンツ？ なんでパンツ…って、あ！ まさか…？」

そのまさかもまさか、本当にそうだった。

「チビっちまった…（-_-）」

「Σ―11（-_-）―1ちよつとどうすんのよ」

「だからパンツ買って来るのさ」

「買わなきゃならないくらい漏らしたの？」

「恥ずかしいから漏らした量のことなんか聞くなよ」

リュウヤにそう言われて自分の顔が赤くなつてゆくのがわかった。それと同時に、不謹慎にもなぜか笑いが徐々に込み上げてくる。

「なんだよ。その時間差笑いは」

「だつてえゝ（＊ m ＊）プププツ」

これぞまさにチビリおぱんつ。リュウヤの元の芸名。

こんなたわいもないことに気づいただけで、笑わずにはいられなかった私。

「安佳里、笑いすぎじゃねえ？俺の前の芸名を思い出したんだろ？」

「わかる？（＊＾m＾＊）」

「もうチビリおぱんつは卒業したんだから、すぐに履き替えないとな」

「卒業しなくても汚れたものは履き替えた方がいいよ（＾―＾；）」

「じゃあパンツ選ぶの手伝ってくれる？」

「えー！？私、男性の下着なんて知らないよ。あ、でも買うんだつたら赤がいいんじゃない？」

「なんでだよ？」

「なんかね。赤の下着は幸運に恵まれるんだつて。テレビで女優のFさんが言ってたの」

「でもあの人、離婚したじゃないか？」

「う…それを言われると…」

「まあ、せっかく安佳里が助言してくれたことだし、赤にしてみるかな」

「ホントにそれでいいの？」

「ああ。幸運は金銭面に関してのことかもしれないし、女優のFさんが離婚したのも、あの人の人生においては幸運なことだったのかもしれないだろ？」

「う、うん――； そう考えればそうよね」

広い園内のショップで980円の赤いボクサーパンツを購入して、試着室を借りて着替えたリュウヤ。

なのに店から出た彼の顔はなぜか緊張していた。

「どうしたの？」

と声をかける私。

「なんかさ、赤なんて初めてだから、人に見られたら恥ずかしいな
って」

「見せなければ見えるわけないでしょ――；それとも腰パンしたい
の？」

「そうじゃなくて、こっちの古いパンツを手を持つてるのがさ」

「（ノ――）ノコケツ！」

「なんかみつともなくなえ？」

「店の買い物袋に入れてるんだから平気でしょ！なんなら私がそれ
持つてあげるよ？」

「いやいやいや、それはいい（＾□＾）； さ、気分治して次の乗り
物に行こう！」

相変わらずリュウヤのシャイな面は今も昔も変わらない。

知らなかったのは、彼がこんなに遊園地が好きだったこと。

もうすでに7つのアトラクションをこなしている。

最初は本当に意外で不思議だった。

けど、時間が経つうち、私には徐々にその本当の意味がわかって
きたような気がした。

それは彼に振り回されているときに、ふと頭によぎった瞬間。

――こんなにバタバタしてたら、ムードも何もあったもんじゃ

ない……

ハッ！！（。〇。；）

私がリュウヤの行動の意味に気づいたのはまさにこの時。

考え違いをしていたのは私。

まずひとつ言えることは、決してリュウヤが遊園地大好き人間ではないということ。

リュウヤは無理をしている。彼は、意識的に間を開けないように行動しているだけ。

ここまで、ひとつのアトラクションを終えるたび、間髪入れず次の目的場所へと急ぎ移動してきた。

ランチタイムはバーガーやアイスの食べ歩きで済ましたから、ろくに座るヒマもなかった。

おそらく全てこれらの行動はリュウヤの計算。

でも所詮、こんな疲れる行動には無理があり、このまま最後まで続くはずもない。

秋の夕暮れは早い。疲労度もピークになると、当然ゆっくりもしたくなる。

「次はどこ行こうか？」

なのにリュウヤは今も懲りずに先に進もうとする。自分だって絶対疲れてるはずなのに……

「もういいよ。リュウヤ」

私はここでブレーキをかけた。

「え？」

「もういい。わかったから」

「わかったって…何を…？」

そう、私はもう確信していた。

リュウヤが意識的に私と二人きりで落ち着いた時間を作らないことを。

つまり――

全ては私への気遣いから。

リュウヤの行動は、私のトラウマのことを考えてくれていたからこそだったんだ。

私が自分のトラウマを克服できていないがために、ここまで神経を遣ってくれていたんだ。

彼は何も悪くない。悪いのは私。

――なら私はこのあとどうすればいいの？

――決まってるでしょ。次は私が彼のために尽くす番よ

――あんたにそれができる？

――できるわ。今しなきゃダメ！今がそのきっかけ。ターニン

グポイントよ

私はリュウヤに提言した。ある思いを秘めて。

「観覧車に乗りましょう」

「（□、；）ええっ？それはちよつと……」

「まだ乗ってないでしょ。行こうよ。ちょうど街の灯りも見えてきれいだよ」

有無を言わず、躊躇するリュウヤの手を強引に引っ張って連行する私。

運が味方してくれたのか、タイミングよく、待たずにすんなり観覧車に乗れた私達。

十数秒の無言状態。それを打ち破ったのはリュウヤから。

「やっぱさあ……俺、高いのダメなんだよ」

お互い向き合った席で、うつむきながら話すリュウヤ。

「じゃなんで絶叫マシーンに乗れるの？」

「あれはスピード感があるから…」

と、全然理屈に合わない言い訳。

「じゃあ私、そっち行くね」

「えっ？えっ？！」

「だって怖いんでしょ？」

「バランス悪くなるじゃん」

「リュウヤと一緒にいたいのに！」

「そ…そんなこと…」

強気に見せていた私だけど、もう心臓はバクバク。

席を移動してリュウヤに寄り添った私。

張りつめた空気。そしてまた数秒間の無言が続く。

これじゃダメ。このままじゃ観覧車に乗った意味がない。

——今日こそ1歩進まなきゃ！

意を決した私は、そっと彼の方へ顔を向ける。彼もそれに合わせ
るように私の方へ…

目と目が合った——

——今なら…今この瞬間なら……

私はそのまま静かに目を閉じた。

リュウヤの思いもきつと私と同じはず。

そうよ。きつと…

どれくらい待っただろう。

実際は5、6秒ほどかもしれないけど、5分以上待った気がする。

——チュッ

ついにリュウヤの唇が私に触れた。

けど…けど触れた部分はおでこ。一瞬だけのソフトキス。

私は目を開け彼を見た。ほんのり微笑む彼。というよりもぎこちない笑顔。

やっぱりリュウヤはまだ私に気を遣ってる。一歩ひいてるのがよくわかる。

もう、こんなの終わりにしなきゃ…絶対今日で終わりにさせなきゃ…

私は彼の目を見てキツパリとこう言った。

「リュウヤ。そんなキスなんかしないでよ！」

精一杯の強がり。

「えっ？…だって…安佳里が——」

私は半ば強引に、しゃべろうとするリュウヤの口をキスでふさいだ。

これが長い長いキスの始まり。

不思議だった。

私の胸は張り裂けそうなくらい鼓動が激しいのに、なぜこんな大胆なことができるんだろう？

極度の緊張状態にいるのはリュウヤも同じはず。

でも、その彼が私の腰に手をまわし、そつと体を引き寄せてくれた。

密着する体。やはり彼の鼓動も早い。

私も彼の背中に手をまわし、その両手をかたくロックした。

不思議なことの連続で、まるで夢の中にいるよう。

あれだけの緊張感がウソのようにほぐれてゆく…

座高の違いもあるけれど、私が彼を見上げ、彼は私を見下ろす形で唇を重ね合い、ただひたすらに抱きしめ合っていた。

それは決してディーブな“動”のキスじゃなく、唇だけを深く重ねて感じ合う“静”のキス。心の通い合った愛のキス。

もうキスに違和感なんて感じない。

私の方が先に主導権を握っていたのに、今は完全に受け身の私。

本当に好きな人とキスすると、こんなに幸せを感じるものなの？

ああ…このことにもっと早く気づいていたら…

こんなに長い間、私たちはお互い苦しまなくても済んだのに…

観覧車が今どの位置にあるかなんて、気にも留めなくなっていた。今この瞬間、唇を重ねているこの瞬間、私はリュウヤの中に体ごと溶け込んでゆく気がした。

すがすがしく目覚めた翌朝。

普段、太陽なんか見ない私が起きるとすぐに窓を開け、空を拝んでいる。

夏の日照りのない今の時期、このまぶしさがとてもさわやかで心地いい。

ふと、私の大好きな歌詞が頭に浮かんだ。

私はあなたの空になりたい

優しく強く見つめたい

孤独な道に迷ったら

いつでもここに飛んで来て

楽曲：私はあなたの空になりたい 今井美樹

今の私は未熟すぎて、到底この歌詞の人物には及ばない。だけど、いつの日かこんな心の広い、大きな女性になりたい。今までは人に迷惑をかけ過ぎてきた私。

人に救われるばかりで、救ってあげたことなんてない。

もうこれからは人に頼るんじゃなく、頼られるような人になりたい。

いえ、きつとなってみせる。

こんな私をずっと長い間思い続けてくれたリュウヤ。

彼を温かく包んであげられるような…そんな女性にきつとなるわ。

今日はギンゾーの月命日。

このタイミングを考えると、昨日の出来事もひょっとしたらギンゾーが助けてくれたのかもしれない。

いえ、きつとそう。そういう人だもの。

きつとギンゾーは天にいる。地獄なんかには絶対行く人じゃない。私は秋晴れの青空に向かって語りかけた。

「お父さん、もう大丈夫。私、トラウマを克服したよ。お父さんのおかげだよ」

昨日は週刊GRKISHAにリュウヤのスクープ記事が載る日でもあった。

気にならないと言ったらウソになる。

帰り道にコンビニに寄った私は、表紙記事のタイトルを見て驚いてしまった。

“男・チビりおばんつ再出発！公開プロポーズ！”

もつと批判めいたことを書かれるものと覚悟していたのに、不思議でならなかった。

私はすぐに記事掲載のページを開くと、メインとは別なサブタイトルが目飛び込んできた。

“新事実！湧き出るリリアの男遍歴。チビリおぱんつは捨てられた！”

その記事内容は、数ページに渡って長々と書かれているようだったが、私は読む気にはならなかった。というよりも、読まなくても良かった。

リュウヤの潔白を、取材記者が正しく理解してくれたことで――
―それでもう満足だったから。

部屋の窓から私はできる限りの満面な笑みで、空に両手でピースをした。

道行く通行人にバカだと思われても構わない。そんなのへっちゃら。

今の私には愛するリュウヤがいる。そして心の中にはお父さんだつて。

「見ててね、お父さん。私、絶対幸せになるから」

（完）

76話 エピローグ（後書き）

こんなたわいもない作品を、ここまで読んで下さった読者の方々、心より感謝致します。

ありがとうございます。

できればほんの一言でも感想をいただけたら嬉しく思います。

執筆は日々修行。次作も頑張ります！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0817f/>

キスなんかしないですよ

2010年10月8日12時51分発行